

The

57th

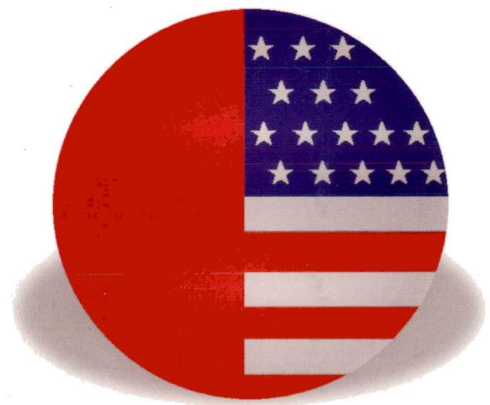
Japan-America

Student

Conference

第57回日米学生会議
日本側報告書

共に創る明日 —戦後60年を振り返る—
Exploring the Roles and Possibilities
of the Japan-America Partnership



第 57 回 日米学生会議 日本側報告書

目次

序章	日米学生会議概要	3
	日米学生会議の歴史 日本側実行委員長挨拶 アメリカ側実行委員長挨拶 内閣総理大臣からのメッセージ 本文中の略語について	
第1章	第57回日米学生会議概要	9
	テーマ 概要 参加者一覧 メディアへの掲載	
第2章	事前活動	17
	春合宿 勉強会 防衛大大学校訪問	
第3章	本会議・サイト活動	25
	滋賀・京都 広島 沖縄 東京	
第4章	本会議・分科会活動	47
	1 文化——伝統とポップ 2 ジェンダーとアイデンティティ 3 社会変動と政策 4 安全保障と平和構築 5 地域主義 6 世界市場経済と日米社会の再編成 7 科学技術と社会 8 グローバリゼーションの功罪	
第5章	参加者の声	73
第6章	第57回日米学生会議概要	105
第7章	日米学生会議に	
	ご協力いただいた方々	111

序章

日米学生会議概要

日米学生会議の歴史

日本側実行委員長挨拶

アメリカ側実行委員長挨拶

内閣総理大臣からのメッセージ

本文中の略語について

日米学生会議 70 年の歩み

初期の日米学生会議（1934～1940 年）

日米学生会議は、1934 年満州事変以降悪化しつつあった日米関係を憂慮した日本の学生有志により創設された。米国の対日感情改善、日米相互の信頼関係回復が急務であるという認識の下、彼らは「世界の平和は太平洋の平和にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念を掲げ会議創設に努めた。当時の学生有志は、全国の大学の英語研究部、国際問題研究部からなる日本英語学生協会（国際学生協会の前身）を母体として、自ら先頭となって準備活動を進めていった。資金、運営面で多くの困難を抱えながらも 4 名の学生使節団が渡米し全米各地の大学を訪問して参加者を募り、総勢 99 名の米国代表を伴って帰国した。こうして第 1 回日米学生会議は青山学院大学で開催され、会議終了後には満州国（当時）への視察研修旅行も実施されるに至った。日本側の努力と熱意に感銘した米国側参加者の申し出によって、翌年第 2 回日米学生会議が米国オレゴン州ポートランドのリードカレッジで開催され、以後 1940 年の第 7 回会議まで日米両国で毎年交互に開催された。しかし、太平洋戦争勃発に伴い、日米学生会議の活動も中断を余儀なくされた。

戦後の日米学生会議（1947～1954 年）

戦争の終結によって会議は再開を見たものの、戦前とは異なり、1953 年までは日本のみでの開催となった。翌 1954 年、戦後初の米国開催として第 15 回日米学生会議がコーネル大学で開催されたが、その後、資金問題、日本人学生の参加者の不足、米国における財政援助の中断などに悩まされ、会議は 1955 年から 1963 年まで再び中断された。

今日の日米学生会議（1964 年～2004 年）

1964 年、OB/OG からの会議再開を望む声に応え、会議創始者の一人である故板橋並治が理事長を務める財団法人国際教育振興会の全面的支援の下に、会議が再開された。第 16 回会議はリードカレッジで開催され、77 名の日本人学生と 62 名の米国人学生が参加した。1973 年の第 25 回会議では、限られた日程の中での議論をより効率的かつ集中的に行うために、毎回テーマを設定し、期間を 1 ヶ月とするなど現在の会議の基本形態が整備された。

日米学生会議は、70 年の歴史において、学生による企画、運営という方針を貫いてきた。しかし創設時と今日で日米両国を取り巻く環境は大きく異なっており、会議の形態自体も変化を重ねている。日米両国が新たな関係の構築を迫られている現代において、日米学生会議は、創設当時の理念を受け継ぎつつ、時代の変化に対応してゆく柔軟性を求められているといえよう。

日本側実行委員長挨拶

日本のアニメの素晴らしさについて真剣に語る米国側参加者。コーヒを片手に Slang を使いこなす日本側参加者。本来、日米学生間の相互理解を目的として 70 年前に創設された日米学生会議だが、グローバル化が進み、留学など海外経験が珍しくない現代では、個人のアイデンティティは「日本」「米国」という国家という枠組みよりも、独自の経験や価値観によって形成されるようになったようだ。そんな世界に生きる私たちの課題とは何か。それは、自分と違う背景を持った人を受容するための想像力と、多様な価値観を許容するための理解力ではないだろうか。第 57 回日米学生会議は、まさに様々な人間がありつたけの想像力と理解力を駆使して創り上げた、非現実的ではあるが非常にユニークな共同体である。

戦後 60 年を迎える今年、第 57 回日米学生会議は”Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership”というテーマのもと、滋賀・京都、広島、沖縄、東京にて、思う存分語り合った。毎日、眠気や疲れと戦いながら、朝から晩まで答えの見えない数々の問題に対して、出来る限り自ら見聞し、感じ、議論することを徹底し、自分達なりのアプローチを熟考した。滋賀・京都では、文化や環境問題の実地的な取り組みについて学び、広島では被爆者のお話や平和教育を見聞しながら平和について議論した。地上戦の舞台となった沖縄では戦争や基地問題について、そして東京では、北京大学から学生を招聘して日中米について議論し、報告会という形での社会発信を目指した。そしてそこで得たものは、日米の役割は何かというわかりやすいコンセンサスではなく、その根幹にある価値観の多様性の発見であり、多様な集団の中での自分自身の価値観の再考、そして成長であった。

第 57 回日米学生会議を終えた今、素晴らしい仲間に出会った喜び、会議で感じた限界に対する無力感、学んだことを行動に移さなければならないという焦り、運営や企画面での力不足に対する反省、答えの見えない諸問題に対する混乱など、様々な感情が混在している。この体験をすべて消化するためにどれほど時間がかかるかはわからないが、この衝撃こそが日米学生会議の意義であり、持続性なのではないかと考える。そして今後、この一ヶ月間で得た相互理解、葛藤、共感などが、今後私たち一人ひとりの人生において揺るぎないエネルギーの源となると信じる。

最後になりましたが、第 57 回日米学生会議に際し、多大なご協力を賜りました後援団体の皆様、様々な形で御賛助下さいました財団・企業の皆様、日本での開催に特にご尽力いただきました立命館大学、沖縄県・糸満市、東京アメリカンセンターの皆様、日米学生会議アラムナイの皆様、限りないご支援を下さった国際教育振興会の皆様、そしてその他様々の形でご支援頂きましたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

第 57 回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長 杉田 道子



アメリカ側実行委員長挨拶



The 57th JASC was about “Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership.” For 30 days we met, traveled, discussed, read, debated, thought and toured all in the name of exploration. We visited many significant historical places such as temples, shrines, museums and memorials to learn about the past and what was. All this was part of an attempt to build a common foundation and shared platform of ideas for discussion and learning. It helped provoke sincere thought, consideration and dialogue among delegates across the international boundaries of culture and language. I believe this month has inspired us to look back as well as ahead to better evaluate our present circumstances and future potential.

During such an experience, many of us find it important to ask the question, “What is the meaning of JASC?” This is an important question, but I believe it is best asked from our current point of view—after the conclusion of the Conference. The pace of the schedule is so fast throughout the month that it’s often days, weeks, maybe even months after the Conference ends before reality sets in and we truly realize what we have accomplished. We have done more things in our one month together than many of our peers may ever do in their lives. We may not have ended up with a lengthy document or report that people might browse and hide away on a shelf, but we did establish bonds and have experiences together that will serve greater purpose than any document could, both now and in the future.

Looking back on our last few days together, I recall feeling that the conclusion of the Conference was bittersweet. It was hard to grasp the reality that the work the 57th EC was nearly complete. It was even harder to believe that our month together was over and that we would soon be missing our roommates, roundtable members and other JASC friends. Yet, these feelings were also a sign of something positive; that we had succeeded in keeping JASC alive for another year and that we had truly achieved the mission of promoting friendship and mutual understanding between people of our two nations. Although it is great that we were able to have an academic framework for the month, I believe it is the bonds of friendship and the human network that will mean the most to us in years to come.

In one final note, I would like to extend my appreciation to all those that worked to make the 57th JASC possible: IEC and JASC, Inc. for their leadership and oversight to ensure the continuation of JASC; my fellow members of the 57th Executive Committee for their hard work and endurance to make it through the year; and the members of the 57th delegation for their patience, enthusiasm and various efforts to enjoy and improve JASC. Finally, I would also like to offer thanks to all of our alumni and outside supporters who made contributions to our Conference. Without their donations of time, funds, meeting locations and other important contributions, JASC 57 could not have been so successful. It was truly my pleasure to have met you all and I look forward to crossing paths many of you in the future.

Ashley Neeley

内閣総理大臣からのメッセージ

第 57 回日米学生会議の開催を、心よりお祝い申し上げます。

日米学生会議が 1934 年より現在に至るまで 70 年以上にわたり、日米の学生たちの企画・運営により活動を続け、日米の学生の相互理解と友情の促進に寄与してきたことを喜ばしく思います。

本年は戦後 60 年という節目の年に当たります。日米両国は、この 60 年間、政治、経済、文化などあらゆる分野における交流を深めてきました。日米両国は、「世界の中の日米同盟」との考えの下、国際社会が直面する諸問題に対し緊密に連携して対処してきました。その両国の未来を担う若い学生が、約 1 か月間を共に過ごし、様々な活動を通じて、お互いの考え方や文化の違いを知り、その上に立って相互理解を深めることは大変有意義であると考えます。

本年の日米学生会議は、「共に創る明日～戦後 60 年を今日振り返る～ Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership」というテーマを掲げています。これまでの日米両国の歩みを振り返り、未来の日米関係のあるべき姿、また国際社会における共通の問題への両国の取組について議論をすることは、必ずや皆さんの将来にとって有益なものとなるでしょう。

この会議が、実り多いものとなり、皆さんが末長い友情を育まれることを期待します。

内閣総理大臣 小泉純一郎

本文中の略語について

日米学生会議では参加者が日常的に用いる略語及び慣用語があり、本文でもしばしば登場しています。以下、一覧にしますので、お読みになる際の参考になさってください。

JASC : 「日米学生会議／Japan-America Student Conference」の略。

JASCer : 「日米学生会議参加者」の意。

JASC, Inc. : アメリカ側主催者 “The Japan-America Student Conference, Inc.” の略。

EC : 「実行委員会」または「実行委員／Executive Committee」の略。

デリ : 「参加者／delegation」の略。

ジャパデリ : 「日本側参加者／Japanese Delegation」の略。

アメデリ : 「アメリカ側参加者／American Delegation」の略

アルムナイ : 「日米学生会議のOB/OG」の意。

サイト : 「本会議開催地」の意。第57回会議では滋賀・京都、広島、沖縄、東京がこれにあたる。

テーブル : 「分科会／Round Table」の意。

JRT : 本会議中のプログラムの一つ、「ジョイントラウンドテーブル／Joint Round Table」の略。

CWD : 本会議中のプログラムの一つ、「全体討論／Conference-Wide Discussion」の略。

ST : 本会議中のプログラムの一つ、「スペシャルトピック／Special Topic」の略。

リフレクション : 本会議中のプログラムの一つ、「反省会」の意。

第1章

第57回日米学生会議概要

テーマ

活動概要

第57回日米学生会議参加者一覧

メディアへの掲載

テーマ

Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership

共に創る明日 ～戦後60年を今日振り返る～

第57回日米学生会議は、“Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-America Partnership”「共に創る明日～戦後60年を今日振り返る～」をテーマとして掲げ、滋賀・京都、広島、沖縄、東京で開催される。歴史軸を念頭に、環境問題でも注目されつつある滋賀・京都で日本の根底にある精神や伝統に触れ、次に広島で、原爆の悲劇、戦後の復興や平和について考える。地上戦の舞台となった沖縄では、戦争が終わった現在も抱える基地問題を踏まえ、安全保障問題を中心として日米関係について議論を交わす。そして、会議の成果を情報の発信地である東京にて発表する。あらゆる議題について、日米双方の参加者と現地の人々の視点から考察し、率直に意見を発表すること、また、意見や経験の異なる者同士で学び合い、理解を深めることを目標とする。戦後60周年を迎えて、私たちはどのような世界に生きているのか。歴史を共に振り返り、その延長線上に生きる私たちの現在を認識し、未来を見つめなければならない。グローバル化、地域主義、テロリズムや対テロ戦争、核問題、情報化社会など様々な要因によって世界情勢は日々めまぐるしく変化し、その中で日米関係のあるべき姿が改めて問われている。そのような今こそ、日本と米国という二大国家のパートナーとしての可能性を十分に模索しながら、現代における役割を認識するために討議する意義は非常に大きいのではなかろうか。学生という立場には、限界があるかもしれない。しかし、私たちは学生だからこそ、肩書きにとらわれず、利害関係を超えた議論ができると信じている。日本各地の訪問、率直な意見交換、講師を招いた勉強会や講演会、フィールドトリップや文化交流を通じて、私たち自身について、そして私たちが創るべき未来について考えることを目的とする。

活動概要

事業内容

主催

財団法人 国際教育振興会

後援

外務省、文部科学省、米国大使館、日米文化センター
財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

企画・運営

第57回日米学生会議実行委員会

期間

2005年7月27日～8月23日

開催地

滋賀・京都、広島、沖縄、東京

参加者

日本側・米国側 各38名（実行委員各7名を含む）

会議運営

2004年夏に開催された第56回日米学生会議の最終開催地であるプリンストンにて、日本側参加者と米国側参加者の中から第57回日米学生会議実行委員が選出され、第57回日米学生会議実行委員会が発

足した。実行委員会は、第56回日米学生会議での経験を参考に、会議のテーマや開催地など会議の枠組みについて議論を重ね、基本方針を”Princeton Agreement”という宣言に明文化した。

日本側のこれまでの実行委員会の歩み

8月	第57回日米学生会議実行委員会発足
9月	役職引き継ぎ、予算案作成、理念合宿
10月	後援申請、ポスターや実施要綱、リーフレットの作成、HP立ち上げ準備
11月	HP立ち上げ、広報活動、財務活動開始
12月	OB会総会、広報活動、講演会、財務活動
1月	参加者応募受付、本会議準備、広報活動
2月	選考試験問題作成、選考合宿
3月	第1次選考試験、第2次選考試験、選考合宿（参加者決定）
4月	財務活動、本会議準備、OBとの懇談会
5月	財務活動、本会議準備、春合宿の準備、春合宿
6月	講演会、勉強会、防衛大学校訪問、本会議準備
7月	講演会、勉強会、日本側直前合宿、本会議

本会議概要

分科会

日米両国の参加者は全員、各自の興味や関心のもとに8つの分科会のいずれかに所属し、レポート作成、プレゼンテーション、ディスカッション、フィールドトリップなどの活動を通して議論を重ねた。報告会では、会議のテーマに沿って各分科会ごとに命題を設定し、政策提言という形で意見を発表した。

分科会テーマ

- ・ 文化—伝統とポップ Culture: Tradition and Pop
- ・ ジェンダーとアイデンティティ Gender, Sexuality, and Identity
- ・ 社会変動と政策 Emerging Social Problems and Phenomena: Issues and Legislation
- ・ 安全保障と平和構築 International Politics
- ・ 地域主義 Regionalism
- ・ 世界市場経済と日米社会の再編成 Globalization and Economic Restructuring in Japan and the US
- ・ 科学技術と現代社会 Science and Technology: Social Responsibilities
- ・ グローバリゼーションの功罪 Social and Cultural Implications of Globalization

スペシャルトピック

スペシャルトピックは、論題が既に固定された分科会とは異なり、様々なトピックを参加者が興味に従って自由に設定し、自発的な意見交換、議論、交流を行うものである。人種問題やNGO、音楽や恋愛事情、また人権問題などを話すグループもあれば、「理想的な社会とは何か？」というような観念的な議論を交わすグループもあり、自主性に富んだ、活発な議論の場を持てた。

全体討論

分科会やスペシャルトピックがグループごとに異なる論題について議論をするのに対して、全体討論では参加者全員が一つのテーマについて話し合った。語学の壁や、それまでの活動を振り返って考えや意見を共有し、以降の活動をよりよくしていくために有意義な機会となった。

第57回日米学生会議参加者一覧

日本側実行委員

荒島 由也	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年
伊東 孝哲	慶應義塾大学	総合政策学部	4年
ザン リンダ	慶應義塾大学	別科日本語研修課程	1年
杉田 道子	国際基督教大学	教養学部国際関係学科	3年
出浦 寛子	慶應義塾大法学部	法律学科	3年
袴田 隆嗣	東京大学大学院	公共政策学教育部公共政策学専攻	修士1年
福田 愛奈	お茶の水女子大学	生活科学部人間生活学科	3年
三谷 佳孝	立命館大学	国際関係学部	4年

日本側参加者

浅岡 真依	津田塾大学	学芸学部英文学科	3年
伊藤 朋子	早稲田大学	国際教養学部	2年
伊藤 雅俊	早稲田大学	商学部	3年
井上 雅章	慶應義塾大学	理工学部システムデザイン工学科	4年
井上 裕太	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年
加藤 康広	東京大学大学院	工学系研究科先端学際工学専攻	博士2年
唐澤 由佳	慶應義塾大学	経済学部	3年
木原 由貴	福井大学	教育地域科学部	4年
キム ビヨンス	一橋大学	社会歴史研究科	修士1年
国松 永喜	明治大学	二部政治経済学部経済学科	3年
佐藤 愛	早稲田大学	国際教養学部	1年
佐藤 広大	国際基督教大学	教養学部 情報科学学科	4年
重原 由佳	国際基督教大学	教養学部社会科	2年
篠原 舞	東京女子大学	文理学部社会学科	1年
島村 明子	東京大学	教養学部文科一類	2年
張 文涵	慶應義塾大学	法学部法律学科	2年
津端 幸江	近畿大学	生物理工学部遺伝子工学科	3年
中里 広明	早稲田大学大学院	経済学研究科	修士1年
中島 朋子	慶應義塾大学	文学部人文社会学科	2年
生板 沙織	慶應義塾大学	総合政策学部	2年
錦 信吾	鳥取大学	医学部医学科	3年
沼田 雄二郎	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年
波多野 綾子	東京大学	教養学部総合社会学科	3年
樋口 宏	立教大学	法学部国際比較法学科	4年
藤原 智生	鳥取大学	農学部生物資源環境学科	3年
ガラ プスピアルディニ	九州大学	21世紀プログラム	2年
古川 啓之	東京大学大学院	公共政策学教育部公共政策学専攻	修士2年
前田 薫	慶應義塾大学	法学部政治学科	3年
森 賢子	青山学院大学	国際政治経済学部国際政治学科	4年
山内 拓磨	立命館大学大学院	国際関係研究科	修士1年
山田 裕一朗	同志社大学	経済学部経済学科	3年

第57回日米学生会議米国側参加者

American Executive Committee (AEC)

Mr. Hunter McDonald	Harvard University	East Asian Studies	Sophomore
Ms. Anna Franekova	Harvard University	Government	Senior
Mr. Lasantha Gunasekara	Cornell University	Neurobiology	Senior
Ms. Michelle Lee Jones	University of Chicago	History	Junior
Ms. Ashley Neeley	University of Maryland	Chinese/ Communication	Post Graduate
Ms. Elspeth Spransy	Eckerd College	Int'l Relations/Political Science	Senior
Ms. Tina Toal	Widener University	International Relations	Senior

American Delegation

Mr. Francisco Arechigo	University of Chicago	Humanities	Junior
Mr. John Baldrige	Northeastern State University	Geography	Junior
Ms. Brenna Gannon	Drake University	International Business/Marketing	Junior
Mr. Michael Haubert	Sul Ross State University	Geology	1st Year
Ms Yui Hirohashi	Harvard University	Sociology	Junior
Mr. Ken-Cheng Hsiang	Washington and Lee University	Economics/East Asian Studies	Sophomore
Ms. Yoko Kamitani	George Washington University	International Affairs	Senior
Ms. Melissa King	Smith College	Anthropology	Sophomore
Mr. David Langstaff	Durham Technical Community College	History/Economics	1st Year
Ms. Candice Laurman	University of California, Berkeley	Film Studies	Senior
Mr. Stanton Lawyer	Howard University	Political Science/History	Senior
Ms. Madison Levitan	Dickinson College	Undeclared	1st Year
Ms. Thea Lorentzen	Stanford University	Civil Engineering	Junior
Mr. Geoffrey Lorenz	Duke University	Political Science	Junior
Ms. Florence Maher	Earlham College	International Studies	Sophomore
Mr. Mike Miello	Duke University	Comparative Int'l Studies/French	Senior
Ms. Charlene Morales	Cornell University	Industrial and Labor	Junior
Ms. Rachel Olanoff	Tufts University	Biopsychology/Asian Studies	Sophomore
Ms. Sydnie Reed	Princeton University	Economics	Sophomore
Mr. Lane Rettig	University of California-Berkeley	Computer Science/Japanese	Senior
Mr. Paul Reynolds	Santa Fe Community College	History	Sophomore
Mr. Sheehan Scarborough	Harvard University	Government	Sophomore
Mr. Steven Schroeder	University of Puget Sound	Undeclared	1st Year
Mr. Benjamin Seligman	Cornell University	Biological Sciences	Sophomore
Mr. Derek Sheridan	University of Chicago	Anthropology	Sophomore
Mr. Alexander Soriano	University of Chicago	Mathematics	Senior
Mr. Paul Thornton	University of North Texas	International Studies	Senior
Mr. Loc Van	Cornell University	Biology/Business	Sophomore
Ms. Kelly Varsho	University of Wisconsin-Madison	History/Economics/East Asian Studies/	Senior
Mr. Matthew Wright	University of Washington	Japan Studies	MA
Ms. Lina Yamashita	Oberlin College	Biology/History	1st Yea

メディアへの掲載

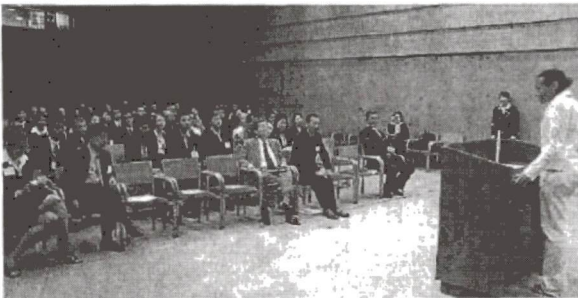
テレビへの出演

- NHK 広島 ニュース枠 (放送済)
- TBS系 ニュース23 (2005年12月放映予定)

新聞への掲載

- 7月23日 読売新聞 (第57回日米学生会議実行委員長 杉田道子)
- 7月29日 京都新聞 (第57回日米学生会議開会式)
- 7月31日 滋賀新聞 (第57回日米学生会議環境プロジェクト)
- 8月5日 毎日新聞 (第57回日米学生会議広島会議)
- 8月5日 中国新聞 (第57回日米学生会議広島会議)
- 8月9日 沖縄タイムス (第57回日米学生会議沖縄レセプション)
- 8月9日 琉球新報 (第57回日米学生会議沖縄レセプション)

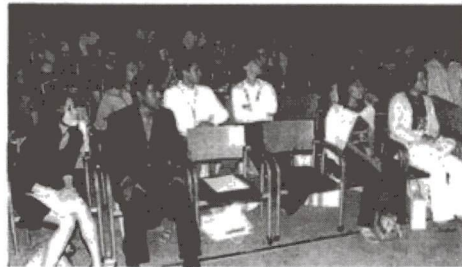
開会式で抱負を述べるアシュリー・ニーリーさん (草津市・立命館大びわこ・くさつキャンパス)



「学生から平和発信」

日米の学生が約一カ月間、共同 米軍基地訪問、フォーラムなどを生活しながら環境や平和などに 催し、会議の成果を発信する。 について勉強会やワークショップを 開会式には、日米の学生七十七 開き、学び話し合う「日米学生会 人が出席、主催する国際教育機関 議」が二十八日、草津市の立命館 会の大井孝理事長らあいさつに 大びわこ・くさつキャンパスで開 続き、日本側の実行委員長で国際 幕した。 基督教大三年の杉田道子さん(三 同会議は、一九三四年に発足し が二年間、準備してきた成果を 出した」と 決意を述べ だ。米側委 員長のアシュリー・ニーリー 大国際的な学生交流プログラム「さん(三)もこの日をすつと案 で、日米の学生スタッフを中心に しみにしていたと話した。 五十七回目の今回は、「共に創 会の緒方四十郎副会長の基調講 演がテーマ、学生たちは八月二 十三日まで、京都、広島、沖縄な 「環境プロジェクト」を予定し などを巡り、平和記念式典への参列、 ている。

京都新聞、7月29日付



日米両国の環境問題への取り組みや考えを発表した「環境プロジェクト」(立命館大びわこ・くさつキャンパス)

日本と米国の大学生 境に関する勉強会など を催してきた。 米国の学生は、今回 京都議定書に批准し ない理由として民主 共和両党の見解を紹 介。議論が科学的では なく、政治的に進んで いる点を取り上げた。 一方、日本側からは 福井大教育地域科学部 4回生の木原由貴さん 手廻に移し毎年開催 (22)が報告。各自の 目標を書き込む「IS ーカード」の発行な 返る」をテーマに、 8月23日まで広島、沖 けて向大文京キャン 細ならを訪問、その間 バスで続けられている に議定書の項目を裏説 する。

滋賀新聞、7月30日付

日米学生議定書を宣言 両国44大学集い環境会議

立命館大くさつ

プロジェクトの最後 には日米の違いを超え て、学生としてできる ことをまとめた「京都 議定書」を採択、階段 を使う▽水筒を持ち 歩く▽自転車乗車を 低減する18項目の行動 を挙げた。代表として 定書を読み上げた学生 は「これが私たちの未 来を考える始まり」と 締めくくった。 同会議は両国学生の 交流を深め、互いに得 ていくことを目的に掲 げる。隔年で会場を相 替る。今年も「共に創る明日 目標を書き込む「IS ーカード」の発行な 返る」をテーマに、 8月23日まで広島、沖 けて向大文京キャン 細ならを訪問、その間 バスで続けられている に議定書の項目を裏説 する。

「若者の連帯で核なくそう」

日米の大学生が意見交換

女学院中・高

日米の大学生が国際関係について話し合う第57回日米学生会議広島会議が4日、中区上鞆町の広島女学院中・高ホールであった。漫画「はだしのゲン」の作者、中沢啓治さん(83)を招いたパネルディスカッションがあり、約80人が世界平和について意見交換した。

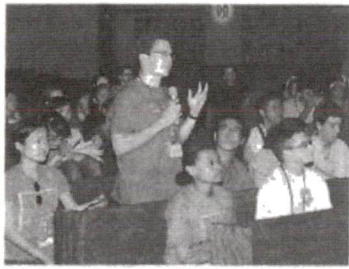
会議は日米交流を狙い、毎年開いており、県内では4年ぶり。今年是被爆60年にあわせ、午前中に原爆ドームを見学した後、ディスカッションを開いた。学生からは「日本は被爆体験を生かし、もっと世界に核廃絶を訴えるべきだ」などの指摘があり、中沢さんは「世界の未来を担う若者が、核をなくす努力をしてほしい」と呼び掛けた。



世界平和について意見を交わす日米の大学生ら＝中区上鞆町の広島女学院中・高ホールで

核廃絶願い意見交わす

広島 80人参加し日米学生会議



平和や核兵器について意見を交わした日米の大学生

日米学生会議広島会議(国際教育振興会主催)が4日、広島市中区の広島女学院中・高校で開かれた。西国の大学生約八十人が参加し、被爆者らの話を聞き、広島への原爆投下や核兵器廃絶について意見を交わした。

「はだしのゲン」で知られる漫画家・被爆者の中沢啓治さん(83)と埼玉の県立高生、被爆者の心の問題を研究する精神科医師・長崎国際大の中根充文教授(65)、英国の大学院で平和学を専攻する野上田美子さん(30)の発表

「はだしのゲン」で知られる漫画家・被爆者の中沢啓治さん(83)と埼玉の県立高生、被爆者の心の問題を研究する精神科医師・長崎国際大の中根充文教授(65)、英国の大学院で平和学を専攻する野上田美子さん(30)の発表

に基づき、議論した。中沢さんは被爆体験、中根教授は長崎被爆者が受けた精神的影響、広島出身の野上さんは平和教育について報告。米

米国の学生から「各国が連鎖反応で核兵器を増やす懸念の中、米国の役割は」と問われ、野上さんは核軍縮に向けたイニシアチブを求めた。

終了後、早稲田大三年生の伊藤明子さん(21)は「平和のために何ができるかを考えるきっかけになった。ハーバード大三年のシーエン・スカイ

中国新聞、8月5日付

毎日新聞、8月5日付

日米学生会議始まる

76人参加 各地巡り沖縄問題学ぶ



牧野浩隆副知事(左)と談笑する第57回日米学生会議参加者＝8日夜、糸満市西崎町のNBCサムシングフォー西崎

【糸満】日米の学生が、会議には、日米の学生計七十六人が参加。同日、日本各地を訪れ二日間のさまざまな問題を議論する第五十七回日米学生会議(主催・国際教育振興会)の沖縄での会議が八日、糸満市内で始まった。

田直子さん(20)国際基督教大学は「日米関係にはさまざまな問題がある。沖縄での議論を現在、未来の日米関係を考える第一歩にしたい」とあいさつ。米側実行委員長のアシユリー・ニリーさん(20)メリーランド大学は「沖縄は日米のパートナーシップの象徴であるとともに、日米間に懸案があることを端的に示す地でもある。沖縄で学んだことを今後の日米関係のために役立てたい」と決意を語った。

琉球新報、8月9日付

第 2 章 事前活動

春合宿

勉強会

防衛大学校訪問

春合宿

2005年5月3-5日 オリピックセンター

5月3～5日、参加者の初顔合わせである春合宿が行われた。短期間ではあったが夏の本会議へ向けての本格的な第一歩となった。

1日目は、まず自己紹介やアイスブレイキングを行い、全員の顔と名前が一致したところで、会議についての詳しい説明を受けた。第56回のビデオ鑑賞会もあり、参加者のモチベーションが上がった。その後、初めて分科会ごとのミーティングをしたり、夜にはディスカッションタイムがあったりと、緊張もすっかりとけ、初日から充実したものとなった。

2日目は分科会報告や日本語・英語のディスカッションがあり、終始和やかなムードと活発な議論であった。夕方には、Alumni Receptionで多くのOB・OGにご臨席いただき、色々なお話をうかがうことができた。

3日目は今後の予定について説明を受けたり、参加者にも仕事が割り当てられたりと参加者たちが中心となって57回会議を開拓していく、という雰囲気が創られた。



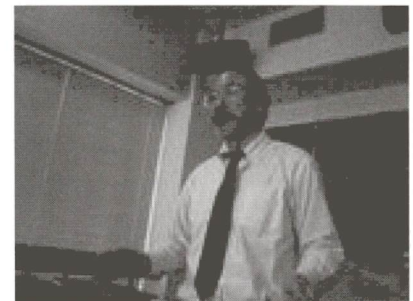
ディベート講習会

2005年5月21日、28日 日米会話学院

講師：井上敏之氏

講師略歴

慶應大学経済学部卒業。(株)ミキモト、ユニバーサル葉タバコ会社代表を経て、95年に独立。(有)スピーチディベート研究所を設立し、現在に至る。コーチとしてだけでなく、自身もディベーターとして数多くのコンテストで優勝し、活躍中。第16回日米学生会議参加者。

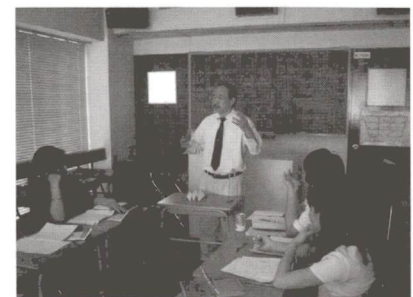


勉強会内容

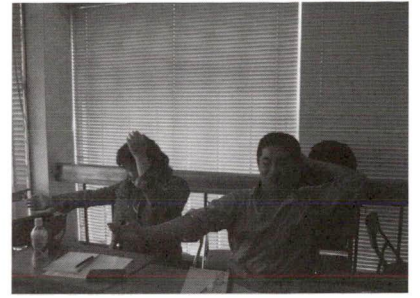
2週に渡り、英語ディベートの基本練習・実践講座を教えて頂いた。

1週目は論理的・効果的にプレゼンテーションを行う構成である、PREP(Point, Reason, Example, Point)と、OBC(Opening, Body, Conclusion)について教えていただき、二人組で実践した。その後、"Should Prime Minister Koizumi stop official visit to Yasukuni Shrine?"と"Should we abolish death Penalty?"という論題で即興ディベートを行った。2週目の「実践編」では、「単一民族国家は多民族国家より優れている」「日本にとってアメリカよりも中国と友好的な関係を築くべきである」の2つの論題に分かれ、2対2のディベート練習を行った。

多岐に渡る難しい論題のもとに、限られた時間の中で自分の言いたいことを論理的に第三者に伝えるのは非常に難しく、public speaking



と time management の重要性と困難さを痛感させられた。それだけでなく、日頃から知識のストックを増やしつつ自分の考えを持つ必要性、人前でプレゼンテーションを行う際に必要な度胸、第三者であるジャッジの視点を考える客観性などにも気付くことができた。本会議中に英語で討論する際や発言をする際にはより一層高度な技術が求められたが、この経験が大きな助けとなったのだった。英語ディベートの技術が公式な場で役に立つか、ということのを改めて認識させられた。



防衛大学校見学

2005年6月10日 防衛大学校

朝9時過ぎ、小雨と朝露の立ち込めるなか、一同は防衛大学校に到着した。防衛大学校とはどのようなところなのかという疑問を抱きながら、防大校内へ案内された。最初に学校長からのご挨拶をいただき、謹聴する一同。そして学校の広報 VTR を見せていただき、一般の大学生とは180度異なる、陸上戦闘訓練や寮での厳しい掃除や点呼の風景を目の当たりにした。新しい発見に驚きを覚えながらも、次に防大の講義を受け、日米学生会議の為に特別に日米同盟と日本の防衛政策について講義をしていただき、ここでも新たな発見の連続であった。正午、普段から防大生が食事をする食堂で昼食をいただいた。皆、箸ではなく口を休める暇なしに、お互いの生活の違いなどを話し合い、交流が活発であった。



午後には実際に行われているゼミに数人のグループで聴講させていただいた。統率・国防・戦略・戦史等の科目は一般の大学には無い為、内容を理解するのが難しいものもあり、日米学生会議の参加者が議論でとまどった場面もあった。

そして最後は日米学生会議の分科会のトピックに基づいて防大生とのディスカッション。会議参加者たちは学術的なロジック、防大生は国防の見地から各々の意見をぶつけ合い有意義な討論を交わした。懇親会で更に交流を深めたあと、名残惜しくも一同はそれぞれ感じたことを胸に防衛大学校を後にした。



日米・日韓・日中学生会議合同勉強会

2005年6月12日 東京大学駒場キャンパス

6月12日、東京大学駒場キャンパスに40人近い学生が集まった。東アジアにおける地域内協力体制について、経済や政治と安全保障、文化という視点から議論を行った。10人程度のグループに分かれてのディスカッションを行った。特にテーマは決めず、グループのメンバーが興味を持っていることについて議論した。

ヨン様・韓流ブームなど「大衆文化は東アジア人としての共同意識とアイデンティティを作り上げるか？」から「朝鮮半島の南北統一」「沖縄の米軍基地」「東アジアでの相互安全保障と日米安保」までテーマは幅広く、韓国からの留学生のいわば“生の声”を参考にしながら、議論は進められた。また、「東アジア共同体のメリット」を FTA や労働力の移動から安全保障の面まで検討していくうちに、「戦後補償問題・歴史認識のギャップ」へと議論は進んだ。ハーバードで東アジアについて学んでいるアメリカ人の学生からは“外部の視点”を、中国で生まれ育った参加者からは“実際にはどのような雰囲気なのか”について教わった。

その後、軽食を食べながらの交流会へ。日本のインディーズロックと高円寺が好きなアメリカ人やロンドン大学でメディアについて学ぶ韓国人など、それぞれ異なるバックグラウンドを持つ参加者との交流は刺激に満ちたものだった。それぞれ違う団体に所属し、考え方や視点の違う学生達と交流できた。物事を様々な切り口から捉えることで、自分では気づかなかった視点を知り、問題への理解が深まった。



横浜山手中華学校訪問

2005年6月22日

学校法人 横浜山手中華学園 横浜山手中華学校

6月22日の午前中、横浜山手中華学校見学を行った。横浜山手中華学校は、全国に5校しかない中華学校の一つで、108年という長い歴史があり、現在では幼稚園から中学校まで約400人の生徒が在籍している。生徒の国籍は様々で、現在では華僑だけでなく、日本国籍を取得した華人、日本人、来日した中国人など、さまざまなバックグラウンドを持つ子供たちが、一緒に勉強している。

私たちは、まず校長先生にお話を伺い、それから授業を見学させて頂いた。横浜山手中華学校の教育の特色は、卒業生の全員が日本の学校に進学するので、統一的な中華文化と中国語の教育を行いつつ、高校受験を意識したカリキュラムを行っていることである。このような教育方針のもと、「素質教育」と「中国語、日本語のバイリンガル教育」を実践している。ここでいう素質教育とは、「能力開発教育」のようなもので、学校内の壁いっぱいに飾られた、子供たちの作品や成果は、まさにこの教育の良い例であった。このようにすべての子供たちの作品を展示することで、人それぞれの違いを意識することし、自分と、相手を認めることを学びとって欲しいという校長先生の狙いがあった。また、バイリンガル教育では、「読む」「聞く」「話す」「書く」をバランスよく強化するために、中国の学校と協力して作ったオリジナル教科書を用いて学習していた。

実際に授業を見学して、先生たちと子供の距離の近さや、子供たちの授業中の積極的な態度が非常に印象的であった。また、「謝謝」に「对不起」、「ありがとう」に「どうも」と返答してくれた生徒は、言語の切り替えがとても自然で、アイデンティティについて考えさせられたと話す参加者もいた。

横須賀基地見学

2005年6月25日 米海軍横須賀基地

基地を肌で感じる

6月10日の防衛大学校見学で知りあった防大生の案内のもと、米海軍横須賀基地を見学した。横須賀は沖縄と同様に米軍の街として有名であるが、基地内には軍関連の施設はもちろん、隊員の日常生活に必要な店なども全て揃っていて、基地だけでも1つの街を形成している。

横須賀中央駅にて防大生と再会し、国道16号沿いの正門まで徒歩で移動した。入構手続きを終えベース内に踏み入れると全てがアメリカ風になり、まるで海外旅行に来たような錯覚を覚えた。興奮と多少の不安の中、岸まで歩くと停泊中の自衛隊の潜水艦に遭遇した。さらに進むと整備用のドッグや、レーダーが回転しているイージス艦、空母も見ることができた。この辺りでは日本の作業員も多数行き来していた。

その後は戦闘機を横目にしつつタクシーで移動し、ファーストフード店でアメリカ風の食事を楽しんだ。帰りは三笠口からベースを後にし、懇親会では防大生とともに米軍や自衛隊に関する議論から自分たちの将来のことまで語り合った。

防大生の計らいにより実現したこの日の見学は、私たちの米軍や基地に対する理解を深める非常に有意義な経験となった。



日米ユースフォーラム

2005年6月28日 日本外国記者クラブ

主催：日米協会（AJS） 共催：フルブライトプログラム、JASC ジャパン

テーマ：“Visions for change in U.S.-Japan relations in an evolving international environment :Perspectives from Japanese and American youth.” 「青年の期待する将来の日米関係」で、最初に4人のパネリストたちが、このテーマに対する各々の意見を発表した。

パネリスト

杉田道子（第57回日米学生会議実行委員長）

Linda Zhang（第57回日米学生会議実行委員）

乗竹亮治（第55回日米学生会議の実行委員長）

Daniel Kliman (Fulbright fellow)

4人のパネリストは日本・米国という枠組みを超えた多様なバックグラウンドを持っており、それぞれの経験や大学での専攻を活かし異なる観点からテーマを捉えていた。パネリストたちの意見は聞き手にも大きな刺激を与え、続いて行われた会場を交えての質疑応答の際、



文化から政治・経済にいたるまで様々な質問があがり盛況であった。「確かに、現在の日米関係は、昔とは比べ物にならない程良好である。しかしこれはあくまでも Better であって Best ではないのではないか。」という鋭い意見もあった。その後行われた懇親会では、ソプラノ歌手である高橋さやかさんとピアニストの山本千晶さんによって JASC ソングのお披露目があり、懇親会は終始和やかなムードで行われた。



大野和基氏勉強会

2005年7月16日 日米会話学院

講師：大野和基氏

講師略歴

国際ジャーナリスト。東京外大を卒業後、渡米し米コーネル大学で化学、ニューヨーク大学で基礎医学を学び、ジャーナリズムの世界へ。以降、医療・宗教・国際情勢・文化等、多岐にわたる分野で活躍。映画監督マイケル・ムーアや元CIA長官、ヘッジ・ファンドの帝王ジョージ・ソロスや政治学者サミュエル・ハンチントンへの単独インタビューを取るなど、海外でも活躍。



勉強会内容

9. 11 後に、150 人抜きでたった一人だけマイケル・ムーアにインタビューを取った方を招いての事前勉強会。今回は、従来の勉強会とは異なるソクラテス・メソッド形式で行なわれたため、ジャーナリズムの世界のお話以外に、大学生活等のアドバイスもうかがうことができた。いくつか大野氏の言葉を引用する。

『チャンスが目の前にいくら転がっていたとしても、それに気づくだけの能力が必要』

チャンスを掴むためには、準備が必要で、豊富な知識・教養を身につけておく必要があるという見解は、ジャーナリストとして大きくて困難な取材を取る以外、日常でも大切である。その為にも様々なジャンルの本を濫読し、日ごろから多くの情報をインプットしておく必要がある。

『信頼が全て、一度裏切ると全てが終わりになる。そして正義感も欠かせない』

ジャーナリストという職業上、情報を入手する際、取材される側との信頼も去ることながら、情報を発信するジャーナリスト同士にも信頼は欠かせない。抜け駆けや、損得勘定で動く事は「裏切り」であり、それ以降、一切取材の協力してもらえないばかりか、仕事を回してもらえなくなる。また、社会の悪を正すためには、正義感が必要不可欠であり、賄賂等に目が眩み、これを失ってしまうと“在野”の視点からの良い記事が書けなくなってしまう。

『英語が出来ることは大きなアドバンテージ』

“英語が出来る”ということは、学術的な文法正しく堅いものから、スラングのように砕けた英語が話せるということである。ここまで英語を操ることが出来ると、取材が一段と取りやすくなり、更に相手に不信感を与えずに済む。仕事に来る、そして仕事を容易にこなすという2段階のアドバンテージを得ることは、英語がネイティブのように話せないと難しい。

一人のジャーナリストとして、強い信念を持ち仕事をされている大野氏からは、ここでは書きつくせないほどのジャーナリズムの世界についての知識と、今後の大学生活や日米学生会議へむけての励ましのお言葉を頂いた。

原孝氏勉強会「人を動かし、社会を動かすのは何か」

2005年7月23日 日米会話学院

講師略歴

慶応義塾大学法学部法律学科卒業。編集者・ジャーナリスト活動30年。同氏が編集した『授業を変えれば大学は変わる』が大きな反響を呼び、本書の主張に賛同した大学生を中心に「大学の授業を考える会」が結成され、その主宰者を務める。アメリカの大学事情にも詳しく、独自の大学改革案を提唱し、「大学改革論議の火付け役」の一人となる。また、若者たちと「何でも自由に喋る会」も開いている。大学教育学会会員。日本ペンクラブ会員。原孝事務所の代表。

勉強会内容

何かのプロジェクトをやるにしても、仕事をやるにしても、今求められるのは「人間力」である。では「人間力」とは何なのか？人間力とはすなわち、考え方や生き方や学歴が異なる人でも相互に受け入れあい、上手くやっていくことであると同時に、人をビジョンでインスパイアしていくことでもある。原先生は、ご自身の人生や実際に暴走族などの若者としゃべった経験を通じて、色々な人と話すことがいかに重要かと繰り返し言ってくくださった。

自己開示の重要性に関しても語られた。自分の今までの生き立ち、そこで感じた悲しみや怒り、喜びや悔しさ、それらの感情を他人に対して、壁を作らずに他人とつながることの意義を教えてくださいました。グループワークなどで人をひきつけるのは、こういう「人間力」である。

勉強会を通じ、今の日本の学歴社会の現状、「人間力」、学生生活の過ごし方など、様々なことに関して考えさせられた。

第3章

本会議・サイト活動

滋賀・京都

広島

沖縄

東京

滋賀・京都サイト

滋賀・京都サイトの概要

第57回日米学生会議は歴史と未来の二側面を持った本年度会議テーマに沿って、滋賀と京都で幕を開けた。未来型のアプローチとしては、「環境」というキーワードを掲げた。滋賀は琵琶湖の保護をはじめ、先進的な環境政策で有名であり、京都は世界的な環境基準である「京都議定書」が採択された場所である。アメリカが京都議定書に批准しないまま発効となった本年に日米の学生が環境に対して議論を交わすことが重要であると考え、サイトのメインイベントである「環境プロジェクト」を開催した。

また、古都京都では歴史的なアプローチを試みた。嵐山、金閣寺、清水寺を訪れ、伝統旅館の宿泊、宿坊体験も行き、日本の伝統文化をアメリカ側参加者と共に体験し、文化交流を試みた。最終日には阪神大震災から10年を迎えた神戸を訪れ、人と未来防災センターで自然災害について学んだ。近年、世界中で深刻な自然災害が多発している中、神戸の経験を日米の学生で学んだことは非常に意義深かった。

滋賀・京都サイトのスケジュール

7月26日	日本側参加者集合 日本側直前合宿
7月27日	日本側直前合宿 米国側参加者到着
7月28日	ジョイントサイトオリエンテーション スキット交換 オープニングセレモニー
7月29日	分科会 文化プロジェクト（京都国際学生映画祭受賞作の上映・能の上演、体験）
7月30日	環境プロジェクト
7月31日	京都散策（嵐山・金閣寺・清水寺） 宿坊体験・旅館宿泊
8月1日	フィールドトリップ in 京都
8月2日	滋賀出発 人と未来防災センター訪問 神戸日米協会による昼食会

（実行委員サイトコーディネーター：三谷佳孝）

滋賀・京都サイト活動記録

※参加者の活動記録を基にして作成している。

7月26日

第57回日米学生会議の日本側参加者40名は、今日、最初の開催サイトである立命館大学びわこくさつキャンパスに全国から集合した。本会議自体はアメリカ側参加者が到着する27日からの開始であるが、その前に日本側参加者は一日早く集合して直前合宿を行ったのである。

アイスブレイキングをしながら再会を喜び合った後、会議全体の流れを確認した。明日にはアメリカ参加者が到着するという現実が信じられないというのが正直な気持ちであった。

7月27日

午後九時に、アメリカ側参加者が遂に到着した。翌日に行われるスキット（異文化紹介の寸劇）練習を早々に切り上げ、高ぶる気持ちを抑えながらこれから共に約一ヶ月を過ごすアメリカ側参加者のもとへと向かった。各自、割り当てられたbuddyのために書いた色紙を持ってパートナーを探す、初めて出会う自分のパートナーを目の前に嬉しさの反面、今まで逃げ回っていた英語からもう逃げられないぞと覚悟を決めることとなった。

7月28日

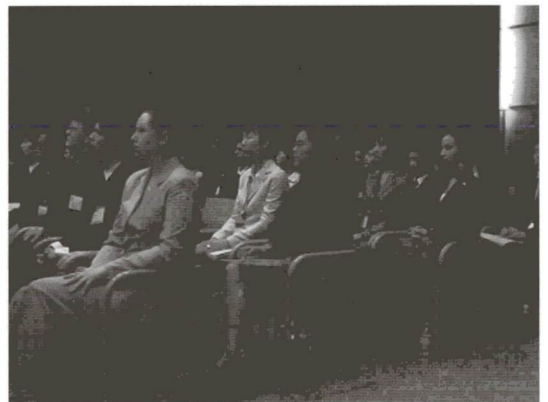
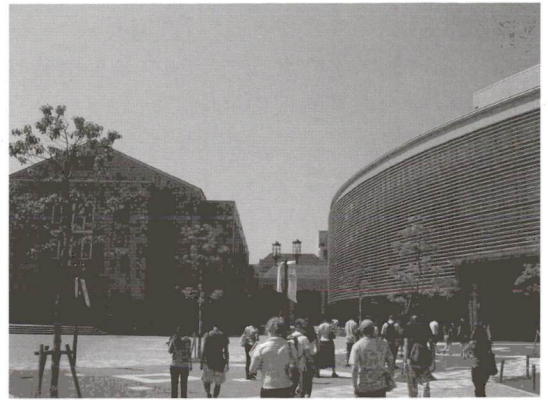
今日がまさに第57回日米学生会議参加者にとって事実上最初の日である。簡単なオリエンテーションの後、日米の参加者の間でアイスブレイキングが行われた。オープニングセレモニーでは、まず日米学生会議の主催団体である国際教育振興会の大井氏が会議の歴史について説明してくださり、緒方四十郎氏より基調講演を頂いた。そして第57回会議の日米各チェアによるスピーチがあった。その後は、打ち解けあって日米の両学生が思い思いの時間を過ごしていた。

7月29日

今日は本会議で初めて、分科会でのディスカッションが行われた。午後には、「文化プロジェクト」があり、伝統芸能と映画鑑賞で、日本文化を堪能した。初めに京都能楽連盟による能が披露された。そして、私たちは京都国際学生映画祭で入賞した「America」と「春雨ワンダフル」の二つの映画作品を鑑賞した。夕方には、アメリカ側参加者と日本側参加者によるタレントショーが行われ、盛りだくさんのパフォーマンスが披露された。

7月30日

この日は、京都サイトの目玉企画の一つである環境プロジェクトが行われた。プログラムでは、一般の方もお招きし、有識者の方による基調講演に加え、民間企業の方々、アメリカ側参加者、日本側参加者から計4組がプレゼンを行い、環境問題への多角的アプローチを発表した。午後には、日本の民間企業や地元高校生によるワークショップが行われた。また、第57回日米学生会議の特別な取り組みとして日米学生会議京都議定書が提案された。



7月31日

立命館大学のセミナーハウスを出発し、京都終日バス旅行第一の目的地の嵐山に向かった。そこで参加者は各々が思い思いの京都の町を体験した。全体としては、まず金閣寺を見学し、その後に清水寺へ行った。その日は二つの分科会はお寺に宿坊し、その他の分科会が二つの旅館に分かれて泊まることとなった。いずれの参加者も日米学生会議が始まってから立命館大学の宿泊所以外での初めての外泊と言う事で興奮した様子でそれぞれの夜を過ごした。

8月1日

前日に引き続き京都市内での活動であったが、この日は幾つかのグループに別れて観光を行った。京都市内の寺社巡りをした人や、奈良や大阪の方まで足を運んだ人もいて、関西での自由時間を存分に楽しんだようであった。夕方からは、賀茂川で花火を行い、多くの人が参加し京都の情景を楽しんだ。両国学生の距離が少し近くなった一日でもあった。なお一日の最後には、サイトの終わりという事もあり、日米の学生がそれぞれ別れてリフレクションを行い、会議に対する想いを共有し合った。

8月2日

初めの一週間を過ごした滋賀を後にし、広島へバスで移動した。その途中で神戸の阪神淡路大震災記念「人と防災未来センター」に立ち寄り、その後神戸日米協会の方との昼食会が開催された。

“人と防災未来センター”では、1995年に起きた阪神淡路大震災について、映像や実験を通して地震の仕組みや防災の取り組みを学んだ。昼には神戸市内のホテルで神戸日米協会の方々に昼食会を開いて頂いた。短い時間であったが、暖かい歓迎と美味しい食べ物に、一行の旅の疲れもとれたようであった。そして、夜には広島へ到着し広島サイトが始まった。

参加者ノート

7月30日 環境プロジェクト

日米の学生で環境問題について語り合い、それらを対外的にもシンポジウム・ワークショップ形式で発信していくというのが環境プロジェクトの趣旨だった。しかも、アメリカが京都議定書からの脱退を表明して以来、アメリカの京都議定書への復帰、そしてポスト京都議定書に向けての動向を踏まえ、環境問題は日米にとって重要なトピックの一分野であることは間違いない。

環境プロジェクトの概要は、まずシンポジウム形式で京都大学大学院教授植田先生の講演から始まり、アメリカ側参加者による政策提言、企業（関西電力・三洋電機）のプレゼンテーション、日本側参加者の身近にできる環境対策に関するプレゼンテーションと JASC 京都議定書の提案が行わ

れた。そして、最後に環境への取り組みに熱心な京都の市立高校と上記の企業、日米の発表者が各ブースに分かれワークショップを行った。

環境プロジェクトで得られた最大の成果は、日米の学生がこのプロジェクトに向けてともに語り合いプロジェクトを作り上げていけたことだと思う。日本に到着したばかりというのにアメリカ側参加者は共和党にも民主党にも属さない自分たちの政策提言に向けて語り合い、日本側参加者もプロジェクトの企画面だけでなく運営面も含めて共に協力し合い一つのものを作り上げていった。出会って間もないメンバーがここまでの調和と協力を生み出し一つのもの作っていく姿に JASC の醍醐味を感じ、感動した。

そういった準備の結晶である当日のシンポジウム、そこでは普段から抱えている思いをぶつけるアメリカ側参加者、自らの大学の取り組みを紹介する日本側参加者、そして識者や企業の方のお話などを通して、様々な知識を得、ワークショップではそれらを議論した。

長いようで、短い一日。

春合宿以後続けてきた JASC 環境プロジェクトの準備。プロジェクト内で学術的・政策的な視点に加え、実際に環境問題対策に深く関わる日本企業の視点も日米両国の学生に伝えたいという自らの思いは実現した。また、広報のために県庁に行くこと、企業に講演の打ち合わせに行くこと、御礼文など様々な書類を書くこと、そして記者会見、すべてが始めてであり、失敗も含めて有意義な体験となった。

すべてが終わり、一日の最後に飲んだ一杯の生ビールはとてつもなくおいしかった。

(山田 裕一郎)

第 57 回日米学生会議（以下、JASC）は、滋賀・京都サイトから始まった。アメデリの到着、オープニングセレモニーに始まり、初めての分科会、能や日本映画を鑑賞したカルチャープロジェクト、個性の祭典タレントショー、メインイベントであった環境プロジェクト、夜のお楽しみの飲み会、そして日本の文化の中心京都への小旅行。その後の濃密な一ヶ月の予兆ともいえる程、最初のサイトから充実した内容であった。そのあまりの濃さ、充実ぶりに、6 日間の内容を 1 ページに収めることは困難を極めるが、以下、私を感じたことを 3 点ほど、述べようと思う。

第一に、アメリカ人のルールを守る意識である。当サイトのメインイベントである環境プロジェクトでは、JASC 中に私たち学生が環境への配慮として実際にできる行動を示した JASC 京都議定書が発表された。内容は多岐に渡ったが、主なものとしては、「冷房の温度を 28 度に設定する」、「エレベーターではなく階段を使う」等があげられた。環境プロジェクトの後、アメデリはこれらをその通り実行していた。暑いと言いながらも冷房の温度を上げていたし、また、階段も使うようになっていた。私は、このように発表された議定書の内容を自分たちの問題として受け止め、かつ、確実に実行するアメデリに感銘を受けた。とかく日本においては、このようなことがたとえ提案されても、多くの学生は、他人事としてとらえ、実際に行動に移すことがないことが極めて多いように思われる。日本の学生の悲しい現実であるが、このようなアメデリの行動に、襟を正された思いがした。

第二は、飲みニケーションである。学生の夜の楽しみとなれば、やはりお酒であり、JASC においても、序盤から飲み会は開催された。従来、飲みニケーションが日本の職場文化の特徴であると言われてきたが、最近では以前に比べ上司と部下が仕事の後に飲みに行く機会が減っているという報道を耳にしたことがある。私自身も飲みニケーションの意義については懐疑的であったが、JASC でその意義を理解した。初対面、しかも言語も文化も違う二つの国の人間が、打ち解ける。本来極めて困難であろうことだが、飲みニケーションによってその困難さは間違いなく緩和された。お酒、というあまり高尚ではないものかもしれないが、そのユニバーサルな意味を実感した。

第三に、手探りの JASC 感である。滋賀・京都サイトは、最初のサイトだったがゆえに、それぞれ

れが JASC とはどういう場所か、どのようにこの JASC と一ヶ月間付き合っていくのか、そんなことを模索していたサイトでもあった。私自身も JASC のペースをつかむのに戸惑っていたし、それは少なからず他の参加者も感じていたようである。アメデリとジャパデリとの距離が縮まるようで縮まらなかったのもその表れだったのだろう。振り返ってみればジャパデリとアメデリの関係は、横軸に時間、縦軸に親密度をとった正の二次関数のようであった。即ち、時間が経過するにつれ、その親密度は急激に高まっていった。このような現象は、集団生活においては当たり前のことなのかもしれないが、最後の東京サイトでの親密さと比べると、この滋賀・京都サイトでの戸惑いやぎこちなさが、なんとも不思議に映る。当サイトは、一ヶ月に及ぶ JASC、そしてこれから一生続いていくジャパデリとアメデリの関係の、ごくごく序章に過ぎなかったのだ。

(古川 啓之)

広島サイト

広島サイトの概要

今日、日本人のみならず、世界中の人々がヒロシマと聞いて原子爆弾の悲惨さを連想するのではないだろうか。長崎と並んで原爆を投下された広島は、今や世界有数の平和都市である。我々はこの広島で、原爆資料館を見学し、被爆者のお話を聞き、平和教育の現場を実際に見て、終戦から今日に至るまでの日本の歩みを振り返った。

当サイトでは、「ヒロシマをどう伝えるか」というテーマでパネルディスカッションを行った。パネリストに「はだしのゲン」の作者である漫画家の中沢啓治氏、長崎国際大学教授の中根允文氏、ネバーアゲインキャンペーン前大使の野上由美子氏をお招きし、被爆体験や原爆の及ぼす精神的影響、平和教育の未来についてお話いただいた。また、在日韓国朝鮮人被爆者の李実根氏に、マイノリティーとしての被爆体験について語っていただき、ヒロシマの意義の多面性をあらためて感じる事ができた。さらに、佐々木貞子さんの母校である広島市立幟町中学校の毎年恒例の平和集会を見学し、教諭にも平和教育についてレクチャーしていただいた。そして8月6日は平和記念式典に参列した。

その他自由時間には、フィールドトリップで宮島に行ったり、お好み焼きを食べたりして、友好を深めた。

広島サイトのスケジュール

8月2日	広島到着 広島サイトオリエンテーション
8月3日	分科会 フィールドトリップ（宮島 etc.） スペシャルトピック
8月4日	原爆資料館見学 被爆者の語り部 広島会議 クレーンプロジェクト
8月5日	幟町中学校の平和集会见学 平和教育レクチャー
8月6日	平和記念式典参列 リフレクション 灯籠流し
8月7日	沖縄へ出発

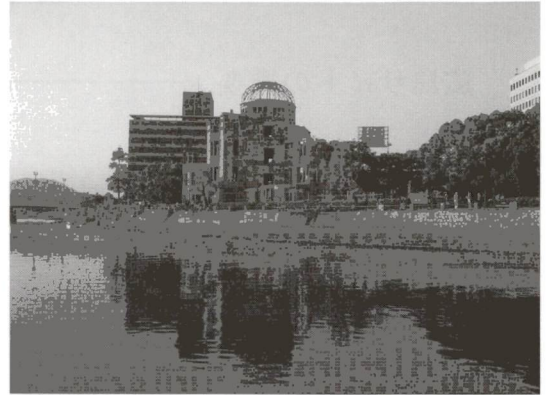
（実行委員サイトコーディネーター：出浦寛子）

広島サイト活動記録

※参加者の活動記録を基にして作成している。

8月3日

この日は朝から、ホテルの近くの区民センターで分科会のセッションがあった。昼食をとり、午後からは何グループかに分かれてフィールドトリップを行った。ほとんどは宮島へ行ったが、中には市立美術館や広島城を訪れる人もいた。夕食後はスペシャルトピックの時間だった。事前に語りたいトピックを参加者から募り、参加者は各自自由に好きなグループに参加する。音楽とNGOについて熱く語るグループもあれば、日米の恋愛観についてまったり語るグループもあった。



8月4日

まずは、広島平和記念資料館に行き、その後、在日の被爆者である李実根氏から被爆体験のお話をいただいた。その後、広島会議のため広島女学院に行く。会議では長崎大学名誉教授・長崎国際大学大学院教授の中根允文氏には被爆者に関する精神医学の取り組みを、ネバーアゲインキャンペーン元大使の野上由美子氏には「戦争体験をどう伝えるか」についての平和教育に関して、そして漫画「はだしのゲン」の作者である中沢啓治氏には被爆体験のお話をいただいた。その晩は、平和記念公園に千羽鶴をおさめる「crane project」を遂行しに行った。



8月5日

この日は、佐々木貞子さんの母校である広島市立幟町中学校を訪れた。毎年、他校の学生や平和団体を招いて行われる、平和集会を体育館で見学した。その後は幟町中学校の生徒方々が校内を案内してくれた。有名な折鶴の碑や、平和記念公園の貞子像の原型である小さな貞子像を見ることができた。さらに、幟町中学校の教諭の宮奥先生に、平和教育の実態についてレクチャーをいただいた。レクチャーの後は、グループに分かれて、お互いの平和教育経験や、平和教育のあるべき姿について議論した。



8月6日

終戦記念日のこの日は、平和記念式典に参列した。前の三日間に広島を見て回り、色々学んだばかりだっただけに、平和記念式典は日米学生会議参加者にとって感慨深いものであった。参列後は、広島での最後の一日を各自、自由に過ごした。



参加者ノート

8月4日 公開講演会「ヒロシマをどう伝えるか ～戦後60年を迎えて～」

戦後60年経った今、廃墟の中にあったヒロシマは経済的にも精神的にも復興を遂げ、平和都市ヒロシマとして重要な意味を持つ都市となった。悲惨な被爆体験を乗り越え、世界に No More Hiroshima というメッセージを発し続けるヒロシマは、世界中からその重要性を認識されている中で、同時に世界中での核実験や劣化ウラン弾の使用に関して、ヒロシマの声は届いているとは言えない面がある。その中で、この広島講演会は、参加者にとってヒロシマを今後どのように解釈し、どのように伝えていくのか、そしてヒロシマを多角的に捉えてその意義や今後のあり方を考える機会となった。

まずは、午前中に平和記念資料館を回った後にその地下の会議室で李実根氏という在日朝鮮人被爆者の方からお話を伺った。李氏は、重ね重ね、ヒロシマは「被害」の地であると同時に「加害」の地であることを強調された。というのは、朝鮮半島から強制連行された方も、経済的な理由で来日された方も、被爆した後、医療面で差別されて診療を受けられなかったのだ。原爆という、熱線や爆風や放射線で建物や多くの人が焼き尽くされた現象の後でさえ、差別だけが残ったという現実を、李氏は話された。そして参加者は、ヒロシマを巡る「被害」と潜在化していることが多い「加害」について考えさせられた。質疑応答やその後も、参加者が熱心に李氏に質問をしていた。

その後、午後に広島女学院のゲンス・ホールで3名のパネリストを呼んでの講演会があった。これも色々な視点でヒロシマについて考える機会となった。

一人目のスピーカーは、「はだしのゲン」の作者で被爆者でもある中沢啓治氏であった。彼は1945年8月6日、当時国民学校1年生だった時に広島市に原子爆弾が投下され、原爆で父、姉、弟を失った経験の話された。父は日本画家であり、終戦後、手塚治虫の「新宝島」を読んで感動し、漫画家になることを決意されたそうだ。中沢氏は、原爆投下時の光景を話されて、すごく印象に残った。皮膚が爛れてそれを引きずる人、水を飲んでショック死する人、死体が水の中で膨張する話を聞き、本や教科書で読むようなヒロシマとまた違ったヒロシマを知ることができた。また、彼の平和への願いを強く感じた参加者も多くいたと思われる。

二人目のスピーカーは、ネバーアゲインキャンペーン元大使であり、現在は英国ブラッドフォード大学院にて平和教育の研究を行っている野上由美子氏であった。広島での平和教育の柱は被爆者による被爆体験なのだが、被爆者の高齢化、そして原爆教育が大きな壁にぶつかっていると言われる今、新しい方法を模索する必要があるのではないだろうか、という視点から話してくださいました。野上氏は、アメリカで核軍縮教育を行っている NGO でインターンをされた時に見た、世界の核の状況について考えさせるような参加型のワークショップについて、参加者の前で実演してくださいました。この方法の特徴は、核問題が自分たちの手から離れたところにあるのではなくて、その影響を直接的に受けるのは私たち一般市民であることを考える機会を与えてくれるということであり、そう感じた参加者も多かったはずである。

三人目のスピーカーは、長崎大学名誉教授、長崎国際大学大学院教授である中根允文氏であった。中根氏は被爆者の精神状態や PTSD などに関する精神医学の取り組みを、疫学的精神医学研究の方法を駆使してこれまで精神疾患に係る臨床特徴を明らかにして心理社会的側面からの原因探索を行ってきたことを話してくださいました。今まで、原爆被爆により身体的にどのような影響が生じたかについて多くの研究がなされている中で、心理的な影響に関しては極めて貧困な知見しか得られていなかった。そこで、中根氏は原爆被爆者の精神健康調査、原爆に胎内被爆した人における精神疾患の発現頻度調査、そして原爆被爆者における心理的影響の調査の話をしてくださいました。

3名が話された後のパネルディスカッションも、アメリカ側の参加者側からも活発に質問が飛んだ。

8月4日の広島講演会は、分野や視点が違う4名のスピーカーの存在で、ヒロシマの意義や捉え方、そして平和や核兵器に関して色々と考えさせられる機会となった。

(島村 明子)

広島サイトはそれまでの環境、そして文化をテーマとした滋賀・京都サイトとは異なり、日米において大きな位置を占める戦争そして原爆という歴史が、広島市全体の平和記念式典を前にした緊張感と相まって参加者全体をそれまでとは違う雰囲気の中で包み込んでいた。

正直に言って、この広島サイトは私を含めた参加者全員にとってかなりハードなものになったのではないと思う。というのも5日間と言う短い日程であったが、私たちはヒロシマの歴史、そしてかつて日本が体験した戦争の歴史について常に向きあっていた。日米両方の JASCer たちは訪れる全ての場所を通して、自分たちの歴史を認識し、それと真剣に向き合い、そして何かを学び取ろうとしていた。私はその中で歴史認識の多様性、そして未来へつなげるために私達が何をしなければいけないのかということを知り、考えられたのではないと思う。

きっとこれは私だけが持っていたのではない先入観だったと思うのだが、私の意識の中でこの JASC に参加する前はアメリカの人と言うのは第二次世界大戦、そして原爆投下の事実をみな一様に肯定していて、被害者としての日本の見解を理解してもらう事は難しいと考えていた。その考えが覆されたのは広島市記念公園を訪れたときの事である。平和記念資料館を含めた公園内の見学の際に、アメデリたちは一様に押し黙り、そして何人かの人たちは「これ（原爆投下）は起こるべきではなかった。」とつぶやいていた。また8月6日の平和記念式典が近いということで、様々な団体が日本、そして世界各地から平和を訴えるためにこの公園に集っていたのであるが、その中に炎天下の中、ハンストをしながら「原爆をヒロシマに投下して、本当に申し訳なかった」という内容が書かれたアメリカの老夫婦がいた。彼らは私達が近づくと、“We’re so sorry.”と言いながら、涙を流して謝っていた。彼らの話を聞くにつれて自分たちの歴史を理解してくれる人がたとえ少数であったとしてもいるのだという事実、自然と涙が溢れた。

広島に滞在した最終日、参加者全員が集まって催されるリフレクションの時間が設けられた。これはこのサイト中に思ったことを自由に述べるものであり、私はその中で一人のアメリカ側参加者の言った話が忘れられない。彼女は平和記念式典に参加したときの話をしたのであるが、式典が始まる前に公園の外でたくさんのボーイスカウト、ガールスカウトの子供達が献花用の花を配っていた。彼女にも一人の男の子が笑顔でその花を手渡したそうなのだが、彼女はその時にその男の子をつかんで「私たちの国が何をあなたたちにやったか知っているの!? なんであなたたちはそんな風に笑ってアメリカ人の私に花をくれるのよ!」と言いそうになったそう。また広島サイト4日目に行われた広島市の鞆町中学校訪問のときのレクチャーにて触れられていたのだが、近年、戦後時間が経つにつれてこの原爆の、戦争の歴史を取り扱う平和教育が縮小傾向にあるという。私はこれらの話の中で、未来へ私達が繋げなければいけないことと繋げてはいけないことに対する私なりの見解が見えた気がした。それは「歴史の中で起こった事実は決して忘れてはいけない。しかし私達が未来を進むために、憎しみの感情は次世代には伝えてはいけない。」ということだ。

私はこの広島サイトにおいて、伝えていかなければいけない戦争の、ヒロシマの事実を私たち JASCer に様々なアプローチから説いてくださった全ての人たちに心からの感謝の気持ちを述べたいと思う。

(中島 朋子)

沖縄サイト

沖縄サイトの概要

古くから、武力によらず他の地域と相互依存を深めることで安定を確保してきたため国際色豊かであった沖縄。地理的特異性から独特の文化を育み、現在にもそれを受け継いでいる。一方で、沖縄が第二次世界大戦中日本で唯一の地上戦の舞台となり、現在でも米軍基地問題を抱えているのは周知の通りである。そのような背景をもつ沖縄は、日米両国はもちろん、世界から注目されている。

このような背景を持つ沖縄にて、第57回日米学生会議では戦後60年を振り返るというテーマのもと、日米の戦後の歴史に深く関わりまた現在も議論の耐えない基地問題に焦点を当てることとした。

とりわけ、力を入れたプログラムは、とかく抽象的な議論に陥りやすい基地問題を沖縄に住んでいる方々の視点から考えるというものである。その中心となったのが嘉手納基地訪問及び辺野古訪問、そして糸満市でのホームステイである。これら一連のプログラムを通して我々参加学生は基地問題を「考える」だけでなく、「感じる」ことができた。

沖縄サイトのスケジュール

8月7日	沖縄到着 沖縄サイトオリエンテーション
8月8日	分科会 レセプション
8月9日	在沖縄米軍基地訪問
8月10日	糸満市庁舎見学 ひめゆりの塔訪問 轟の壕訪問
8月11日	辺野古訪問
8月12日	ホームステイ
8月13日	東京へ出発

(実行委員サイトコーディネーター：袴田隆嗣)

沖縄サイト活動記録

※参加者の活動記録を基にして作成している。

8月7日

飛行機の都合で日本側参加者と米国側参加者は別々に沖縄に到着することとなった。お昼過ぎに那覇に到着した日本側参加者は、沖縄のビーチを満喫しながら米国側参加者の到着を待った。夜7時過ぎに到着した米国側参加者を待って糸満スポーツロッジにて夕食をとった。その後続けて沖縄サイトオリエンテーションを行った。



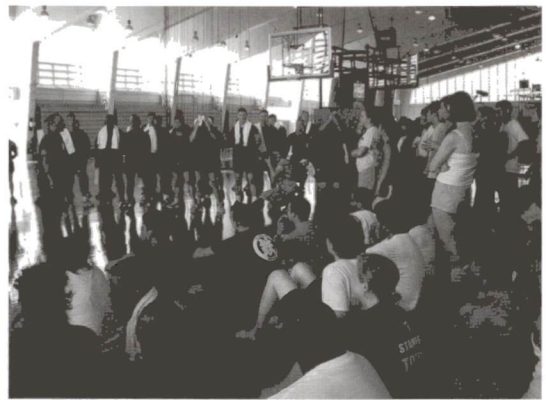
8月8日

朝から光洋小学校へ徒歩で移動して分科会を行った。終日の議論の後、NBCサムシングフォーにてレセプション

が開催された。沖縄の料理と芸能の素晴らしさに酔い、皆でエイサーを歌い踊ることで会場全体が一つになった。

8月9日

沖縄で最大の嘉手納空軍基地と海兵隊のキャンプフォスターを訪問した。その後も那覇アメリカ総領事公邸でレセプションをして頂く等、昨日の地元交流とは対照的に、政治・安全保障という視点から沖縄を見る機会となった。



8月10日

朝、太陽光発電パネル等を用いた環境に配慮した糸満市庁舎を見学し、その後平和祈念資料館及びひめゆりの塔を訪ねた。学徒隊として戦争を経験された方のお話で多くの学生が涙を流した。また轟の壕という戦時中の防空壕の中を探索させて頂き、一同その暗さ及び静けさに当時の人々の恐怖に思いを馳せた。



8月11日

米軍基地の移設が問題となっている辺野古見学へ出かけた。基地移設に反対する住民の方々のキャンプにて説明を受け、また様々な話を聞かせて頂くこともできた。その後、場所を沖縄国際大学へ移し、沖縄タイムズの屋良朝博記者、沖縄国際大学の佐藤学教授及び沖縄県基地対策課の桃宇常雄氏をお呼びし辺野古の基地問題を中心としたパネルディスカッションを行った。



8月12日

午前中にフリータイムを設けた。ビーチへ行くものもおり、ゆっくりと読書するものもおり、皆思い思いの時間を過ごした。14時に続々とホストファミリーが集まり、不安げな表情をしながらも、期待に胸をふくらませた米国人と日本人の学生のペアが、それぞれの家庭へと出発した。

8月13日

14時すぎに皆ホストファミリーからロッジへと続々と戻りはじめた。一斉に荷物をまとめてバスに乗り込むと、東京への飛行機に乗り込んだ。

参加者ノート

沖縄で見聞き、感じ、考えたもの、それらは私たちが今まで知っていた沖縄を大きく変えた。琉球王国の名残、日本唯一の地上戦、基地問題、これらすべてを持つ沖縄。一週間の滞在を終えた後、もはや私は「沖縄＝VACATION」という連想がまったくできなくなっていた。

私は沖縄で「日米」という二国間でものをみたのではなく、「沖縄」「日本（政府、本土）」「アメ

リカ」という三者間で物事を考えなければならなかった。基地問題についての話の中でよく聞かれた言葉に、「それは沖縄と日本政府、本土との問題であってアメリカは関係がない」だとか「日本政府とアメリカ政府の間で進められなければならない話し合いである」などがある。嘉手納基地を訪れた際には米軍が近隣住民とうまく付き合っていくために努力を重ねているとしきりに語っていた。また基地移転の候補地となっている辺野古で座り込みを行っている住民の話聞いた際には、住民が必死になって自分たちの生活を守ろうとしている姿を目の当たりにした。しかし私達の多くはその事実を知らず、沖縄での基地問題は本土、全国版のメディアであまり取り上げられていない。沖縄と本土に壁が存在しているのを感じた。この三者の関係に気づいたのは基地問題だけではない。沖縄戦についても同じ構図が見て取れた。沖縄戦での日本人の死者は20万人とも言われており、そのうち住民が半数を超える。当時の沖縄県民の4人に1人が亡くなったということだ。これには地上戦であったからという原因以外に、集団自決、日本兵の非人道的行為によるものがあげられる。沖縄戦の証言者の方が「昼間は米軍、夜間は日本軍が怖かった。」「日本軍に助けを求めていくと死がまっっており、敵国である米軍に従い非難すると助かった。」とおっしゃっていた。沖縄住民には、60年前も現在も、軍隊が自分達を救ってくれる、保護してくれるという考えがないのかもしれない。またここで、私は自分がいかに無知であったか気づかされ、またその歴史、事実を知ることの重要性に驚かされた。

しかしながら、沖縄で見たものは「傷跡」や負の面ばかりではない。これらを乗り越え、前に進もうとしている沖縄という地、そしてそこに住む人々の強さ、暖かさも知ることとなった。「いちやりばちよーでー」私が沖縄のことを思い出すたびに出てくる言葉がある。「いちやりばちよーでー」とは「一度出逢ったら皆兄弟」という意味の沖縄の方言である。多くの沖縄の方々が、私たちJASCerに覚えておいてほしい、そしてそれぞれの地で広めてほしいと教えてくださった言葉だ。ひめゆり学徒隊の方のお話や戦争を経験したおじい達の話に「アメリカが憎い、日本軍が憎い」という言葉は一度も出てこなかった。「家族や友達の命、多くのものを奪った戦争は憎い、基地も早くなくなってほしい！けれど、戦争中の兵隊、基地に働く人々を憎いとは思わない。どんなことをされてもやはり同じ人間だから。」この言葉を聞いたとき私の中でまたひとつ何か動いた。戦争や多くの苦しみを乗り越えてきたそこには沖縄の深い優しさと暖かい心、そして強い決意があった。私達は、歴史や事実を知り伝えていくとともに、「いちやりばちよーでー」この言葉を、そして沖縄の人々の心を世界中に広める重役を担ったのだ。

最後に、レセプションを主催してくださった糸満市役所の方、ホームステイを快く引き受けてくださった方々、そして沖縄の米軍基地関係者の方々のおかげで、とても有意義な経験をする事ができた。改めてここにお礼の言葉を述べたい。

(木原 由貴)

8月7日から13日まで、私たちJASCer約80名は第三の開催地である沖縄を訪れた。一週間という短い期間ではあったが、戦後60年を迎えた沖縄を様々な角度から垣間見ることができた。特に有意義であったのは、次の3つの体験をアメリカの学生と共有できたことである。

一つ目は、沖縄に駐留する米軍基地を、「内から」そして「外から」捉えることができたことである。9日に訪れた嘉手納基地では、施設見学の後、空軍・陸軍の方による基地問題の説明を聞いたり、在日米軍の方々と共に簡単なトレーニングを体験したりした。更に、米国領事の方から直接お話を聞く機会にも恵まれた。一方、その2日後に訪れた辺野古では、米軍基地縮小を目指し座り込みを行う地元の方々にお話を聞くことができた。透き通る沖縄の青い海を前に「私たちの土地を返して」と座り込みを行う人々の主張と、その真上を飛ぶ米軍機から放たれる轟音。戦後60年経った今も、未だ戦争が完全に過去のものになったわけではないことを、身をもって体験した。

次に、沖縄の歴史を、様々な施設見学を通してアメリカの学生と共有できたことも貴重な体験であった。10日に行った平和記念資料館、平和の礎やひめゆりの塔で学んだこと、そしてか語り部の方のお話は、戦争を体験していない日米双方の学生にとって想像を絶するものであった。特に沖縄戦の時の非難壕である轟壕に行けたことは、JASCの中で最も意義のある体験の一つであると思う。

東京サイト

東京サイトの概要

世界有数の大都市、東京。ここで第57回日米学生会議は締めくくられた。

国際的地位を高めるこの地で、日米2国間の枠組みを越えた対話が実現した。北京大学から意欲的な学生を招聘した『日米中3カ国学生協議』の開催である。たった3日間のこの会議に渡航費は自己負担、という条件で公募をしたものの、実に24人の中国の学生からの応募があった。最終的に来日した中国の学生11人を迎え、3カ国の学生はゲームや東京散策をしながら交流を深めた。そして互いの文化的価値観や歴史観を共有し、更にはYKK株式会社のご協力をいただきグローバル企業のあり方等について考え、活発な意見交換とプレゼンテーションを行った。

東京サイトでは世代を越え、過去の日米学生会議参加者や関係者の方々との交流をすることができたサイトともなった。分科会討論、講演会、そして各レセプションを通して、豊富な知識とご経験に基づく含蓄あるお話をうかがう多くの機会に恵まれた。

会議の集大成としてその成果を社会に発信することを目指し、一般公開のフォーラム(報告会)を開催した。今年是在日米国大使館東京アメリカンセンターのご協力により、初めて日米学生会議実行委員会との共催となった。学生は分科会の議論、全体でのディスカッション、講演会、ホームステイ、環境や戦争を真剣に考えたそれぞれの企画、フィールドトリップや文化体験等、1ヵ月間を通して学び、考え、感じたことを再構築し、発表した。第22、23回日米学生会議参加者のグレンフクシマ氏(エアバス・ジャパン株式会社代表取締役社長、在日米国商工会議所元会頭)の基調講演をいただき、学生の発表に対して中山俊宏氏(日本国際問題研究所主任研究員)および第39回会議参加者の武田興欣氏(青山学院大学国際政治経済学学部助教授)から講評を頂戴した。ご来場くださった方々との交流会をJASCジャパン(OB会)のご協力により開催することができた。当日は会場に入りきれないほどの人に来場していただき、盛況のうち無事終了したフォーラムは、学生にとっても一体感と達成感を感じる会議の大きな節目となった。

第57回日米学生会議の終わりが目前となると、来年の第58回日米学生会議の新しい実行委員が16人選出された。

参加者だけの内輪で行われた閉会式は終始和やかな雰囲気の中、行った。最後の夜は、参加者は寝ることも忘れて共に歩んだ1ヶ月を振り返り、思い出や夢を語り合った。別れを惜しみつつ、学生たちは「共に創る明日」に向かい、巣立った。

東京サイトのスケジュール

8月13日	羽田空港到着
8月14日	サイトオリエンテーション 分科会 OB/OGと分科会
8月15日	日米中3カ国協議 開会式、東京フィールドトリップ
8月16日	日米中3カ国協議 パネルディスカッション、グループ討論
8月17日	日米中3カ国協議 プレゼンテーション、閉会式
8月18日	分科会 外務省講演会 外務省主催レセプション
8月19日	分科会 フォーラム発表準備

8月20日	フォーラム フォーラムレセプション
8月21日	第58回日米学生会議実行委員選挙 自由時間
8月22日	閉会式
8月23日	アメリカ側参加者帰国 日本側参加者解散

(実行委員サイトコーディネーター：福田愛奈)

東京サイト活動記録

※参加者の活動記録を基にして作成している。

8月14日

オリエンテーションでは、日米中3カ国学生協議とフォーラムを成功させる決意をかためた。その後には2つ分科会討論が行われた。今まで経験して学んできたものを巧みにプレゼンテーションすべく要約することがいかに難しい過程なのかを実感した。夜、会議OB/OGを招いてのラウンドテーブルではアカデミックな議論から日米学生会議に参加しての思いまで語り合った。わたしたち参加者が3週間にわたって与え合った多彩な経験は、言語、国境、そして世代まで越えた人たちと共有できるものだった。



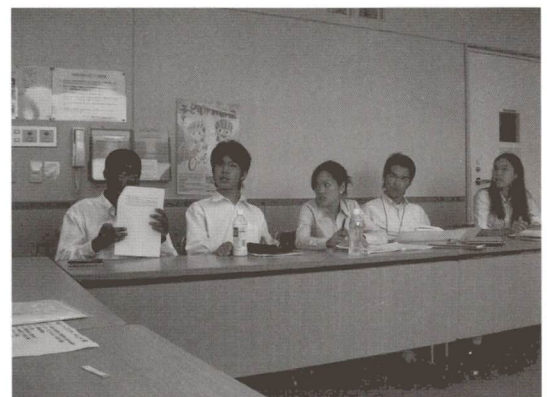
8月15日

3日間の日米中3カ国学生会議 (Japan-America-China Trilateral Student Conference) が幕を開けた。中国から招聘した学生を交えての会議は日米学生会議が始まって以来、初めての試みであり、わたしたちはこの日を心待ちにしていた。お昼頃、北京大学から来日した学生9人が到着し、開会式が始まった。自己紹介やアイスブレイキングのゲームをして、その後は5つのグループに分かれてフィールドトリップに出かけた。



8月16日

午前中は日中間の政熱経冷、靖国参拝、反日デモ等に関するパネルディスカッションを聞いた後に、少人数の班に分かれてディスカッションをした。午後からはグローバル企業のYKK猿丸様からレクチャーをしていただき、学生からは次々と質問が飛び出した。レクチャーの後は午前中と同様に少人数に分かれ、社員の方々と交えながら「グローバル企業に必要な要素は何か」という議題などで議論を行い、その後に各班による発表が行なわれ、最後に講評を頂いた。



8月17日

10:30 から各グループによる3日間の成果に関するプレゼンテーションが行われた。現在の日中関係の改善に

ついてもまた議論が交わされた。昼には飾り付けられた会場で和やかな雰囲気の中、閉会式が開催された。3日間という限られた時間ではあるものの、ともに話し合い、意見を交換した日本・アメリカ・中国の学生たちが別れのときを惜しみ、出発までのつかの間の時間を楽しくすごした。

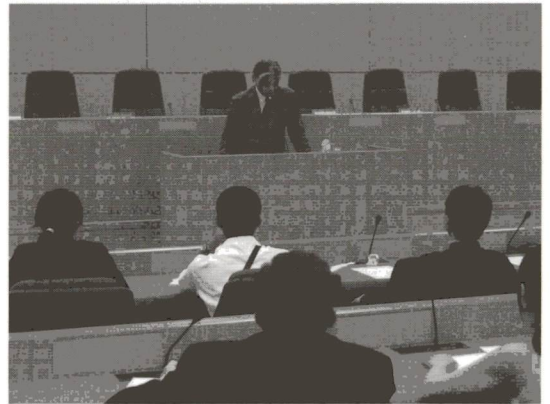
8月18日

いよいよ会議も大詰めになり、午前中からフォーラムの準備にとりかかった。午後には沖縄と東京サイトのリフレクションが行われた。ここでは以前のように不満を漏らすものがないどころか、互いに励まし感謝し合う光景が見られた。夕方からは外務省にて文明の衝突とカテゴリー化の危険性についての講義を受けた。会場を移動し、豪華なレセプションを開催して頂いた。



8月19日

日米学生会議も大詰めの時期を迎えようとしていた。気がつけばフォーラムが明日に迫っていた。前日ということもあり、全員が準備に追われていた。分科会ごとや各々が担当する発表の単位ごとに集まり、1日中念入りな打ち合わせや資料作成を行った。それは深夜にまで及んだ。この1ヶ月間で学んだものは数え切れない。数々の事実。十人十色の思想。それを対外的に発信できる場なのである。この1ヶ月で経験してきたものが有意義なものであったと、それを明日示したい。



8月20日

第57回日米学生会議の集大成であるフォーラムが、東京アメリカンセンターで開催された。最後の大会イベントに運営側である実行委員、参加者ともに入念な準備を重ねて挑んだ。わたしたちは、本会議における分科会、企画の様子や成果を発表した。非常に大勢の会議OB/OG、賛助企業や財団等の関係者、また一般の方々にお集まりいただいた。会場は溢れかえり、席数が足りないほどだった。大盛況の中、発表を終え、フォーラムの後には、夕焼けと東京タワーが見える会場でJASC Japanとの共催で交流会が行われた。



8月21日

いよいよ日米学生会議も残り2日。午前中、実行委員立候補者の「演説」が行われ、それに対する質疑応答があった。立候補者の熱い思いと他の参加者からの鋭い質問が飛び交った。その後、参加者全員による投票が行われ、午後には来年の第58回日米学生会議実行委員16名が決定した。午後からは、新実行委員を除いては自由時間となり、各自めいめいの時間を過ごした。



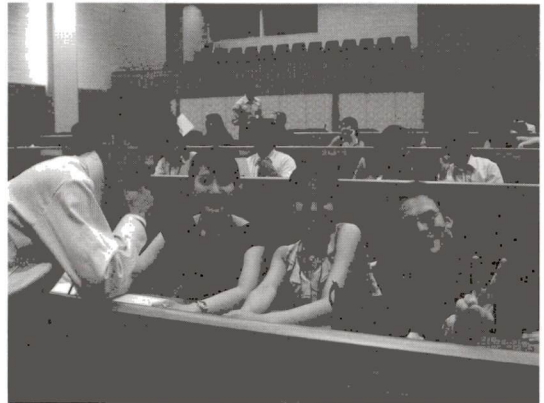
8月22日

午前中は自由時間だったので各自思い思いに過ごした。午後から学生のみでの閉会式が行われ、歓談を楽しんだり、写真を撮ったり、更にはスクリーンに参加者1人1人の写真が映し出され思い出に浸った。第58回日米学生会議の概要の簡単なプレゼンテーションも行われ、来年の日米学生会議の始まりを祝福した。最後のリフレクションタイムへと移り、多くのメンバーが1ヶ月を終えての感想、仲間への感謝の気持ちを語った。最後の夜、眠ることなく解散の朝を迎える人も多かったようだ。



8月23日

第57回日米学生会議の最終日。1ヶ月間、一緒に過ごしてきた仲間との別れの日。この日の朝は少しだけ悲しげな空気が漂っていた。皆で一ヶ月間を走り抜けた満足感もさることながら、第57回日米学生会議が終わりを迎えようとしている寂しさも合間って、さまざまな感情が全体を包みこんでいた。アメリカ側参加者がバスで空港へ向かって出発してしまうと、日本人参加者は可能な限りバスの後を追いかけて、手を振り続けた。バスから聞こえる「いってきます！」の言葉に、夏の会議が終わっても、これから続いてゆく友情を確信した。



参加者ノート（中国企画）

中国企画 各論

1、東京散策

大都市(新宿・池袋組)、若者の街(渋谷・原宿組)、歴史と伝統(浅草・上野組)、現代文化(秋葉原組)、日本の開国(横浜・みなとみらい組)という5テーマ・5グループに分かれフィールドトリップを行った。プレゼンテーションでは、それぞれの日常生活や衣料品の価格、初任給について語り合い、互いの文化がどのように浸透しているかなどを知ったことなどを発表し合った。参加者の会話は、中国で日本のアニメが熱狂的な人気を得ていることから、日本と中国における民主主義と資本主義の違いにまで及び、その多様さは興味深かった。

2、スモールディスカッション

①民主化

中国の民主化の実現は背後に様々な問題を抱えており、あと数十年はかかるだろうと予想される。そもそも中国人は民主化を望んでいるのか聞いてみると、冗談で民主化の話にはなるものの実際に望んでいるものはほとんどいないらしい。その理由は現在の経済成長に伴う社会の安定に起因するという。これを裏返せば、これから先民主化の動きが大きくなるともいえる。中国の内陸部と海岸側の経済格差は目覚しく、その不満によるデモは年に20000件発生しているからだ。日本に対するデモも民主化という枠内で考えるべき問題なのである。

政府が経済特区を内陸部に置き、経済格差を少しでも和らげようと努力していること、国民の不満が政府に向けられないよう反日デモを制御しつつ認めていることは、国民の不満が爆発し第三の天安門が起こらないようにしていることの現れと見るができるだろう。

『ソフトランディング』

革命が起こることなく、ゆっくりとした経済成長を遂げながらも、徐々に民主化を達成することが中国に課せられた課題、キーワードである。この言葉は国分先生がおっしゃっていた言葉である。

②教科書問題とメディア

歴史教科書をめぐっては相互無認識が明らかとなった。日本は8つの種類の教科書から各市町村が独自の教科書を選ぶ選定制度である。一方中国は国定制度である。しかし種類の教科書しかないわけではなく、地域ごとに教科書が決められているようだ。お互いの制度の違いについて日中両国ともに理解不足が浮き彫りとなった。中でも中国人は誰も、日本の教科書の制度を知らないことには驚いた。この主原因はメディアにある。中国では国営のテレビ局しか存在しないし、ネットへのアクセスも限定されている。政府にとって不利な情報は国民には行き届かないしくみになっていることがこの問題の解決を難しくしている大きな要因である。また、メディアに関する法律がない点も問題だ。憲法と政策によってのみ規定されているため、政府が恣意的にコントロールできるのだ。

メディアに対して批判的になり、自ら調べることの重要性、またこのように直接それぞれの国の人が出会い、話すことの重要性を強く感じた。

③靖国

一般的に靖国問題は日中間の問題と言われている。確かに現状だけを見ればそうであろう。しかしこの問題の根本にある問題のひとつは東京裁判であり、米国も大きく関わっていたということをごく多くの人が知っていたらどうか。

靖国問題の議論に当たっては「中国は日本がどこまで謝れば十分なのか」というアメリカからの鋭い質問にチャイナデリが答えられない場面があったり、「日本は口で謝っても行動が伴っていないからいけない」というチャイナデリからの指摘があったりとやや緊迫した、しかし白熱した議論が展開された。はっきりした結論が出なかったものの、三カ国とも東京裁判を認め、未来を見てこれから良好な関係を気づいていこうという思いは共通して持っていることを確認できた。

④安全保障、台湾問題

米国が中国の経済成長を脅威と捉える中で、中国が軍備を増強している。台湾との統一のためなら武力行使も厭わないとする中国と米国の対立は深まり、台湾海峡周辺の軍事的緊張は高まりを見せている。皆が現状維持を望むこの危機に際し、日米安保がある以上、日本の行動は中国にとって米国の戦略と一枚岩であると考えられてしまう。このことが、尖閣諸島や資源問題の背景にあることを忘れてはならない。

⑤経済

目覚ましい発展をとげる中国経済にも、問題がないわけではない。最も大きな問題は、沿岸部と内陸部の経済格差である。沿岸部に外国企業が押し寄せ富が集積される一方で、発展から取り残された内陸部との格差は広がるばかりである。内陸部の資源を利用した新たな産業の育成や、観光産業の発展が切望されている。日米の企業にとっても、中国内陸部は無限のビジネスチャンスが埋まっている場所だといえるかもしれない。

3、グローバルビジネスケーススタディ（YKK株式会社）

YKK株式会社のグローバル戦略について”From International to Global and Beyond”というテーマのプレゼンテーションを受け、スモールグループに分かれディスカッションを行った。テーマは”How do you define Globalization and what are the essential strength needed for Global Company?”である。まずはグローバル化の功罪についてブレインストーミングを行い、定義付けを試みた。

地球規模での経済・市場の拡大と統一化、アクターが国家から NGO などの非国家主体や地方コミュニティ・あるいは個人へ細分化していること、アメリカニズムや植民地主義との共通・相違点

は何か、富や情報・教育など様々な面で格差の拡大を招くこと、環境破壊を加速させることなどについて議論し、インフラ整備から教育・技術支援など政府・ODAの役割はどうあるべきかにまで発展した。

グローバル企業に求められる能力については、世界市場で通用する魅力的、かつ独自性のある技術や商品を製造することだけでなく、各地方における風土や慣習に柔軟に対応し変化できるシステムが必要であることなどが挙げられた。つまり、グローバルな視点で戦略を構築するとともに、多種多様であるローカルな状況に対応することが不可欠であるということだ。

(井上裕太)

中国企画 総論

今年初めて、日米中三カ国学生協議が幕を開けた。なぜ日米学生会議であるにも関わらず中国人学生を招いて会議を行う必要があるのか？

現在中国の経済成長は目覚ましい。日本の最大の貿易相手国が中国であること、元切り上げをめぐって米中関係が揺れていることからこれからの日米関係、日米両国にとって中国が重要な存在となることは明らかである。日米間の役割と可能性を探求する上で、中国人学生が日本や米国をどう見ているのか知ることは非常に重要であろう。

二つ目の理由は最近の日中関係の悪化である。反日デモや小泉首相の靖国神社参拝をめぐる中国の反発はその例である。政府レベルで硬直化しているこれらの問題に対し、メディアやネットの枠を越えて学生同士が直に自由に議論をぶつけ合うことは、学生だからこそできる事であり、米国という客観的な視点からこれらの問題を捉えなおすことも日中関係修復に大きく貢献すると考えられる。これからの未来をつくるのは我々学生なのだから。

こうして、文化的、政治的、経済的視点から、現在・未来の三カ国の関係を探求すべく会議はスタートした。一日目は5グループ（新宿・池袋組、渋谷・原宿組、浅草・上野組、秋葉原組、横浜・みなとみらい組）に分かれ東京散策を行った。二日目の午前中は三人の講師の方をお呼びしてパネルディスカッションを行った後スモールディスカッションを行った。慶應義塾大学法学部教授、同大学東アジア研究所所長の国分良成氏、アメリカ人ジャーナリストの長老といわれている Sam Jameson 氏、原田武夫国際戦略情報研究所代表、原田武夫氏をお呼びして「From Bilateral Tensions to Multilateral Cooperation」というテーマで講演をいただいた。スモールディスカッションでは各国の視点から現状分析を行いその打開策を議論しあった。午後は YKK 株式会社様にきていただき、「From International to Global and Beyond」というテーマで貴会社のグローバルなビジネス戦略の紹介をいただいた。その後グループに分かれて与えられた課題に対する解決策を話し合い、発表を行いそれに対し高い評価をいただいた。企業という実践的な問題について三カ国の視点から解決策を見出したことがよい評価につながったのだろう。この会議の意義、重要性を強く感じる事ができた。

東京散策を通じて、相手の国を実際に訪問することの重要性を実感し、様々な政治問題を話し合うことで中国との間にいかに相互無理解、無認識、不信頼が大きいかを突きつけられた。しかし同時に文化面での交流関係の深さも実感した。日本ではあまり知られていない女性ファッション雑誌が中国で人気という事実や、中国人の多くが日本のアニメ、漫画を知っているという話には驚いた。経済の結びつきが強いことも将来良好な関係を築いていく上で鍵となるだろう。

現在の中国の状況、そして日中関係は「政冷経熱」という言葉で言い表すことができる。中国は、その驚異的な経済成長の一方で、様々な政治問題を抱えている。経済の自由化と政治的抑圧の葛藤が近代の中国史を形作ってきたことを物語るように、中国の人びとは何より日常生活の安定とこの葛藤のソフトランディングを望んでいる。

反日デモなどの政治問題を越え、新たな時代を気づいていく我々にとって、多国間の草の根交

流・協力は不可欠である。文化レベル、草の根レベルの交流が将来の関係に大きな役割を果たすと実感した今回の三カ国協議は、日米中のみならずアジアや世界の未来を考える上で非常に有意義であった。

(前田 薫)

参加者ノート（東京サイト）

8月13日、沖縄を離れいよいよ最後のサイトである東京へと到着。14日のオリエンテーションでは、その日の夜に行われるOB・OGを交えてのディスカッションについて、このサイトで行われる三つのビックイベントである中国企画、フォーラム、そして外務省訪問について報告があった。ここでは中国企画を除く他のイベントについて見ていきたい。

まず、14日夜に行われた7名のOB・OGを交えてのディスカッションだが、各分科会ごとに分かれ議題を絞り訪問に臨んだ。さまざまなバックグラウンドや経験をもつOB・OGの方々のお話により、議論もより深まったものとなった。

16日、3人の講師の方を外部からお招きして、日本の外交や歴史問題について中国人参加者を含め全員でお話を伺った。今回、中国人参加者も講演会に参加するというので、ゲストの方にも日中関係に詳しい専門家をお呼びし、現在の経済面での結びつきが強くなる一方、政治面でのあり方が問われている日中関係についてや、日中外交のひとつの大きな障害となっている歴史問題についてお話していただいた。全体での質疑応答の後、少人数グループに分かれ講演について議論を深めたり、各グループを交代で回って下さる講師の方に直接質問させていただいたりした。靖国問題や歴史教科書についてなど非常にセンシティブな問題に対しても率直な議論が交わされ、大変有意義な時間を持つことができた。午後からYKK株式会社の方から基調講演をいただき、その後もまた少人数グループに分かれ企業と雇用のあり方やグローバルゼーションについて議論が行われた。多国籍企業のあり方や国内雇用問題、人権など幅広い分野において議論が交わされた。

17日、前日話し合った内容をもとに各グループが発表を行った。同じ分野のトピックに関してもまったく違った意見が出るなど、各グループ個性的な発表がされた。

18日、外務省で行われるパネルディスカッションに参加した。大使である近藤誠一氏から日本の外交や安全保障問題などについてお話を伺った。全体での質疑応答の後、外務省主催のレセプションがホテルへと場所を移して行われた。そこでは外務省の方々をはじめ、OB・OGの諸先輩方、ほか日米学生会議にご協力いただいているたくさんの方々にお会いすることができた。レセプションは終始和やかな雰囲気のもと、これまでの学生会議の様子や共同生活についてなど身近な話題から将来の話までさまざま方とお話することができる貴重な出会いの場となった。

19日には次の日のフォーラムに備え分科会毎に準備を行った。そもそもフォーラムを行うことの意味は、今までの議論をまとめ第57回会議の集大成としてその成果を広く社会に発信することを目指すことにある。そのため、出会ってからこれまで毎日のように議論を重ね、さまざまな問題について話し合ってきたぶん20分という限られた短い時間に話を集約することの方が難しかった。準備は時間との戦いだった。少しでも多く今まで行ってきた議論の内容を盛り込みたいと思う反面、より簡潔に、受け手に伝わりやすいものしなければならない。そのため分科会ごとにパワーポイントを作成することにした。各班思い思い写真や映像、音楽を取り入れるなどの工夫を凝らしたりする姿も見受けられた。各自英語のスピーチ原稿を用意し、時間を計りながら読みあわせを行い次の日のフォーラムに備えた。

8月20日、フォーラム開催当日。朝9時30分にはオリンピックセンターを後にし、アメリカ大使館東京アメリカンセンターへと向かった。そして、リハーサルを行ったあと、1時からフォーラムは開催された。集大成ということもあり、協賛いただいているたくさんの方々の企業や法人、過去の参加者など多くの関係者の方々が参加してくださった。全体の流れとして、現在も活躍されている過去の参加者の方による基調講演が行われた後、各分科会の発表、本会議中の各企画についての発表、そして日米両参加者のスピーチ等が行われた。基調講演は、グレン・フクシマ氏をお招きして行われ、その後各分科会の発表が行われた。それぞれに用意してきたパワーポイントを説明しながら、

皆 20 分の発表に一所懸命であった。次に本会議中行われた各企画、滋賀で行われた環境プロジェクト、広島で行われた CRANE プロジェクト、東京で行われた中国プロジェクトについての報告会が行われた。そして、戦後 60 年を今日振り返る、という題目のもと 4 名の学生会議参加者がそれぞれの思いを発表した。その後、Jasc Japan の方にコメントをいただいた。その後、第 57 回の思い出を写真や音楽、映像と共にパワーポイントで来場者の方々と共に発表。最後に第 57 回実行委員長である日本側代表者 杉田道子とアメリカ側代表者 Ashley Neeley がそれぞれに挨拶をし閉幕した。非常に充実したフォーラムとなった。フォーラム終了後、場所を移し来場者と会議参加学生の交流会も行われた。お茶やお菓子をいただきながら参加者 6 名の感想やスピーチに耳を傾けた。

(佐藤 愛)

第4章

本会議・分科会活動

文化—伝統とポップ

ジェンダーとアイデンティティ

社会変動と政策

安全保障と平和構築

地域主義

世界市場経済と日米社会の再編成

科学技術と現代社会

グローバリゼーションの功罪

文化—伝統とポップ

CULTURE: Tradition and Pop

分科会メンバー

伊藤朋子 (早稲田大学国際教養学部)
 木原由貴 (福井大学教育地域科学部)
 リンダ ザン* (慶応義塾大学別科日本語)
 キム ビヨンス (一橋大学社会歴史研究科)
 Tina Toal* (Widener University)
 Francisco Arechiga (University of Chicago)
 Yoko Kamitani (George Washington University)
 Melissa King (Smith College)
 Steven Schroeder (University of Puget Sound)
 (*はコーディネーターを示す)



分科会設置の目的

文化というものは、その土地に住む人々の日常、思想、習慣といったものを全て包括しているものであるといえるだろう。すなわち、人間が生きていく上で、もっともプリミティブでありエッセンシャルなものである。日米の関係が政治や経済面などでとても密接なものとなった今日。しかし、ここまでの密接な交流関係を築き上げるのに、文化がとても大きな役割を果たしていることを現代では見落としがちである。殊に現代人の価値観や精神は、その国の大衆文化や伝統文化以外にも異文化からの多大なる影響を受けているのだ。例えば、若者のファッション、音楽、言葉などは自らの文化とは異なる価値観や精神が享受されて成り立っている。このように文化というものは国境を越えて共感を抱くことができるものであり、異文化が交流する際にもっとも理解されやすく、受け入れられやすいものである。

本分科会では文化の力を、伝統とポップという二つの区分に別けて日米両国の文化にいま一度焦点を当てて議論していくことが目的である。両国の文化を比較し、異なる点や相似点を探し出し、互いに理解を深め、さらには伝統とポップという二つの形の文化がどのように世界的に認知されていくか議論を行った。

活動内容

1 本会議中における議論の目的

文化というトピックはとても抽象的であり、様々な見地から考察できるため、分科会メンバーが本会議前に書いたレポートを元に、どのような議題で議論をしていくかを決めた。文化とは個人や集団の意思で変化させることは困難であるため、本分科会は他の経済・安全保障・グローバリゼーション・科学・ジェンダー・社会変動と政策・地域主義のように政策提案はせず、私たち学生という立場から考え、発見し、体感できる『文化』というものを発信していくことを念頭に置き、分科会活動を行った。私たちが扱ったトピックは以下の通りである。

1.1 日米それぞれの文化の特徴

- ・ 日本文化における伝統とポップー日本人が考える日本の伝統
- ・ 米文化における伝統とポップー米国人が考える米国の伝統
- ・ 言語における違いー表現や文字の違いから見る各文化の差
- ・ 宗教観の差ー多神教・一神教・信仰心など
- ・ 集団主義と個人主義ーそれぞれ自文化においてどのような役割を果たしているか

1.2 異文化との交流による自文化におけるポップの変化

- ・ 異文化享受で自文化とはどのようにして変容するのか
- ・ 言語が他文化に入るとその言葉やニュアンスはどのように変化するか
- ・ 音楽や芸術などが他文化に入るとどのような意味を持つエンターテインメントとなりうるか
- ・ 政治的または経済的な要因で文化はどれほど変化するか（その例と現状）

1.3 伝統文化の認識

- ・ 米国における日本文化の認識（映画・文学・芸能）
- ・ 日本における米文化の認識（ハリウッド・音楽・ファストフード）
- ・ 両国間の認識の「食い違い」とそれによって起こる誤った文化認識の表現
- ・ 食い違いの原因と改善

1.4 文化の礎

- ・ 文化とは何が基盤となっているか
- ・ “国” という意識から生まれる文化の枠組み
- ・ “国民” という意識から文化とアイデンティティーの関係性

1.5 文化の成り立ち

- ・ 恣意的に造られた文化ー伝統・自然に起こる文化ーポップ
- ・ 造られた文化から起こる誤認は偏見を造る
- ・ 伝統とポップの関係：ポップとは本当に新しいものなのか？伝統とは本当に古いものなのか？

2 フィールドトリップ

主に日本文化を体験するという趣旨で行われた。

2.1 茶事（京都サイト）

2.2 京都散策（京都サイト）

3. フォーラム

フォーラムでは以上の議論に興味を持ち、対外的に発信していきたいと考えるトピックに焦点を絞り発表。トピックは言語・偏見・メディア・伝統とポップというように4つの背セクションに分けられフォーラムのために渋谷で取材を行い、ショートビデオを作製した。また、映像や音楽を効果的に使用し、芸術や音楽など聴覚的なものや視覚的なものを取り入れた手法で伝統とポップを表現した。

総括

文化というものはとても議論するのが難しいと会議開始直後は懸念していたが、私達が普段から何気なく触れている環境や習慣などの具体的な事柄から話を始め、次第に抽象的な概念に膨らませていくことができた。京都・滋賀・沖縄・広島・東京といった5つのサイトを巡ることができた日本側開催の年であったからこそ、より一層、伝統とは何なのか又はポップカルチャーとは何なのかを明確に見て体感することができた。

議論が日米両国の参加者にとって、今一度“文化”というものを再考してみることにより、伝統文化とは人々がその暮らしのなかで慣れ親しんできた行事、又は習慣であるとともに、一方では人々の手によって変化していく文化の流れから隔離され、恣意的に作られたものだという結論に至った。さらに、ポップカルチャーという時代の最先端を行く若者の文化は、それを人々が好めばやがては伝統になるだろうという仮説や、反対に、伝統文化もやがて風化し、またいつか長い歴史の中で最先端の“ポップカルチャー”として甦るのだという仮説も分科会メンバーのコンセンサスを得た。

文化は日々刻々と変化していく。その中で、私達が伝統と呼べるものは何なのかをしっかりと考え、保護していく活動を行わなければ伝統とは形を失ってしまう。また、今日の文化交流が盛んな時代では、日本も米国も外から来る異文化を享受して様々なポップカルチャーが生まれている。こういった流れの中で、自文化を多文化から差異化し区別していくことが新たな伝統文化への第一歩なのであろうと私達の分科会は考えた。

ジェンダーとアイデンティティー

Gender, Sexuality and Identity

分科会メンバー

出浦寛子* (慶應義塾大学法学部法律学科)
 伊藤雅俊 (早稲田大学商学部)
 山田裕一郎 (同志社大学経済学部)
 錦信吾 (鳥取大学医学部)
 張文涵 (慶應義塾大学法学部法律学科)
 Tony Kingsolver* (Indiana University)
 Ken-Cheng Hsiang (Washington and Lee University)
 Candice Laurman (University of California, Berkeley)
 Madison Levitan (Dickinson College)
 Kelly Varsho (University of Wisconsin-Madison)
 (*はコーディネーターを示す)



分科会設置の目的

「男は仕事、女は家庭」、という性別役割分業の常識はもはや通用しない時代になりつつある。会社で男性と対等に働くキャリアウーマンが増加する一方、家事に専念する専業主婦も目立つようになってきている。このように社会における男女の役割の境界線が曖昧になってきている今日、ジェンダーは日本でもアメリカでも大きな関心を呼んでいる。日米両国で、職場における女性差別、賃金格差、男性の社会的抑圧などが問題視されているという事実が、まさにジェンダーの重大性を物語っているのではないだろうか。また、性同一性障害、ゲイ、レズビアン、バイセクシャルなど、我々の社会でずっと「異常」と見なされてきた人たちに関する問題もメディアで頻繁に採り上げられるようになった。このように、性別役割の平等化や性的アイデンティティーが注目されるにつれ、女性も男性も自分の生き方や在り方を見つめ直す機会が多くなったのではないだろうか。

当分科会では社会が求める「女らしさ」や「男らしさ」とは何か、またそれらの問題を超越した「自分らしさ」とは一体何なのか、日米男女の性別役割、性差別の現状、性に対する考え方などについて議論しながら探求したい。

活動内容

私たちは分科会テーマに基づき、今日、日米それぞれの社会で問題になっているトピックをあげ、その原因や周囲への影響、対応を比較することで、同じ問題でも、文化によって異なった様相を呈することを再確認し、日米それぞれの国での解決法を話し合った。

また、科学技術と現代社会、グローバリゼーションの功罪の分科会と合同ディスカッションを行い、フィールドトリップとして新宿二丁目で行われたゲイパレードを見学するなど、様々な角度からジェンダーとアイデンティティーについて考え、メンバー一人ひとりの持つ問題意識を共有し、価値観を大いに衝突させた。

以下では話し合われた問題点を簡単に紹介する。

1. 同性愛・性同一性障害などのセクシャル・マイノリティー

- ・ ジェンダー・セクシャリティーの4つの定義・分類

- ・ 日米比較
 - アメリカでの状況
 - ホモ・フォビアやキリスト教的保守主義と自由主義（オープンさ）、雇用、政策
 - 日本での状況
 - 事実を隠すセクシャル・マイノリティーの人々と社会の反応（無配慮・排除・メディア）
- ・ 科学技術と現代社会との合同ディベート
 - ホモセクシュアリティを形成する遺伝子研究を推進すべきか否か
- ・ ゲイ・プライド・パレードの感想
 - 日本のゲイ社会とその社会的受容

2.性役割と女性の社会進出

- ・ メディアの中の女性像
 - 日米映画の中の女性の性役割、漫画、ポルノグラフィー
- ・ メディアは女性の社会進出の障壁となるか
 - 「負け犬」、日米の女性向け雑誌の中の女性像
- ・ 男女雇用機会均等法
- ・ ジェンダー・フリー（性役割からの自由）は成立しうるか
- ・ ワークショップ — 男が持つ男女のイメージと女が持つ男女のイメージの比較

3.性教育

- ・ 性教育に同性愛・性同一性障害などの内容を取り入れるべきか
- ・ 日米比較
- ・ 赤子をそれぞれ男らしく・女らしく育てることはジェンダー・フリーに矛盾するか

※その他、売春のグローバル化(「グローバリゼーションの功罪」との合同ディスカッション)など

フォーラムでの発表内容

米軍・自衛隊の中のジェンダー

(女性の雇用機会の問題だけではなく、アメリカでは同性愛者への差別措置、日本では無関心など、現代の社会のジェンダーをもっとも端的に示している)

●米軍

i) 米軍の中のゲイ

Don't ask, Don't tell 政策（ゲイであるか尋ねるのも答えるのも禁止し、他の兵士の勤務妨害になるとして、ゲイの疑惑をかけられた人を解雇できるというシステム）への批判

⇒ Don't ask, Don't tell 政策の存在によって生じうるアドバンテージ、ディスアドバンテージを再考察し、同政策の撤廃も含めて検討する必要がある。政策の存在が逆に兵士を敏感にさせているとも考えられるため、政策自体が勤務妨害のきっかけになりえる。

ii) 米軍の中の女性

近年米軍女性兵士の数は、全米兵に対して約15%にまで増えた。ベトナム戦争時には2%前後だったため、割合は増加傾向にある。しかし、男性兵士と全く同じ扱いを受けているとは言えず、戦場下において最前線で戦うことや特殊部隊配属になる事はない、などの差は生じている。

⇒ 事実として女性と男性に身体能力などの面で大きな差があると仮定し、それが戦場などにおいて作戦活動の妨げや障害になりえるという固定観念がこの差の原因であると考えられる。しかし当然この差を好ましく思わない女性兵士もいる。これを解決するために、男女兵士問わず共通の身体能力や作戦理解度など、関連する諸項目の測定を行い、男女問わず一定基準に達した成績優秀者から登用する、という仕組みを設けるなどの男性優遇でも女性優遇でもなく、平等化に向けた動きが必要なのではないか

●自衛隊

i) 自衛隊の中の同性愛者

公的な関連資料がほとんど見つからず、政府の無関心さがうかがえる。実際にはセクハラなども発生しているようだ。

⇒ 政府がもっとイニシアチブをとって、実態調査を行い、セクハラなどを取り締まる必要がある。

ii) 自衛隊の中の女性

まだまだ絶対数は少ないが、一般企業より男女平等だと感じられている。しかし、「母性の保護」に基づく規制や男性に比べ期待の低さが感じられる、出産により昇進できない・退職せざるを得ない等、問題も多い。

⇒セクハラやいじめを取り締まる、子育て支援を充実させるなどはもちろんだが、政策レベルを超えて、一人ひとりが幅広い女性像・価値観を認めることも重要となってくるであろう。

総括

私たちが話し合った男性像や女性像や、「男らしく」・「女らしく」。これは人間が今日までの歴史を築き上げる過程の中で育まれてきた文化的な概念の一つである。国によって多少の差はあれど、アメリカを含む、世界中ほぼ共通で存在する概念だろう。しかし、文化というものは時の流れとともに移り変わっていく宿命を持つ。それと同時に、今日までに築き上げられてきたその概念も大きく意味合いが変わろうとしている。これは今日「ジェンダー」と名付けられ、社会的な性差を分けて考えないようにする、というような社会に向かいつつある。性差を分けることによって「男性は、女性はそれぞれこうあるべき」と決め付けられ、個性の発揮が制限されてしまう、という考えからだ。

男性でも、従来までは女性向きといわれていた職種に才がある場合もあれば、その逆も有り得る。この新しい概念が定着しつつあることによって、人はより、自分らしく個性を発揮して生活しやすくなっただろう。しかし注意しなければならないのは、これは性差がなくなったというわけではないということだ。生物学的には確かに存在する。

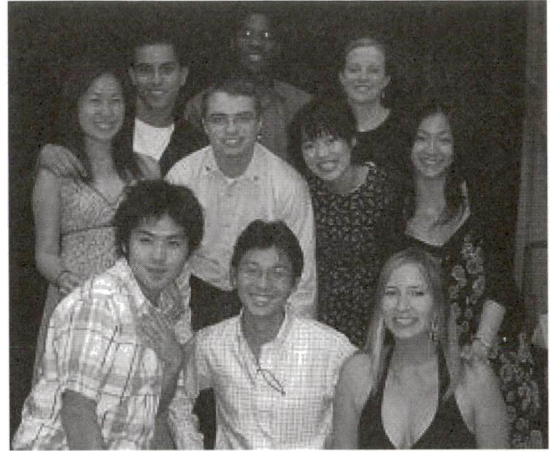
そこで、ジェンダーに対する理解というのは、互いの生物学的な差を理解することから始まるのと考えた。男はどうやっても妊娠することは不可能であり、また女性も男のような腕力を発揮することは敵わない。この様な男女それぞれの差を理解することが真のジェンダー・フリーである社会の姿なのではないだろうか。

社会変動と政策

Emerging Social Problems and Phenomena: Issues and Legislation

分科会メンバー

荒島由也* (慶応義塾大学法学部政治学科)
 中島朋子 (慶応義塾大学文学部人文社会学科)
 生板沙織 (慶応義塾大学総合政策学部)
 古川啓之
 (東京大学大学院公共政策学教育部公共政策学専攻)
 森賢子 (青山学院大学国際政治学部国際政治学科)
 Brenna Gannon (Drake University)
 Mike Miello (Duke University)
 Paul Reynolds (Santa Fe Community College)
 Sheehan Scarborough (Harvard University)
 Elspeth Spransy* (Eckerd College)
 (*はコーディネーターを示す)



分科会設置の目的

21世紀に入って時代の流れは加速化し、社会を支えてきた従来の枠組みや価値観が時代にそぐわなくなるといった問題が顕著になってきた。例えば、「安定した会社に就職して一生懸命に働き、老後は退職金と年金で過ごす」—これは日本社会において近年まで一般的な価値観であった。しかしここ数年、フリーターの増加、終身雇用の廃止、財政面で逼迫する年金制度など、社会の新たな変動によってこの価値観は揺らぎつつあり、また従来の枠組みは変革を求められている。このような状況に対して、政府はどのような対策を講じるべきなのか、そして私たち学生は何ができるだろうか。

当分科会は日米両国の公共政策に注目して、社会変動とその対策を理解することに努め、さらに、日米両国の政策決定に影響を与えている文化的価値観の相違を理解することを目的とした。そして、日米両政府がどのような問題意識をもって政策に着手し変動する社会に対応しているのか、あるいは対応できていないのかを問い直し、解決策を模索した。

活動内容

1. はじめに

社会の変動は、何らかの政策を必要とする多くの問題を生み出す。分科会のメンバーがそれぞれ違うテーマについてレポートを作成してきたことからその傾向は何える。聾啞者の教育、少年犯罪、米国の徴兵制度、モラル教育、外国人犯罪、人身違法売買、マイノリティーや人種差別、少子高齢化など、いずれのテーマも今日の社会現象を浮き彫りにするものであった。10回の分科会をそれぞれのテーマについて話し合うことも可能であったが、我々は日米両国に共通する社会問題一つに焦点を当て、解決策を考える方針を立てた。絞込みの重要な要素として、「大学生が社会に貢献できること」に大きなポイントを置いた。その結果、子供に教育をする過程で「家庭と学校とコミュニティ」の団結や結束や協力が近年希薄になってきているという身近な問題意識を基に、3つのアクターを結びつける非営利組織(以下、NGO)を設立することについて考えてみることになった。

2. 具体的な政策

「しって ta?」（知ってた?）と名づけたこの NGO は、コミュニティー全体で子供たちを守ろうという基本理念を掲げ、「健全な市民」の育成に携わる団体である。名前は「子供達が今こういう状況にあることを知ってた?」と、家庭、学校、コミュニティーに問いかけるところからきている。今回この分科会では麻薬教育を例として取り上げたが、他にも性教育、モラル教育など多種多様なテーマを取り扱う NGO である。

2-1 なぜ「健全な市民」造りに焦点をあてるのか

今日の子供達は麻薬の使用や、不健全なストレス、社会の安全の崩壊（例 いじめ）など様々の問題と直面している。これらの問題を蔑ろにすると、健全な市民の育成を妨げ、悲惨な事態を引き起こすことになる。いじめに耐えられなくなった中学生や高校生が自殺してしまうことやコロンバイン・ハイスクールでの銃乱射事件、青少年による麻薬の使用率が高まっていることはその一例である。

現在では、子供達の親と学校の教師の間でコミュニケーションが十分に図れていない。互いに協力し合って社会問題を子供達に教え、子供達の行動を見守るのが本来のあるべき姿であるが、相手に頼り自分は関与しないという現象が今日見られる。

2-2 麻薬問題に関する統計

以下の統計は、日米両国でいかに麻薬が重要な問題かを示すものである。

【米国】

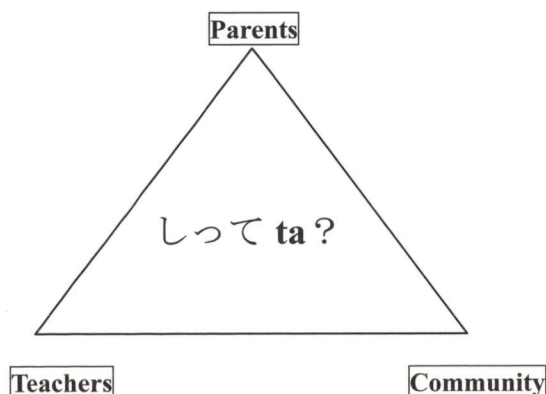
- ・ 中等学校の 40% が麻薬使用はそのコミュニティーにとって重大な問題であると指摘。
- ・ 200 万人のティーンエイジャーがガソリンやスプレーペイント等の吸入剤を乱用したことがある。
- ・ 2003 年から 2004 年の間で高校 2 年生によるコカインの使用率が 1.1% から 1.5% へ増加。
- ・ 政府は今までに 410 億ドル以上を麻薬教育関連のプログラムに割り当てている。
- ・ 処方薬の乱用は高等学校で目立つ現象となってきた：高校 3 年生の 9.3% が Vicodin という鎮痛剤を娯楽目的で使用している。

【日本】

- ・ 過去 5 年間で大麻使用に関連する犯罪が 70% 増加。
- ・ 中学 2 年生の 65.7% が 2 時間未満の麻薬教育を学校で受けている。
- ・ 中学 2 年生の 28.2% が学校でいかなる麻薬教育も受けたことが無い。
- ・ コカインの使用率に変化はないが、大麻の使用や興奮剤の乱用が高まっている。
- ・ 中学生の 45.9% がホームルームの先生から麻薬教育を受けている。

2-3 三本柱から形成されるモデル

以上の統計を踏まえ、家庭、学校、コミュニティーが子供の教育や人間造りに積極的に参加できるモデルを考え出した。



我々は、子供達が受ける麻薬教育の形態や学校と家庭の両方で行う教育について、教師と親がコミュニケーションを取るために必要なステップ・バイ・ステッププロセスを考えた。3つのアクターから構成されるこのプロセスは相互をサポートする形になっている（上の図を参照）。

まず親の役割としては、教師と麻薬教育の責任を共有するために情報の交換をする必要がある。更に、子供達の友達を把握したり、子供達と話す時間を作ったり、先生や周りの人を敬うことを教えたり、帰宅後のスケジュールを立てたり、態度の変化に気づいたりするなど、特に多感な中学生の子供達をよく見て、共にいてあげることが大切である。次に教師の役割としては、子供達の親との対話を絶やさないことである。その他にも、子供達と誠実に接すること、麻薬問題の意識を高めるような活動やイベントを主催すること、コンスタントに麻薬についての授業を行うことが挙げられる。親や教師には最初から以上のような役割が存在するが、本来コミュニティーにはこのような責任がない。しかし、コミュニティーが“Drug-Free Society”を援助するためのインセンティブは十分にある。子供達の教育や人間造りに積極的に参加することによってコミュニティーの治安は向上し、麻薬問題の意識が高まれば犯罪率が下がり、コミュニティーに属する人々は互いに守りあうようになる。

3. 終わりに



“Knowing leads to Communication, Communication leads to Action”（知ることとはコミュニケーションを促進し、コミュニケーションは行動へと繋がる）。「しって ta?」という団体は、上記のフレーズを理念とし、青少年による麻薬の使用、犯罪、非道徳的な行為を抑制するために尽力する。健全な市民を育成するために、家、学校、そして私達のコミュニティーを越えて教育や価値観を子供達に教えることが未来の人間造りに大きく貢献するということを今ここで再度強調したい。

総括

今日、日米両社会は非常に多種多様な問題を抱えており、それら一つ一つの問題について話し合うことも可能であったが、問題意識を共有するのみで分科会を終わらせない為に、日米両社会に共通の課題である「健全な市民の育成」という一つに焦点を絞ることにより、具体的な解決モデルを提示することができたという点は評価できる点であったといえよう。

又、社会問題についての責任を他者に求めることは容易であるが、そのまま問題が放置されたまま不安社会が拡大することになれば、それは危機的事態を引き起こしかねない。次世代を担う子供が健全に成長できるような環境を作り上げるためには、社会を構成する一人ひとりが問題に対する正しい知識を持ち、実際に行動へ移していくということが不可欠であり、その時の鍵となるのが教師や親、そしてコミュニティー間の協力である。さらに、社会の変動に伴い、この様な草の根レベルでの取り組みを国家という枠を超えて共有することにより、新たな形での日米のパートナーシップが生まれる可能性も多いにあるだろう。

安全保障と平和構築

International Politics — Peace and Security

分科会メンバー

三谷佳孝* (立命館大学国際関係学部)
 井上雅章
 (慶應義塾大学理工学部システムデザイン工学科)
 重原由佳 (国際基督教大学教養学部社会科)
 篠原舞 (東京女子大学文理学部社会学科)
 波多野綾子 (東京大学教養学部)
 Ashley Neely* (University of Maryland)
 Lina Yamashita (Oberlin College)
 Michael Haubert (Sul Ross State University)
 Stanton Lawyer (Howard University)
 Jawad Joya** (Earlham College)
 (*はコーディネーターを示す)
 (**は本会議前オリエンテーションのみ参加)



分科会設置の目的

第二次世界大戦が終了して今年で 60 周年を迎える。真珠湾の奇襲攻撃に始まった日米間の戦争は壮絶な沖縄戦を経て、原子爆弾の投下によって終結した。以後、戦争の悲惨さを経験した人々は世界平和を願い続けてきたが、宗教やイデオロギーの壁を越えた相互理解は難しく、暴力は繰り返されてきた。21 世紀に入ってから同時多発テロやイラク戦争等によって悲劇は繰り返されており、依然として安全保障に対する人々の関心は高い。国内では、自衛隊のイラク派兵や平和憲法のあり方、北朝鮮問題などの問題が多く議論を引き起こしている。そして、イラク戦争による混乱、繰り返されるテロの恐怖、大量破壊兵器の存在は、世界規模の問題として大きく関心が寄せられている。

本分科会では、「平和と安全保障」というテーマを設定し、歴史を踏まえつつ、国際政治の観点から実現可能な平和とはどのようなものであるかを模索していくことを目的とした。

分科会活動内容

1. 主な事前活動 (日本側)

本会議をより実りあるものにするために分科会メンバーが参加した各事前勉強会のうち、特に本分科会と関連の深いものを下に示す。

・ 防衛大学校訪問

日本の安全保障の重要な部分を担う自衛隊の指揮官を養成する防衛大学校を訪問し、生徒及び教官の方々と主に、現在日本の安全保障システムの根幹を成すとされる日米安全保障条約の成立経緯、度々問題視されるその片務性、及び日本国憲法第 9 条との兼ね合いについてのディスカッションを行った。防大関係者は非常に現実的な考え方をされる方が多く、実際の安全保障を考える上での重要な指針が現実的か否かということであることが確認できた。

・ 孫崎享防衛大学校教授 (駐イラン大使等歴任) 私宅訪問

駐イラン大使等外交的に非常に重要なポストを歴任され、現在防衛大学校の教授でおられる孫崎

享先生の私宅にお邪魔し、現代の安全保障のあり方、特にアメリカの対テロ戦争に関わる議論を行った。この中で氏が協調されたのは **perception** という語であり、「個人の行動は普遍的あるいは客観的とされる“真理”よりも、その人が実際に何を見て何を感じたかに影響を受けている」という“事実”である。他者から見れば一見不可解あるいは理不尽な行為、極端な例で言えばテロリズムも、当事者から見れば彼らなりの必然があつて行われるものである。他者の **perception** を理解せずに行動する事が国際社会で如何に危険かを確認させていただいた。

- ・ 横須賀米海軍基地訪問

防衛大学校訪問の際に知己を得た防衛大学校学生と共に、在日米海軍司令部のある米海軍横須賀基地を見学した。基地に停泊する日本の潜水艦は、日米安全保障条約の実際のあり方を端的に肌で感じさせるものだった。

- ・ ジャパン・コリア学生交流シンポジウム参加

第二次世界大戦当時の日本の対外的なあり方に関連し、日本が侵略した朝鮮半島にアイデンティティを持つ同年代の学生の考えを直接聞くため、ジャパン・コリア学生交流シンポジウムに参加した。議論を通じ、この中で知り合った韓国人留学生及び所謂在日朝鮮人の日本に対する考え方を肌で知り、未だに残る戦争の爪跡を感じた。

2. 本会議における主な議論内容

- ・ 恒久的な平和のあり方と憲法第9条のあり方

この議論の中で確認された非常に重要な日米の差異に、平和への考え方がある。日本の感覚では平和は今平和のある場所に於いて維持 (**maintain**) されるべきものであり、アメリカの感覚では平和(及びその必要条件としての「民主主義」)は世界中に広げ(**spread**)られるべきだというものである。「平和」を分科会メンバー全員が納得する形で厳密に定義するには至らなかったものの、この差異は軍事先制攻撃を含むアメリカの対外政策のあり方と、世界的には消極姿勢と見られる日本の対外政策の差異の原因として確認された。

また憲法第9条に関しては、現代においては安全と平和を守る上で現実的でないという意見がやや支配的となったものの、最終的に武器の必要のない社会が理想であるという点では共通の見解が得られ、その理念が共有されるに足るものであることが確認された。

- ・ テロリズムとその対処、組織犯罪

我々のテロリズムあるいはテロリストの厳密な定義は困難を極めた。歴史上素晴らしい出来事であるはずのフランス革命、独立戦争等も当時の世界観では最初はテロと呼ばれうるものであったということにはメンバーのほぼ全員が同意し、ある事件がテロであるか否かの判断は、結局は見る側の **perception** に拠ることが確認された。また、先制攻撃はテロに関する限り事態を悪化させる行為であるという点についても共通見解が得られた。

また、組織犯罪(所謂マフィアやヤクザ等によって引き起こされるもの)について、マフィアやヤクザ等は歴史的には元々政府組織・軍隊等の公式な存在であったものであり、後にその必要性を失い変質していったものであるというプレゼンテーションがなされた。このことは、アルカイダが元々アメリカ軍の支援を受けたアフガン戦争時代の対ソ義勇軍であったことと一部リンクしている。如何にこのような組織の発生を防ぐのかについての有効な方策を打ち出すには至らなかったものの、たとえ公式なものであっても武装した組織が将来的に安全保障あるいは治安を脅かす存在になりうるということが確認された。

- ・ North Korean Issues

現在日本はじめ世界中で脅威とみなされている北朝鮮について、その近年の動向、国内で行われているとされるプロパガンダを通じた洗脳、また北朝鮮が保有を宣言した核兵器の性質についての議論を行った。議論が試みられたものの、結局北朝鮮の狙いについては納得できる共通見解が得られず、主に核の不拡散という原則に基づくアメリカ側からのプレゼンテーションと、至近距離に新たに核保有国が誕生することが与える日米の安全保障への影響の可能性を中心に議論された。

また、核兵器が使われない状況を作るための議論もなされた。

- ・ 尖閣諸島問題と環境安全保障

天然資源が加速度的に枯渇に向かう現在、資源に関わる紛争は後を絶たない。この状況下におい

て緊張が高まる日中の尖閣諸島付近のガス田採掘に関わる問題についての詳細なプレゼンテーションがなされた。

また、環境保全運動と関連して、資源の消費量をコントロールすることで超長期的に天然資源が紛争原因となる土壌を減じていくという全く新規の安全保障の可能性が検討され、この可能性の実現のためには教育が最重要課題であるということが示された。

総括

本分科会のテーマは国際政治・安全保障という広範なものであり、そのため議論の内容、問題提起も非常に多岐に渡った。分科会のメンバーも非常に広い範囲から集まり、プロパガンダ等の思想教育から安全保障を見る者、環境から安全保障を見る者、マフィアやヤクザ等のマイクロアクターから安全保障を見るもの、核を基軸にフレームワークを考える者等様々であった。

本分科会では、主張・興味を共有する者がプレゼンテーションを行い、それについて全体が議論をしていくいわばオムニバスの様な形式を取ったが、プレゼンテーション内容が毎回非常に異なった分野のものであり、またそれぞれのトピックについて深い知識を持つものとそうでない者がおり、常にメンバーが能力と知識をフル活用できたわけではないのが事実である。それぞれのトピックにおける問題提起の過程で重要な発見が多々あったのは言うまでもないが、残念ながらそれぞれの問題提起に対して有効と思われる解決策の共通見解が常に明確に得られたわけではない。

しかしながら、どの問題提起を取っても無意味だったものは一つもない。結局のところ確認できたことは、広く世界を知ることの重要性である。ある行動がテロか否かの判断基準が立場に依存すると確認できたように、立場の差によってある単一の出来事の善悪判断、重要か否かの判断が分かれる。あるいは誰かが重要だと思っている出来事、案件を他の誰かは全く知らないかもしれない。核爆弾に例しても、広島に生まれ育った人間にとっては絶対的な悪であると聞いたが、人によっては単に極端に威力が高い兵器に過ぎない。今回の会議は開催地に広島と沖縄を含んでいたが、多くの参加者、特にアメリカ側参加者にとって広島は始めてであった。そこでの彼らの反応は、「こんなことがあったなんて知らなかった」であり、平和記念公園を見た前後で考え方が変わった人間が大勢いる。また日本人にとっても、広島で原爆の被害にあった所謂在日朝鮮人の方のお話を聞くことは、広島が当時多くの軍需品を製造していた「加害の地」であることを考えるきっかけになった。

安全保障というのは、要するに誰からも撃たれない状態を作ることである。理想論的な話をすれば、お互いを理解し、協調すれば撃たれることは無くなるだろう。現実的なレベルから考えるにしても、相手が撃ちたい理由を考察することが必要になる。どうしたって他者を理解することなしに先には進めない。言ってしまうえば当然のことかも知れないが、他者の理解が安全保障、ひいては国際関係の根幹になるのである。

ますます国家間の関わりが密接になる現在、他者の理解の重要性、この当たり前のようで難しいことを気持ちにとどめ、また社会に発信していかなければならない。

地域主義

Regionalism

分科会メンバー

杉田 道子*	(国際基督教大学教養学部)
樋口 宏	(立教大学法学部国際比較法学科)
島村 明子	(東京大学文科一類)
唐澤 由佳	(慶應義塾大学経済学部経済学科)
前田 薫	(慶應義塾大学法学部政治学科)
Anna Franekova*	(Harvard University)
Florence Maher	(Earlham College)
Paul Thornton	(University of North Texas)
Matthew Wright	(Washington University)
Derek Sheridan	(Chicago University)

(*はコーディネーターを表す)



分科会設置の目的

近年の世界経済をみると、各国の市場の自由化、政治的協力、そしてその結果として地域の自立や安定などを目指した地域主義 (Regionalism) への傾斜は不可避な潮流となりつつある。しかし、それと同時に問題点も多く指摘され、特にアジアでは、政治システム、経済状況、文化的価値観の差をどのように克服すべきかが議論されてきた。地域主義は、比較的最近注目されてきた概念であるため、保護主義をとるブロック政策だとの批判やグローバリゼーションの代替としての期待が顕在するなど、今後の世界への影響力は未知数といえる。当分科会では東アジア地域主義に焦点を当て、経済統合、アジアにおける中国と日本の役割、地域統合と日米の二国間関係などを考察する。政治、安全保障、経済、文化など様々な分野でみられる地域主義を、参加者の関心を活かして多面的に議論したい。

分科会活動内容

1. 事前準備

- ・ 各自が地域主義に関してリサーチ、ペーパーの作成
- ・ メーリングリストでの文献、資料、ホームページなどの共有
- ・ 横浜山手中華学校見学

6月22日、横浜にある山手中華学校を見学させて頂いた。全国に五校しかない中華学校のひとつで108年の歴史をもつ横浜山手中華学校では、東アジアの中でも鍵となる日本と中国との架け橋となるような人材育成を行うかのごとく、日中バイリンガル教育・素質教育を行っていた。東アジアにおいて地域主義が今後進展していく上で、日本にとって中国は重要なパートナーである。二国間関係を更に深いものにしていく上で、重要なモデルとなりうる学校であった。

2. 討論内容

本会議では、それぞれのメンバーが執筆した論文を中心に議論のテーマを抽出し、討論を行った。

2-1 地域主義の概念

本会議では、「東アジアにおける地域主義のありかた」に焦点を絞って議論することに決めた。東アジア地域主義の定義、範囲、現状分析、問題点の共有化、独仏が経験した信頼醸成メカニズムが日中関係に該当するの、などについて広範に話し合い、今後の議論の方向性を定めた。

2-2 経済的地域統合プロセス

東アジア共通通貨導入の利益・不利益の論文に基づいて討論が進められた。その中で、通貨統合までに「JASC東アジア経済統合モデル」を構想した。東アジア地域経済統合を進めていくためには、

①二国間自由貿易協定 (F T A)	②多国間 F T A	③関税同盟
④共同市場	⑤経済同盟 (通貨統合)	⑥完全な経済統合

の、漸進的プロセスが必要である。現在は①の二国間貿易協定が難航している状況であるが、地域経済統合をもたらす中小国・大国への長期的利益のためにも是非とも実現させたい。また、地域経済統合の上で鍵となるのは元切り上げへの一步を踏み出し、巨大な市場を持つ潜在能力を秘めた中国である。

2-3 東アジア経済統合の文化的側面

EUの統合の際に、自国の文化が喪失されることに対する懸念から“Euroskeptical”という単語が生まれたことなど、地域主義における文化・宗教的多様性を政府レベル・市民レベルでいかに克服するかについて話し合った。東アジアにおいては多様性を結びつける共通の何かは存在するの、かということで、儒教・ソフトパワーなどの可能性について討論した。

2-4 安全保障

1994年から開催されているアセアン地域フォーラムや、現在開催されている六カ国協議などの地域主義的安全保障の枠組みに関して、有効性、信頼醸成の実態などについて議論した。その上で、東アジアの中でも争点となる、冷戦の負の遺産ともいえるべき朝鮮半島や台湾問題に関して、アメリカと日本がどのような姿勢で臨んでいくことが東アジアの利益となるのか議論が深まった。

2-5 東アジア地域主義と日米関係

東アジア共同体とアメリカの関係については、主に安全保障の側面から話し合いを進めた。日本にとって憲法第9条改正問題や日米安全保障条約、国連安保理常任理事国入り、アメリカにとっての不安定の弧、戦略上の拠点としての沖縄など、東アジアの中での日米関係の現状に関して広範な争点に関して議論し、将来の東アジアの文脈の中での日米関係のあり方について考察した。

2-6 中国

「中国企画」ともリンクさせながら、眠れる獅子といわれる中国に関して、現状分析と将来の東アジアにおける位置づけに関して広範な議論が成された。現在、元切り上げの実現、過度の抗日運動、軍事費拡大、経済の飛躍的成長など、大きな変化の中で台頭する中国に対して将来的な東アジアにおける日中関係のあり方を考察した。殊に、争点となったキーワードは「不安定性」である。中国内部（殊に東西）の地域格差、環境問題の悪化、労働力の高賃金化、共産主義という政治体制など、いわゆるチャイナリスクについても様々な考察がなされた。

日中の二国間関係に関しては、歴史教科書問題、靖国神社参拝問題だけではなく、中国の国民教育などのサイドからも考察した。「政冷経熱」といわれる現状において、過去と将来のバランスを取りながら将来に向けてどのような交流を図っていくことが必要か、また日本として何をしていくことが日中関係の「安定」に繋がるか考察した。

総括

1. フォーラム

フォーラムでは時間の都合上、東アジアにおいてアメリカを含めて安全保障の枠組みを作っていく必要性のある台湾・北朝鮮について安全保障に特化した政策提言を行った。

台湾に関しては、中国の武力行使の可能性や、台湾国内の世論、経済的な相互依存性を考慮し、東アジア地域全体の安定のためには、長期的かつ平和的に、“Unification”が実現されることが望ましいという見解に至った。東アジア地域での平和を保つために、中国政府は忍耐をもって、武力による統一ではなく、経済的・文化的交流に積極的に取り組むこと、日本国政府と米国政府が仲介役として、武力による統一に対しては抑止として存在感を示すことを提言した。

北朝鮮に関しては、東アジアの最大の不安定要因である核の放棄について報告した。投資・支援を行うなど経済的自由化を期待するだけではなく、安全保障の側面では現在漸進的に進められている六ヶ国協議などの多国間の枠組みの中で、二国間の対話を進め、その中で「飴と鞭」をうまく使い分けていく必要がある。日米、そして東アジア諸国にとって、「忍耐」(Patience)がキーワードである。

2. 全体を振り返って

東アジアの地域主義について、参加者の関心に基づいた日本・アメリカからの複眼的視点で多面的な議論をすることができた。当初はアメリカ側参加者が東アジア地域主義についての関心が低いのではないかという懸念もあったが、実際の分科会では逆にアメリカ側参加者の豊富な背景知識・反駁能力に助けられ、初回から白熱した討論が行われた。経済的地域主義に関しては比較的楽観的な考察が多かったが、安全保障の上では現状を打破するための政策が必要であることが共通見解となった。経済交流を通じたスピルオーバー効果、多国間の枠組みの中での話し合い、環境問題などの利益の共有など、建設的な政策を提言することができた。

一方で、具体的に東アジア地域主義に対して、日本・アメリカが政治・経済・安保の上で具体的にどのような貢献・スタンスをとっていくか、政府レベルだけではなく市民レベルでどのようなアプローチをすることが可能であるか、という点に関しての結論は議論の余地を残す。この点は今後の私たちの課題として考えていきたい。

世界経済体制と日米社会再編成

Globalization and Economic Restructuring in Japan and U.S.

分科会メンバー

福田愛奈* (お茶の水女子大学生生活科学部人間生活学科)

ダラ・プスピアルディニ (九州大学 21 世紀プログラム)

中里広明 (早稲田大学大学院経済学研究科)

藤原智生 (鳥取大学農学部生物資源環境学科)

国松永喜 (明治大学二部政治経済部経済学科)

Hunter McDonald* (Harvard University)

Yui Hirohashi (Harvard University)

David Langstaff (Durham Technical Community College)

Sydney Reed (Princeton University)

Loc Van (Cornell University)

(*はコーディネーターを示す)

分科会設置の目的

交通や通信などの技術発達および冷戦終結に伴う資本主義経済の世界的広がりにより、経済は名実ともにボーダレス化しつつある。また、現在中国をはじめますます多くの国家が WTO に加盟し、二国間での自由貿易協定／経済連携協定も多く結ばれている。そこではモノ・カネ・技術の市場の開放や国をまたぐ労働市場のダイナミズムがみられ、世界規模での相互依存が深められている。

このような経済秩序は国際社会の安定や各国国民の便益に寄与しているが、その一方で見逃すことのできない負の側面を内包しているのもまた事実である。地球環境問題は一国だけの対応ではその解決が期待できない。また先進国は低コスト労働市場を東欧や東アジア諸国に求め、その結果、国内産業は空洞化し、労働需給に大きな影響を与えている。さらに、移民労働者に起因する問題や課題が山積していることは周知のとおりである。

日本と米国という二つの経済大国に暮らす私たちは今日の世界経済から大きな便益を得ている。そこで、私たちは、個人そして所属する団体、さらには国家として上記の負の側面に対する責任についても討議するべきであると考えます。

本分科会では上記のような現在の世界経済が抱える諸問題を多様な専門性と様々な視点から分析することを試みる。

分科会活動内容

私たちはテーマに沿って様々なトピックを取り上げ、一つのトピックについて発表を行い、発表後は全体でディスカッションをするという形式をとった。そこで、発表のトピックとディスカッションの具体的な内容を記していきたい。

1. アウトソーシングとアメリカ経済

- ・ オフショア・アウトソーシングの定義づけについて
- ・ アメリカのオフショア・アウトソーシングの歴史的な流れについて
- ・ アウトソーシングがどのようにアメリカ国内の経済と雇用に影響を与えているのかを分析
- ・ アウトソーシングに対してアメリカ国内の労働者はどのような懸念を抱いているのかを分析
- ・ アウトソーシングの今後の行方を考察

2. 移民問題

- ・日本における移民問題について、また移民問題の日米間での位相の違いについて
 - 日本人の均質性
 - アジア諸国と日本の経済関係と政治関係の差異
 - 少子高齢化、NEET との関連
- ・国際的な分業体制におけるアウトソーシングと移民の関連性について
 - 途上国におけるアウトソーシングによる雇用の創出と地域経済への影響
 - 先進国における産業の空洞化と低賃金労働の増加
- ・いわゆる南北問題について
 - 何の平等を保障すべきか
 - どのような格差是正策が有効か

3. 日本の社会福祉制度と労働確保

- ・日本の失業保険制度において、失業者はより長期的に保険を給与するために次の職探しを遅らせるなどの問題点を指摘
(問題解決案)
 - 失業者には生活するのに最低限のお金を給付する
 - 失業者に対する扶助金を削減する
- ・国家収入の減少と失業率の上昇を理由に、失業保険制度の破綻が懸念されている。そのため、次のことを考えなければならない
 - 社会福祉にかかるコストを削減すると同時に失業者にアルターナティブなセフティ・ネットを提供するにはいかなる方法があるのか？
 - 労働確保のためにどんな国家政策が考えられるのか？

4. 東アジア共同体の可能性（中国の台頭に対抗するために、日本はアジア諸国とどのような関係を築くべきか？）

- ・アジアにおける中国の脅威はどのようなものかを軍事的・経済的視点から見ていく
- ・日本と ASEAN の関係について
経済協力を通して日本はアジア諸国と関係を築いてきたが、中国の台頭を受け、今後の日本と ASEAN の関係がどのように変化するのか
- ・中国と ASEAN の関係について
中国は日本と経済格差を軽減するために、ASEAN 諸国との FTA 締結を日本より早く進めるという動きを示しているが、中国の外交姿勢に対して ASEAN 諸国はどのように対応しているのか、そして ASEAN の戦略とは何か
- ・東アジア共同体の可能性について
東アジア共同体の実現は日本にとってどのようなメリットがあるのか

フォーラムでの発表内容

中国とインドの台頭

→ 日本と米国にどのような影響を与えているのか？

★ 米国 オフショア・アウトソーシングの促進

→ 労働機会が海外に大量流出 → 失業者の増加、産業の空洞化

解決案：

- 知的財産に対する規制を強化する
- 研究開発の分野を普及させるためにあらゆるインセンティブを提供する

- 失業者向けの補償を拡充するとともに、失業者が新しい仕事に就く機会を増やすために技術訓練など教育を提供する場や機会を充実させる

★ 日本 サービス部門へのエコノミ・シフトと研究開発分野の重視

→ 高いスキルを持つ技術者が求められ、未熟練の労働者が取り残される

解決案：

- 若年層の失業者やフリーターにターゲットを定めて、労働の需要を拡大させる
- 公共事業の国家予算を削減し、その分を若い世代のための職業訓練などの教育機関の充実化に当てる

総括

当分科会では、具体的な話し合いが始まる前に、分科会のテーマに対してアメリカ参加者と日本参加者は全く異なった視点からテーマを解釈していたことが分かった。アメリカ側は、中国やインドの台頭に対して先進国である日本と米国はどのような戦略的な政策を展開すべきなのかということに焦点を当てた。そのため、アウトソーシング、雇用問題、年金問題、教育、所得格差などを重要なキーワードとして挙げた。一方、日本側は、既存の世界経済体制によって生み出される様々な負の側面を取り上げ、それらに対して先進国である日本と米国にどのような責任が問われているのかということに焦点を当て、環境問題、内発的発展、農業問題、移民問題を取り上げた。このように、両者の問題意識は「戦略」と「責任」にはっきりと分かれていた。そのため、分科会での今後の全体の方向性を定めるために話し合いが行われた。最終的に、私たち各自が分科会で話し合いたいトピックを出し、それらのトピックを発表することになった。

私たちは「世界経済体制と日米社会再編成」というテーマの下でディスカッションを行ったが、日米間で問題意識を共有することが困難なことがしばしば起こった。例えば、アウトソーシングが米国にとって社会問題として取り上げられる重要な問題である一方、日本ではアウトソーシングは現在の米国での扱いのように重要なトピックとして扱われていない。そのため、問題解決を提案する際、米国と日本それぞれの独自の問題に対する解決案を模索することになり、日米両国にとって重要な論題を探索し、それについて日米両政府に共同政策を提案することはできなかった。

科学技術と現代社会

Science and Technology: Social Responsibilities

分科会メンバー

井上 裕太 (慶応義塾大学法学部政治学科)
 加藤 康弘 (東京大学大学院工学系研究科先端学際工学専攻)
 津端 幸江 (近畿大学生物理工学部遺伝子工学科)
 沼田 雄二郎 (慶応義塾大学法学部政治学科)
 袴田 隆嗣* (東京大学大学院公共政策学教育部公共政策学専攻)
 Lasantha Gunasekara* (Cornell University)
 Thea Lorentzen (Stanford University)
 Rachel Olanoff (Tufts University)
 Lane Rettig (University of California-Berkeley)
 Benjamin Seligman (Cornell University)
 (*はコーディネーターを示す)

分科会設置の目的

大気汚染、飢饉、人口問題、エイズ、貧困、エネルギー問題…現代国際社会は多くの重要な、かつ地球規模で取り組まなければならない課題を抱えている。一方で現代の科学技術の進歩には目覚ましいものがあることも事実である。そこで、どのように科学技術は私たちの抱える諸問題の改善へ貢献できるのか、これを私たちの分科会のメインテーマに設定した。本分科会では会議の最初に、現代社会の問題、また現代の科学技術の性質について学習し、議論の枠組みを設定する。そうした理解を前提に参加者独自の視点で提起した問題について議論し、なぜ当該問題に対して特定の科学技術を用いてある結果を導くのかについて説明する。その際重視されるのがそれぞれの経験、知識に裏打ちされた価値観なり倫理観である。そして、最終的には個々のケースにおける見解だけではなく、時間的、空間的に広い視点から現代社会に生きる私たちをとらえたいうえで、科学技術の責任について意見をまとめることを本分科会の目標とする。日本、米国という二つの経済大国に暮らす私たち、また大きく異なる文化の中で暮らす私たちが一同に集うという環境を最大限生かす。

分科会活動内容

1. 事前合宿

5月3日～5日、東京代々木のオリンピック記念青少年総合センターにて第57回日米学生会議事前合宿が行われた。当分科会では、自己紹介と共に、本会議に向けた指針と準備すべきことを議論した。まず指針について。本会議の分科会時間数では多くを議論する時間が不十分なことから、多々ある課題の中で“環境問題対策への科学技術の貢献”とテーマを絞った。また当分科会を単に検討するだけで終了せず、第57回日米学生会議をこえて検討結果を何らかの形でアクションすることを活動目標とした。つぎに本会議までの約2ヶ月間に準備すべきことを2つ決めた。1つ目は、環境問題対策への勉強と各省庁の政策動向を把握すること。2つ目は、検討結果のアクション先としてメディア、政策提言、コンテスト、イベントなどから当分科会のテーマに合致するものを探すことであった。

2. 本会議

以下、ラウンドテーブル (RT) ごとに報告する。

RT#0. 米国側コーディネータと日本側参加者との事前ミーティング

米国側コーディネータが本会議に到着後直ちに、事前ミーティングを米国側コーディネータと日本側参加者のみで行った。用件は2つ。1つめは、朝日新聞社主催のレセプション参加と国連大学への訪問という Field Trip 案。2つ目は議論内容。日本側参加者が提示した地球環境問題対策だけではなく、米国側参加者が各自用意したレポートに沿って広いテーマで分科会を運営したいと要求された。

日本側参加者として Field Trip 案には賛成したが、議論内容に関しては賛成できなかった。理由は、米国側の各レポートテーマに一貫性がなかったこと、また各テーマが広く、十分な事前勉強なしに議題を深く追求し検討することは困難であったからである。検討結果からアクションすることが日本側参加者の目標であったことと分科会時間数が少ないため、テーマを絞ることは議論の活性化に必要不可欠だと米国側コーディネータに要望した。しかしながら日本側コーディネータの不在もあり、要望は聞き入れなかった。

RT#1. 自己紹介と各 RT のテーマ決め

自己紹介後、米国側参加者が各自用意したレポートに沿って当分科会を運営進行することとなり、テーマ決めを行った。各 RT の議論テーマは、Oil & alternative energy、Women & Gender in Science、Nuclear Proliferation & Missile Defense、Biotechnology & World Hunger、Expanding IT into the Developing World、AIDS - Epidemic Response Plan、Government Immigration & Research、City planning であった。また米国側コーディネータの提案により、ジェンダーとアイデンティティ分科会、安全保障と平和構築分科会との合同分科会を各一回ずつ行うことを多数決により決めた。

RT#2. 科学技術社会における女性の立場→ホモセクシュアリティ

ホモセクシュアリティについて科学的な見地を交えながら、ジェンダーとセクシュアリティ分科会と議論した（議題がホモセクシュアリティにテーマが一変した理由は不明）。本 RT では、ホモセクシュアリティを形成する遺伝子研究推進の是非に議論が分かれた。賛成派は、ホモ遺伝子の解析により偏見や差別に苦しむ人の一つの理由付けを可能とすること、基礎研究は科学的に重要であるという意見だった。一方反対派は、ホモ遺伝子の保持が新たな差別を誘引すること、性別を女性と男性に二極化せず新たに中性の性別を社会的に認知・制度化する必要性、遺伝子研究などへの巨額予算を政策・制度化により予算を費やすべきとの意見であった。

RT#3. 核不拡散条約

核不拡散条約の歴史的背景と条約の簡単なあらましを担当者が説明し、広く議論した。内容は、核兵器による軍事パワーバランス、核兵器の必要性、核兵器保有国と経済であった。そして、ミサイル防衛システム開発に重点を置くべきか、核軍縮交渉や国際核管理網構築など外交努力に力を注ぐべきかなど国家の安全保障政策へと議論が展開された。

RT#4. 安全保障と平和構築分科会の合同分科会

科学分科会側と安全保障分科会側から各1名が説明した。科学技術分科会は RT #3. 核不拡散条約と同内容であった。安全保障分科会より、極東アジアにおける核・ミサイル問題の歴史とその背景、IAEA や KEDO などの政策と方針、北朝鮮の武装規模と戦略、北朝鮮に対する日本・中国・米国政府の対応などを時系列で説明された。北朝鮮をいかにコントロールするか、中国との関係、日米安全保障条約の位置付けと役割について議論した。

RT#5. 石油とエネルギー問題

引き続き平和構築分科会の合同分科会において、石油とエネルギー問題に対する科学技術の利用方法を議論した。議論の背景として、石油使用量の増加に伴って二酸化炭素排出量などが増加し、石油使用の増加は地球温暖化を促進していると推測されていることがある。天然ガスなど地下資源の新たな採掘方法による資源の持続性確保、バイオマス・エネルギーなどの代替エネルギーの可能性を討議した。

RT #6. Cradle-to-Cradle

William McDonough と Michael Braungart が提唱した cradle-to-cradle の概念を、エコデザインの方法論を中心に討議した。内容はリサイクルと製品デザインの矛盾点を踏まえ、エネルギー循環型のビル・ゼロ・エミッション工場、屋久島の化石燃料追放や山形のレインボー計画など環境問題への取り組みを日米で比較した。さらに大量生産・大量消費・大量廃棄という社会構造の変革と、経済成長と両立するモデルの必要性などを議論した。

RT #7. 飢餓とバイオテクノロジー

第一次緑の革命による飢餓の構造化、Micro Nutrient の不足による栄養問題、厳しい特許法網の実情を踏まえて、世界的飢餓の解決にむけた遺伝子組換作物技術を検討した。遺伝子組換作物技術により、害虫・病気に強く栄養価の高い作物などを開発し、食料を十分に収穫・提供することで途上国の飢餓を減少することと予測されている。しかし遺伝子組換作物の実現には、遺伝子作物の安全性を長期間確認検討、発展途上国に人的資源＝科学者育成、先進国による資金と技術の継続的な援助などの必要性があると議論した。

RT #9. 発展途上国へのインターネット普及

インターネットの必要性を前提とした議論を行った。Thin Clients システム（中央演算をホストコンピュータに処理させることで高価な CPU を必要としない）と同時に LINUX などのオープンソースソフトウェアを用いることで、安価なコンピュータを多く設置し、またインターネットなどのインフラを整理することで、オンラインによる教育の向上や産業の発展を望め、発展途上国の国力拡大が期待できると検討した。

RT #7、8、10、11、12. 東京フォーラム準備

東京フォーラムの準備をおこなった。発表の趣旨は、環境問題対策への科学技術の貢献とし、各自の役割分担を決めた。また RT #10 では、OGと趣旨について意見陳述を行った。

東京フォーラム

cradle-to-cradle、持続可能性を中心に環境問題対策への科学技術の貢献を発表した。地球規模に広がる環境破壊などの解決には、各国の協力と科学技術をより応用した社会が必要であること。そして我々一人一人が科学技術を使用していることを自覚し、日常社会においても環境問題対策への科学技術の貢献が個人でも可能であるのだと発表を締めた。

総括

遺憾ながら、検討結果をアクションするという当初の活動目標は達成できなかった。また Field Trip は連絡ミスにより廃案、各 RT での議論内容は準備不足により、深い議論がされず、結論に至ることが一度もできなかった。結果、当分科会では“会議”として何も達成・実行できなかった。これは米国側コーディネータにいいようにかき回された結果であることに起因する。この失敗の方策として、コーディネータが能力に足らないと判断された場合は、参加者によりコーディネータを解任できる制度を設けること、また事前合宿後、日米参加者が活動目標と内容を本会議までに連絡を十分に取り合い調整することの2点が挙げられる。次回会議では、我々の失敗を教訓とし、意義があり実行力が伴う分科会に導くことを強く望む。勿論協力が必要とあれば、我々はその為の尽力を惜しまない。

グローバル化の功罪

Social and Cultural Implications of Globalization

分科会メンバー

伊東孝哲* (慶應義塾大学総合政策学部)
 浅岡真依 (津田塾大学学芸学部)
 佐藤愛 (早稲田大学国際教養学部)
 佐藤広大 (国際基督教大学教養学部)
 山内拓磨 (立命館大学大学院国際関係研究科)
 Michelle Lee Jones* (University of Chicago)
 John Baldrige (Northeastern State University)
 Geoffrey Lorenz (Duke University)
 Charlene Morales (Cornell University)
 Alexander Soriano (University of Chicago)
 (*はコーディネーターを示す)



分科会設置の目的

経済面において注目されがちなグローバル化であるが、実際は他の様々な分野とも密接に関わり合い、そして同時に衝突も引き起こすものとなっている。例えば、アメリカ発祥のファーストフード現象が流布し、各国の食文化に影響を与えるのに伴い、各国の従来の生産方法や生活スタイルに変化を及ぼしている。同時にグローバル化によって職を失うなど、決定や実践から取り残された人々は国境を越えて「反グローバル化」という新たな連帯を作り、象徴的なグローバル機関に対して行動を起こしている。すなわち、現在のグローバル化は、国境を越えた人々との共通空間を作り出す一方で、逆に不確実性や複雑性を引き起こし、文化から食生活、公共サービス、地域共同体にいたるまで、各国のアイデンティティを脅かしている。

当分科会ではこのような問題意識を下に、グローバル化における社会文化的側面に焦点を当てながら、現在のグローバル化の功罪を明確化する。そして、この中で利益を得る人々とそこから排除される人々の衝突原因、そしてその衝突を融和する方法、最後に今後私たちがどのようにグローバル化に対応すればよいのかに関して議論していく。

分科会活動内容

1. 事前勉強

分科会メンバーでグローバル化に関する基礎的な本を教材として輪読を行い、分科会での議論に必要となりそうな知識の共有化を図った。また、メンバーそれぞれの議論における興味分野やこれまで育ってきた環境などの情報も交換し、議論に対する認識をそろえた。

2. 討論内容

2-1 個人ペーパー

事前に個別に作成したペーパーについての発表を議論への導入とした。トピックは、浮世絵にみる芸術とグローバル化の関係、マレーシアにおける多文化共生の試み、第二次大戦における日本企業の戦争責任、帝国としてのアメリカによる国家主権の減退、人権、アメリカでの戦時下の日本人排斥運動、性産業と人身売買、ネイティブアメリカンチェロキー族の歴史と現在、ラテンアメリカ、など多岐に渡ったが、分科会のテーマであるグローバル化との関連性を意識し

ながらプレゼンテーション・意見交換を行った。

2-2 性産業

ジェンダーの分科会と合同で性産業について議論を行った。この産業は外からは実態が見えにくく、全体像をつかむのも難解である。また日米の参加者間で認識の違いもあり、見ない振りをしてしまいがちなトピックであったが、積極的な意見交換が行われた。

2-3 多文化社会

各メンバーの育ってきた地域での実体験も踏まえて、多文化社会のあるべき姿について議論した。サブトピックとして学校教育についても議論し、広島の中野町中学校でふれた平和教育やアメリカで行われているマイノリティーに関する教育についても活発な意見の応酬があった。

3. ゲストレクチャー

日本で外国人社長として活躍するインベスコ投信投資顧問株式会社のアレクサンダーM. プラウト氏を講師として招き、異文化での生活やビジネスについて議論した。国際人になるための方法には定義がなく、それはマインドセットだと論ずる講師から、様々な困難を乗り越えてきた中から生まれた本質的な考え方を学んだ。

4. フォーラム

分科会のテーマであるグローバリゼーションが進んだ世の中では、物、人、金、情報が国境を越えて世界中を移動するが、その中でも人の移動は異文化間に相互作用をおよぼし、良くも悪くも社会に大きな影響を与える。そこで私たちの分科会のフォーラムでの発表として、グローバリゼーション下の人の移動について、性産業と移民の2つの面から議論をまとめ、より良い社会にむけての提言を行った。

総括

グローバリゼーションという言葉は難しい問題を簡単に紐解くことができる魔法の言葉のようであるが、実際にはこの言葉を使っても世の中の事象について何一つ具体的な説明はできない。様々な要素を含む壮大かつ曖昧なテーマであるため議論にまとまりがつかなくなることは最初から予想できた。そこで私たちはまず議論に向けて知識と認識を共有化することに力を注いだ。

日本側参加者だけでも様々な切り口があった。参加者それぞれが海外経験などを通してグローバリゼーションを肌で感じていたため引き出しはたくさんあったが、それらの経験を議論の中でまとめていくのは困難な作業であった。これにアメリカ側参加者が加わるとさらに議論は膨れあがっていった。個人レベルでの切り口の違いはもちろん、日本側参加者は抽象的な議論を、アメリカ側はトピックをしばった具体的な議論を進めていくという、日米参加者間の認識の違いは議論のすり合わせが難しくなる原因であったと同時に大変興味深いものでもあった。

議論を進めていく中で、うんちくの応酬とまではいかないものの単純に知識の深さを披露し合うだけという雰囲気になりかけたときもあった。この流れを変える一つのきっかけとなったのは分科会独自に開催したゲストレクチャーだった。日本に根を張った生活をしていても資格好で区別されるときがあるといったプラウト氏の実体験に基づく話に背中を押されるように、分科会参加者はそれまで以上に20何年間かとはいえ非常に濃いそれぞれの経験を語りだした。頭では分かっていたが、そこで改めて気付いたことがあった。それは、日米という差異だけではなく、時にはそれ以上に、日本内、アメリカ内でも社会環境は違うということであった。グローバリゼーションというものを一つの概念にとらえ、それだけを考えていても何も分からない。それを仮に顕微鏡で覗き込んだときに見えてくるであろう大事な要素は細かすぎて見えづらいということである。しかし地域に

よって全く違う社会の在り方を考えると、逆にそこから全体像が見えてくることもある。

最終的に私たちは原点に戻りトピックをしぼり、性産業が織り成す人の流れ、労働移民、これら二つの題目を柱としてフォーラムの発表に備えた。分科会テーマであるグローバリゼーションそれ自体を総括する発表ができたかという疑問ではある。しかしその過程でグローバリゼーションが加速させる人の移動や文化の流布といった重要な要素については満足いく議論ができた。点数をつけるならば100点ではないだろうが、今後メンバーそれぞれが自分なりの方法でその余白を埋めていく道筋はできただろう。

第 5 章
参加者の声

浅岡 真衣

「日本に帰りたい…」JASC 中、つらくなつた時によく口にしていた言葉だ。そのたびに周りから、「ここ日本だから！」と激しいつつこみをもたらしていたのだが、あの時の私にとって、JASC は、「日本」でも「アメリカ」でもなく、どこか違うひとつの「社会」であった。日本食を食べ、電車に乗り、携帯を使い、まったく普段日本で生活するのと同じような環境にしながら、JASC は、日本ではない、何かだった。日本とアメリカがミックスしたとも言いがたい、いまだにあの雰囲気形容する言葉は見つからない。思い出すのは、八月の蒸し暑い気候と、夜中まで語り明かし寝不足でボーっとした感覚、沖縄で蚊にさされたかゆみ（ひどかった！）、そしてみんなの明るい笑顔である。

楽しいこともあればつらいこともあった。今まで過ごしてきた人生の中で得たありとあらゆる感情を一気に爆発させたようだった。笑って、泣いて、学んで、爆笑して、苦しんで、喜んで…。そんな風に無我夢中で精一杯楽しんだ一ヶ月後、私が得たのは日米の多くのかげがえのない友人である。これからも、ずっと語り合っていきたいし、気持ちを共有していきたいし、私が死んだら骨を拾ってもらいたい。私も彼らの骨を拾うつもりである。

JASC が終わってすぐアメリカのメイン州での一年間の留学が始まった。さっそく、ボストンにいる JASCer を訪ねたり、携帯やメッセで各地の友達と連絡を取ったり（アメリカでは夜 10 時以降と休日は通話料タダ）、交流を続けている。アメリカの端っここの田舎町で、孤独や不安に苛まれながらなんとか生きていられるのは、そういった、気持ちをシェアできる、本当の意味で「会話」ができる友人たちに支えられているからだと思う。これからの JASCer には、JASC という機会を生かして、思いっきり楽しんで、友達を沢山作ってほしいと思う。ああ、「JASC に帰りたい！！」

荒島 由也

最初に島の噂を聞いたのは少し前のことだった。どうやら島には面白いものがたくさんあ

るらしい。好奇心旺盛な Y 氏はいてもたってもいられなくなり、すぐさま島について調べると、手続きを済ませ島へと旅立った。Y 氏が参加したのは島への 1 ヶ月の体験ツアーだった。8 人のガイドに引き連れられ Y 氏は常夏の島で珍しい動物や変わった果物、心揺さぶられる風景などあらゆるものを堪能した。島はまるで楽園のように Y 氏の目に映った。いよいよツアーも終わりに近づくと、どうやら参加者の中から次期ツアーガイドボランティアを募集するという話がガイドの口からでた。まばゆいばかりに輝くその島を Y 氏は忘れられるはずもなかった。ボランティアに志願したのも当然だった。ガイドに就任した Y 氏はとても幸せだった。次のツアーではどんなことを企画しようか、心を躍らせた。島の自由な雰囲気を多くの人に伝えたいと Y 氏は願った。

島の異変に気づいたのはガイドを始めて間もない頃だった。楽園は暗雲に包まれ、荒れた大地が広がっていた。Y 氏が見ていた島は島のほんの一部に過ぎなかった。それも本当に美しい部分。小屋にあった島に関する資料を読んでもみると、ツアーはマンネリ化し、ツアーを彩る玉虫色のスローガンだけが寂しそうに書かれていた。しかし、この島を魅力あるものに作り変えようという意志は Y 氏を含め他の 7 人のガイドも同様だった。一方、島の管理人は島の改革に関しては疎く、その状況に危機感を感じている様子はなかった。呆然とした Y 氏は信じられずに島を歩き回ってみることにした。しばらく歩き回ると数十年前にツアーに参加したという人たちに偶然出くわした。Y 氏は島の現状を訴えるどころか、島の話をするのをさえためらった。なぜなら、彼らはツアーをこよなく愛し、あまりにその過去にしがみついていたから。ツアーが終わってからツアーの貴重さが実感できる、という彼らの言葉には正直首をかしげた。と同時に、島の惨状を考えると以前のガイドたちがどのように島を見ていたのか、気になった。

Y 氏の担当は島のプロモーション。より多くの人に島を知ってもらうということが Y 氏の仕事であった。裁量は多く、好きなように仕事は出来たし、Y 氏は仕事自体にはとても満足していた。が、何かすっきりとしない感覚、違和感といったものがなくなることはなかった。ガイドたちはプログラムを企画すると同時に島を開発するための資金も調達してこなければ

いけなかった。ガイドたちは島のスポンサーを探すために駆け回ったが、断られる理由は常にこうだった。「あなたたちが島を魅力的だと考えるのはよく分かった、しかしわれわれにとっての島の魅力は何か。」と。島は時代の環境変化に完全に取残されて過去の伝統を大きくひきずっていた。島には崇高な理念はあっても具体的な社会にアピールできる成果はなかった。そして、島の行き着くべき方向性がなかった、これこそが島にとっての最大の問題であった。

個人的な気づきや発見は多くあったかもしれないが、島を根本的に変えることはできなかったとY氏は自分の力不足を嘆いた。それは単純に力不足であった。変革という言葉の重みを肌で知った。しかしそれは決して結果に対して満足していないということではなかった。Y氏は他のガイドたち、島へのツアーに協力してくれた全ての人たち、そして与えられた全てのチャンスに感謝し、一定の成果も残せたと感じていた。ただ、島での経験を美化するつもりは毛頭なかったし、ツアーに関する批判は大いに受け入れるつもりでいた。

常夏の島での1ヶ月ツアーがまた終わろうとし、新たなボランティアガイドの募集も始まった。Y氏はちょうど1年前を思い返して何ともいえない心境になった。島の波打ち際は相変わらず穏やかで楽園にふさわしい概観であった。大きなココヤシの樹の下にY氏は腰掛けると、陽の光を反射しながらどこまでも続く碧色の海を眺めてこう自分に呟いた。このツアーでの経験は将来貴重なものとして振り返ることになるだろう、と。

伊藤 朋子

この夏の日米学生会議を言葉で形容する事は非常に難しい。

古都・京都で、日本の慎ましくもあり艶やかな伝統を目の当たりにし「日本文化の潮」を感じた。それは、現在日本で暮らしている私にも現代とは異なる「日本の伝統」とは何なのかを再度認識する機会となった。そして広島。原爆で瞬く間に破壊され、黒い雨の降る街と化した広島を、本や教科書ではなく実際に肌で体感した時の、うちから沸きあがってくる何とも言えぬ憤りで体がカッと熱くなったこと、そして恐怖

に体が震えた感覚を今でも忘れない。常夏の国、沖縄ではその陽気で朗らかな人々の笑顔の裏に隠された悲惨な歴史を目の当たりにすることができた。戦時中の一般市民の豪内でのずさんな生活や、現在もなお続く米軍基地問題など、旅行会社のパンフレットの中に見る青々とした海からは想像もできない程の幾重にも重なった複雑な歴史を沖縄は歩んでいた。会議の最終地でもあり、私が住む東京では“中心”という言葉が頭から離れることがなかった。大企業の経営者や、官僚の人々など「物事を動かしていく力」とそのダイナミッククスを感じることが出来た。

サイトという側面から見ただけでも、一度に多くのことを学べたまたとない機会であった。これらの体験により、政治、経済、ビジネス、そして文化という学問へ対する食欲が一層増したことは確かであり、今後の大学生活の糧となった。しかし、学生会議の魅力はそれだけではとどまらなかった。

エマーソンの有名な格言がそれぞれものを見事に言い当てている。

“全ての人間には個性の美しさがある”

そう、この学生会議は学問や体験という側面はおろか「人間の魅力」というものに感化され、刺激を受け、互いに理解しあい時に衝突して、尊敬や信頼を深めていく、またとない機会だった。

この会議を形容し、言葉で表すことは私の少ない語彙力では不可能である。

しかし、今でも強く心にのこっているこの気持ちはずっと変わらないという自信がある。

“Looking Forward to looking back”

— あの頃を思い出すのが楽しみでしかたない

何十年たっても、私はこの夏の出来事を大切にしていかに違いない。

伊藤 雅俊

日米学生会議の感想を、と言われると非常に難しい。この感情を正確に形容する言葉が見当たらないのだ。どんな巧みな言葉使いが仮に私にできたとしても、言葉足らずになってしまいこの感情は伝えられないと思う。今回の本会議で話し合う際の言葉の重要さや便利さは痛感したが、それでもこういうとき、言葉は不便だ。ただ、一つだけ自信を持って言えること。それは『参加して良かった』。参加前の自分には、あれほど充実した気持ちの私自身の姿は想像できなかつた。

私は国籍・身分を問わず、異なるバックグラウンドを持った人たちとの交流を目的に JASC に参加した。何を考え、どんな価値観を持ち、どんな信念を持っているのか。それぞれのそれを認め合い、尊重し、影響し影響されることを望んだ。この学生会議に参加したことにより今まで築き上げてきたアイデンティティや人生観に広がり生まれ、自分がこれからしていくべき生き方の糧になると同時に、多大な影響をもたらすであろうことは間違いない。さらに、今回築かれた参加者たちや関係者たちとの交流が、これからもずっと、続いていくことを切に願う。

井上 雅章

「夏どうだったよ？」

日米学生会議が終わり、日常生活に戻ると、出会う友人皆に同じ事を聞かれる。自分の答えもいつも同じだ。

「なんというか、一言ではまとめられないな」

友人をずいぶん困惑した表情にする返答なのだが、実際一言ではまとめられない。「楽しかった」、「勉強になった」と言ってももちろん嘘にはならないが、そういう言葉でこの夏に経験したことを表現するにはなんとなく違和感を覚えて、どうしてもそういう言葉を敬遠してしまう。

文化交流という枠組みでは、勿論日米の文化の差について新たに知ったこと、理解したこと、あるいは粉碎された偏見も幾つもあったし、自分が所属した安全保障の分科会では、日本とアメリカの「平和」に対する根本的な考え方を交換することが出来たと思う。それぞれで得た経

験を箇条書きにすることは極めて容易だが、それらが自分の中で、日米学生会議というひと夏の経験の中心に座すものではないことは直感が強く教えている。では自分の中で最も大きかったことは何なのか。

それはやはり、一つ一つの小さな思い出ではないかと思う。文化の違いや、安全保障への考え方というのは極論すれば他との関わりという枠組みの中では単一の側面に過ぎず、不完全とはいえ一定の結論を得た時点である意味無機的なものに変わる。対して、一つ一つの小さな思い出は、自分と他の参加者を有機的に繋いでいる。一つ一つの瞬間こそ、お互いの考え方を知り、お互いが何を大事にし、何をしたいのかを理解するための重要なものであり、その過程があったからこそ、ここで知り合った友人たちとは、将来も何かやっていけそうな、将来に向けての可能性を感じている。だから何だと言われればそれまでだが、この有機的なつながりこそが自分の世界を広げる役目を果たしたものだと思える。ただの楽しいことなら他の機会により安く、いくらでも体験することが出来るが、自分の世界観をこれだけ広げるといことは、一ヶ月、魅力的で且つ自分と違う世界を背負った人間と共同生活をする日米学生会議ならではのことだったろう。瞬間的ではない、将来に繋がる相互交流がそこにはあった。

だから、「夏どうだった？」という問いに答えにくいのだと思う。自分にとってこの夏の経験は、会議が終わった時点で完結したものではなく、その先に繋がる何かを暗示するものなのだ。友人の問いに答えるにはもしかしたら数十年かかるかも知れないが、今分かるのはこの夏はその数十年に大きな影響を与える最初の経験なのだとことだと思ふ。本会議の最後の日にみんなが言っていた、「本当の JASC は今日から始まるんだ！」という台詞、そういう可能性の世界を開いた夏だった。

井上 裕太

今でも、その光景をくつきりと思ひ浮かべることが出来る。僕たちは夜の広島を歩いていた。時折吹く夜風が焼けた肌に心地よい、静かな夜更けだった。街灯の下、整備された街路を広島城へと向かう。昼の間ジリジリと照りつけていた陽光の名残か、アスファルトが熱を持っているようだった。歩くうちに汗ばんでくる。

Alex はこう言う。「うまく説明できないけれど、この街には、特別な何かがある。Yuta も感じる？バスの中から、何かを感じていたんだ。」それ以上何も言わなかったけれど、彼は全身でその「何か」を受け止めようとしているみたいだった。

誰もいない夜の街は、僕たちの一体感を増幅させる。世界に僕たちだけが取り残されたかのように。様々な会話が僕たちの上を通り過ぎる。東京とニューヨークはどちらが大きいのか。互いの文化への憧れ。民族と言語、アイデンティティー。彼らはこの夜の礼にアメリカを訪れた際の案内役を約束してくれた。

ふと、どこかで見たことのある場所の中にいることに気づく。川と、その上に架かるクロスした橋。僕は隣で軽やかに歩いていた Charlene に告げる。「エノラ・ゲイは、この橋を照準に、原爆を投下したんだ。」彼女は立ち止まり、辺りを見回した。見開かれた大きな瞳から、涙がこぼれた。

そして彼女は口を開いた。「私は平和を愛している。原爆を落とされた人びとの苦しみを思うと、悲しくてたまらない。」僕は言う。「でも、アメリカでは原爆を肯定する人びとが多数派だと聞いているよ。戦争を終わらすためには、仕方がなかったんだって。」

「そういう人びとも確かにいる。」彼女は即座に答えた。そしてこう続けた。「でも、それがすべてじゃない。最近では、アメリカでも平和を愛する人びとが増えてきている。原爆の是非についても、意見は半々だ。」

僕は疑問をぶつける。「でも、ジョージ・W・ブッシュは戦争を続けている。そして、彼は再選した。」彼女は悲しそうに言う。「その通りだ。でも、これだけは覚えておいて欲しい。彼はアメリカの多数派を代表してはいない。絶対に。」

しばらく、皆黙って歩いた。それぞれが、今この時に感じていることを胸のうちに反芻した。お堀に架かる橋を渡ると、大本営跡があった。天皇直属の最高軍事司令機関が戦時中この場所にあったこと、それが広島に原爆が投下された理由のひとつであることを伝えた。そして階段を上がる。

息を呑んだ。夜の広島城は美しかった。かすかに街の明かりを受け、暗闇にその姿を浮かび上がらせている。戦後再建されたこの城は、以前のものよりも一回り小さい姿でここに立っているらしい。だが、絶望と混乱の中からこの

街の復興を見つめてきたこの城は、優しさと寛大さを持って、僕たちを包み込んだ。

彼らとともに過ごした 2005 年の夏を、僕は忘れられそうにない。

加藤 康広

日米学生会議

世界平和は太平洋の平和に、
太平洋の平和は日米の平和にある。
その実現のために学生も一翼を担うべきである。
1934 年創立時のこの理念と信念は、
2005 年現在においても、継続する理念と信念である。

第 57 回日米学生会議

共に創る明日 ～戦後 60 年を今日振り返る～
Exploring the Roles and Possibilities of the Japan-
America Partnership

戦後 60 年を振り返りはしなかった。
明日を共に創ることはなかった、できなかった。

人生は一度。

チャンスは一度。

今、

今この一瞬は一度。

いつかはない。

参加者 76 人が

今を生きることができたら、

参加者一人一人が

精一杯、今を生きることができたなら、

第 57 回日米学生会議、

戦後 60 年を今日振り返り、

共に明日を創れただろう。

日米学生会議が創立された 1934 年から 2005 年までの 71 年間、
世界平和は、
一度も、
訪れたことはない。

唐澤 由佳

私の部屋の本棚に並ぶ2冊の本。一冊は、留学中に友人から薦められたもので、もう一冊は、本会議中にこの本を貸したアメリカ側参加者に紹介してもらったものだ。先週読みを終えたばかりだが、頁を捲るごとに、ああ彼女とこの本について話したい、そう感じた。今振り返ると、この夏いかに自分が幸せな環境にいたかを改めて感じる。

日米学生会議の間、何かについて話したいとき常に誰かがいてくれた。

滋賀で環境問題について考えたとき、京都で伝統的な日本の美しさに触れたとき、神戸で地震の恐ろしさや残された人々の傷を知ったとき、広島で原爆ドームを前にし、平和記念公園で慰霊の気持ちと平和への願いを込めて折り鶴を捧げたとき、沖縄で地元の方々の温かさに包まれたとき、自分ひとりでは抱えきれない思いを分かち合ってくれた参加者達。「ねえどう思う？」と問いかけると、必ず何かを返してくれた参加者達。

何かについて一生懸命考えて、それを伝える相手がいる。受け止めてくれ、相手も意見を言ってくれる。国籍も、言語も、文化も、育った環境も異なるが、互いが互いを尊敬し合い、意見を share できる場所、それが日米学生会議なのではないだろうか。

80人の参加者と約一ヶ月間の共同生活を通して、学生達は、携帯電話の画面から顔を挙げ、日米の参加者と対話を重ねざるをえない。ほんの少しのミスコミュニケーションが、思わぬ誤解や大惨事を巻き起こしかねないと悟り、日常生活レベルでも、相手が分かるように説明する努力をし、相手の意見に注意深く耳を傾けるようになる。日米学生会議はそんなトレーニングの場でもあった。

今会議の「戦後60年を今日振り返る」というテーマのもと、もう一つ強く感じたことがある。

会議において、戦争体験者や被爆者の経験を直接伺うことができた。21世紀を迎え、私達は、インターネットなどを通して膨大な量の情報を得て、あらゆることを擬似体験できる時代に生きる。しかし、「知っている」ことは増えても、実感できることは少ないのではないだろうか。悲惨な経験が込められた戦争体験者や被爆者の方々の言葉は、時代や、国籍を越えて、私達の胸に突き刺さった。だが、今後、戦争体

験者の方々の高齢化により直接彼らの言葉を聞ける機会も少くなる。平和な時代に育ち、戦争を知らない私達は、次世代にどれだけ力強く、彼らの体験や平和への願いを伝えることができるだろうか。たくさん情報があるからこそ、戦争や災害の映像を見ても、次第に慣れてしまい無関心になっていないだろうか。

最後に、今会議を振り返ってみて、これまで積み重ねた経験の延長線に日米学生会議という選択肢があったことを嬉しく思う。先に述べた、友人が繋いだ2冊の本は、私にとってまさにこのことを象徴する。来年新たな一冊を本棚に並べることを楽しみにしながら、今後踏み出す一歩が、日米学生会議で得たものを反映したものであることを願う。



木原 由貴

After JASC syndrome、JASC が終わり福井に戻って3日間寝続けた。まさに JASC から現実世界に戻り時差ボケのようなものに悩まされていた。これから JASC を知るようになる人のためにも、そしてなにより自分のために、この一ヶ月間一人のジャパデリが何を吸収し吐き出してきたのかをここに記したい。参加が決まってから本会議までの三ヶ月半は、喜び・興奮・誇り・あせり・緊張・不安など複雑な感情が混在していた。その中でも東京での勉強会に参加できない、他のデリと会う機会も極端に少ない、自分の英語力、知識で会議を通して何か自分から発信できるものはあるのかという根本的な不安がやはり大きかった。そんな中で多くのことを経験するチャンスを与え、すばらしい仲間に出会わせてくれ、自信を与えてくれたのが 57th JASC である。

私にはお互いに常に励まし合い、尊重し合い、そしていろんな考えを披露し？タレントを見せつけあった？多くの仲間がいた。今までにそれほどポジティブな人間に 78 人一齐に出会ったことはない。それぞれがまったく違ったバックグラウンドを持ち、今まで様々な道を歩んできた。そして今、それぞれの夢に向かって歩んでいる。78 人すべての人生がわかったわけでも、夢を知っているわけでもないけれど、みんな輝いていた！と確信できる。みんな話を聞かされた時に自分もがんばろう！私にもできる！という勇気がわいてきた。同時に「この子がこれからやろうとしていることをできる限りサポートしたい。」「きっとこの子は何かやる、その過程を見ていたい。」と思わせてくれる友達が多くできた。これは今までの私の人生ではほとんど得られなかった感覚とっていいだろう。

JASC での数多くの経験もまた大きな宝となり、これからの私の人生の原動力となった。その中でも三点取り上げたい。一つ目はデリストアッフとしての経験である。滋賀サイトでは環境プロジェクトのデリストアッフとして春合宿以降活動した。このプロジェクトを通して自分が得たもの、それは動かなければ何も始まらないということ。そして他のメンバーと自分の役割とのバランスのとり方である。他のデリストアッフとの協調性、他のデリをいかに取り込むか、これらは 80 人という大所帯を動かす上でとても重要になってくる。これに関しては実行委員長をはじめ EC に頭があがらない。二つ目が広島、沖縄での経験である。この二つのサイトは私個人として最も多くの発見があった場であり、知識、歴史、現実、そして感情が幾重にも重なり消化不良に陥った場である。広島、沖縄といえば誰もが原爆・戦争を思い浮かべるであろう。私たちはこの地で戦後 60 年たった今、改めて、いや私たちの多くにとっては「初めて」歴史を、現実を見ることとなった。広島を訪れるのは二回目であったが、今回は三年前に一人で訪ねたときとは大きく感じるものが違った。アメデリと一緒にだったということ、広島が加害者でもあるということに改めて気づかされたこと、戦後長い年月が流れた今平和教育がとても重要であるとともに、まだまだ困難を極めているということ。これらが私の変化の大きな要因であったと思う。次の沖縄では、教科書上でしか知ることのなかった、いやそれ以上の「沖縄戦」について多くの方の話を聞き、壕に入って身をもって感じ、さらに今なお続く基地問題

を目の当たりにした。沖縄は観光地だという意識は、私の中で初日に消え去った。沖縄で見たものは悲しくつらいものばかりではない。沖縄の人の強さ、そして「いちやりばちよーでー」（一度会ったらみな兄弟）の心を強く強く感じた。広島でも沖縄でも「憎む」という言葉が聞かれなかったように思う。人々は私たちの想像を絶する経験をしてきた。しかしそこには「憎しみ」よりも「希望」が大きくそしてしっかりと根付いていた。私はこの二つのサイトを通して、人の強さ、人と人とのつながりの大切さを知り、さらに私たち若い世代が「平和」を背負っているということを痛感した。

福井からの参加者、というか地方からの参加者はほとんどいなかった。そこで自分自身が「田舎もの」であり、東京からの参加者が「都会人」というレッテルをはってしまうこともあった。22 年間福井に育ったことや、田舎をいやだと思っただけのことではない。ただネットワークを作るにも、なにかやろうとするのも小さな町では難しいということを感じていたからだ。けれど自分で作ったこのレッテルはいずれ剥がれ落ち、JASC が終わるころには少しばかりの自信がついていた。「田舎もの」として、そして一人の「木原由貴」という人間として。この JASC の一ヶ月を通して自分自身の幅を広げることができたからだと思う。そしてこれは私一人では決して成し得なかった事である。JASC を通して出会った多くの人に心からのお礼を伝えると同時に、これからここで吸収したことを還元していくことをここに誓う。

キム ビヨンス

文化的背景や育ちの環境、あるいは異なる言語を持っている異国のの人々と自分の意見や価値観を交換したり調律したりする活動は、いつも私を楽しませてくれる。生き方や考え方が違う人との話し合いは、今まで自分が経験したことのない世界を味わう魅力を抱いているからだ。しかし、このような過程が思ったとおりに順調に進む場合は非常に少ない。なぜならば、たやすく譲ることのできない思考の臨界点で、今まで自分がこだわってきた固有の考え方や世界観を自ら否定しなければならぬ状況に必然的にぶつかるからである。逆説的に私はこのような自己否定のところでカタルシスを感じながら楽しむ人である。これだけの簡単な叙述

でも、JASCの本会議が私にとって帯びている意味を察することができるだろう。

しかし、JASCの期間中に味わった楽しさはこれだけで止まらない。苦手な日本語と英語で作れ出すおかしな話し方に、いつも耳を傾けてまじめに受け取ってくれた日米の友達の瞳は、私を感動させるに十分だった。一ヶ月という決して短くない時間の中で、韓国人という曖昧な立場からありうる不便さや疎外感などを一回も感じられなかったのも、日米のメンバーならではの深い包容力があったからだと思う。感謝する。広島での平和教育や沖縄で講演を聴いて、それに関しての感想が感情的な民族主義に引っ張られることなく、自分の中でひたすら世界平和というコードにつなげたことも、多様な意見と価値を尊重するJASCerの成熟さに囲まれていたから可能だった。特に僕らは、論争が激しく起こるラウンド・テーブルのディスカッションからクーラーで部屋の温度を設定する一般生活の場まで、物事をみる両国の食い違いで何回も葛藤したことを覚えている。それにもかかわらず、結局そういう差をユーモアとウィットで乗り越えたメンバー一人一人の柔軟な態度は注目に値する。この会議を100パーセント楽しもうという最初の決意と違って、本会議のうち気分がさっぱり晴れなかった原因は、英会話力を初めいろんな面で実力が足りない自分の弱さと鮮明に出会ってからであった。しかし、与えられた課題をやりぬくために熱心に協力しているみんなの姿がお互いに無言の力になってくれたので、また新しく勇気が湧いてきたことも今ここで告白する。

一応本会議は終わってしまった。しかし、僕らにはこれから一緒に成長していく友達がいる。また、これから国際社会にいろんな形で活躍し貢献していく友達と自分の未来をスケッチしてみるもう一つの楽しさも持っているはずだ。そして、それらを実現するためには多くの努力が求められるという事実も参加者みんながしみじみ感じているだろう。蒸し暑かった2005年の真夏、日本列島で結ばれた日米の絆が、これから参加者各自の心の中で大事な芽を吹かせてゆくことを願ってやまない。最後に、一生記憶に残るようなよいプログラムを企画してくれたECに、そしてそのキャンパスのうえに素敵な絵を描いてくれた57回のみなさんに、心から感謝する。

国松 永喜

私「だからやらないって言ってるだろ。何回言えばわかるんだよ。」

デリA「なんでやらないの？」

私「なんでやらなくちゃならないんだよ？やる理由があったら迷わずやるけど、やる理由が特に見つからない。」

これは58th、つまり来年のJASCの実行委員を決める選挙の、立候補者締め切り10分前の会話である。

思い返せばこの一ヶ月間、思うように英語で自分の意思が伝えられない苛立ちと、たったそれくらいの事で深く落ち込んでいる自分に対する情けなさで毎日逃げ出したかった。言葉の問題に加え、全く異なる価値観を持つ人達との対話の中で、自分の強く信じていたものが大きく揺さぶられ、日に日に私は言葉を失っていった。

会議も終盤に近づくに従って、必然的にデリの間では密かに次期実行委員には誰がふさわしいのかについて、そしてこのJASCで一体何が得られたのかについて、毎晩のように語られ始めた。

私は、話がそのような方向に向かうと意識的にその場から離れようとしていた。何故なら、一刻も早く会議が終わる事を願っていた私が、来年も参加する、いやむしろ積極的に作り上げていかなければならない立場である実行委員に立候補する可能性など全く無かったし、この会議で得られた物など何一つ無いと自分自身の中で勝手に決め付け、JASCの存在意義すらに懐疑的であった私は、次期実行委員に誰が選ばれようと全く無関心であった。

そんな私の頑なな心を動かした数人の友人達がいた。

三谷 (みっちゃん)

「エイキ(私)は実行委員に必要な存在だ。全員が突っ走るばかりでは組織は成り立たない。バランスサーとして無くてはならない存在だ。」

波多野 (はたこ)・島村 (ジュゴン)

「エイキと一緒に働きたい、一緒に58th JASCを作りたい。」

山田 (フィリップ)

「お前とじゃなきゃ俺はやりたくない。お前とやりたい。」

幼い頃から、リーダーとしての役割を担うことで、集団の中に自分の存在意義を見出してき

た私にとって、今回の JASC において自分が果たした役割は、自分にとっても周りにとっても決して満足のいく内容ではなかったはずだ。その事こそ私が深く落ち込んでいた理由の一つであったのにも関わらず、こうして共に過ごした一ヶ月間の中で、私の新しい一面を発見し、居場所をくれ、暖かく迎えてくれた仲間達があった。

実は、私はこのように言ってくれる仲間を待っていたのかもしれない。

こういう言い方をすると、私は非常に受身な人間であるように聞こえるかもしれないが、これから更に一年間、一緒に JASC を作りあげていく仲間に妥協はしたくなかった。他の誰でもいい誰かの代わりはしたくなかった。

JASC も終わり数日が経ち、今改めて振り返る。自分が何を得られたのかについて。

知識？ 英語力？ 思い出？ いや、それよりももっと深い部分、言葉にするのは難しいが、確かに自分は変わった。どうしようもない苛立ちの中で見えにくくなっていたが、価値観の異なる人たちと集団生活をする中で、許す事、与える事、そして思いを形にするために声をあげ、動くことの大切さを学んだ。

しかし何よりもこの一ヶ月間、自分でも気がつかなかった自分を発見してくれ、そして立候補締め切り 10 秒前に私を感動させ、奮い立たせてくれたみんなこそが私にとっての一番の宝物だ。

最後に選挙のスピーチで言った言葉、偽りの無い、心の底から自然に出てきた言葉をもう一度みんなに言いたい。

「I don't want to say good bye now, I want to meet you again！」

だから私は JASC にもう一年残る。みんなとつながっていられるように。

佐藤 愛

「まじめに修学旅行」

今回の Jasc をひとことで言い表すと？ともし聞かれたなら、私は迷わずこう答える。まじめに遊んで大いに悩み考えた1ヶ月。学生としての醍醐味がまさに凝縮されていた気がする。

初めて JASCers と出会ったのだが、5月の初めに催された2泊3日の春合宿だった。正直なところ、最初は逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

あまりにも足りない知識量、経験、周りの個性に圧倒され、日本語ですらまともに発言できていないのに、それを英語で1ヶ月となるとやっけていく自信はなかった。私が唯一持っていると思われたのは高校時代をメキシコで過ごしたという経験くらいで、しかしそれと同じように海外で生活をしてきたような子が多い Jasc では、何の特別な意味をもつものではなかった。Jasc 中での自分の役割、貢献できるものを持たないうえ、むしろ会議の足をひっぱる傾向にある自分に対し否定的な気持ちでいっぱいだった。正直なところ会議中も何も持たない自分、空虚な自分に自信がなくなり、つぶれそうになったときもあったが、周りの人の助けや、自分自身変わりたいと強く願ったことで、こうなったらいちから勉強させてもらおうとある意味開き直りというか謙虚な気持ちになることができた。そして、自分の考えられたことを口にする勇気を少し持つこと、それが今始めて私のできる貢献だと思いそれが当面の私の課題となった。本会議中やはり言葉の壁は大きかった。なかなか言いたいこともうまく伝わらない状況の中、すれ違いも多く何度もコミュニケーションの壁にぶつかったが、自分をさらけだし素直になる勇気をもつこと、そして相手の言葉を通して想いを理解しようと努めることでそれをだいたい乗り越えられた気がする。そして人は思いがけないほどあっさりとなんな私を受け入れてくれた。ここでふと私が気づいたのは、今まで受け入れられていないと思っていたのは、ことばの壁があるのも事実だがそれ以上に自分からこころに壁を造ってきたからであり、けっして言葉のせい、ひとのせいではなかったということだ。

会議は私にとってあるいみ精神修行の場みたいだった。本当に日々鍛えられた。弱い自分をさらけ出し、ぶつかって、泣いて、笑って、わらって、一年分の感情を出しきった感がある。でも、そうでもしないとあのつわものたちには通用しないのである。それに気がついたときから、私はより話すその人から湧き上がってくるこえとか想いの温度とかで話をするようになった。もちろん、話す中身にも気を配るがそれと同時にそれをその人がどんな風に心でとらえ、言葉という型に流し込んでいるのかを気にかけるようになった。すると、いろんな声が聞こえてきた。揺らぎない自信に満ち溢れた声、自分を弁護する声、相手を非難する声、励ます

声、慈しむ声、そのひとつひとつがその人自身であり、尊い言葉の欠片たちだった。その声に気がついたときから私の日米学生会議は今までの数倍たのしくなった。こんな魅力的な人の集まりにいることのできる自分をこころから幸せに思った。だから、どんなことをしたって楽しいのである。かといって、枕投げをすることだけがけって楽しいわけではない。その楽しみはやはり人との会話にあったような気がする。一緒にただ歩きながら話をするのも楽しければ、まじめに議論するのもいい。グラス片手に語り合えばその楽しさはまた格別だ。

自分を見つめなおすことで私は今回、人のことを少しだけ考えられるようになった気がする。人の声を聴く。この大事なことに気がつかせてくれた全ての友人たちに感謝したい。そして、今回この私にはもったいないほどの経験ができたのも EC をはじめ、数え切れない人々のおかげであり、いつか自分が貢献できる立場になったときに今度は社会に向けて何か恩返しできればと思った。

私の日米学生会議はまだ始まったばかりである。

佐藤 広大

一ヶ月にわたった日米学生会議が終わってしばらく経った。本当は会議が終わってすぐに感想文を書こうとしたのだが、すぐさま全てを思い返して文章にすることはなかなか難しい。会議序盤は思ったことをノートに書きとめていたが、頭で考えるよりも肌で感じたほうが深く残ると思い、途中からそれをやめてしまったからである。

自分の参加動機から振り返りたい。57回を選んだ理由でもあるが、日本国内をもっと知りたいということが大きかった。特に沖縄を見てまわれたのは非常によかった。海外にばかり目を向けて身近な問題をおろそかにするのは恥ずかしいことかもしれない。誰だって大きな舞台で活躍したいと願うものだが、自分で決めた一定のフィールドでがんばるのも悪くないだろう。他には、アメリカの学生も含めて、様々な議論をする中で受けた刺激を持ち帰り今後の糧としたい、という漠然とした思いもあった。実際、普段違う場所で暮らす人々と有意義な話ができ、さらに、議論を超えたところで個と

個の前向きなぶつかり合いが多くあったことも付け加えたい。集団というものについて多く考えさせられた。こういったパワーを社会にぶつけていければよい結果が待っているのではないだろうか。



ザン リンダ

Upon first arriving at JASC, skeptical, idealistic, and passionate students alike see it as merely a short, one-month summer program that, though has the potential to influence their views on US-Japan relations, is nevertheless only one of the many experiences throughout their lives. However, only a rare few ever leave JASC having not come into contact with inspiring peers, undergone memorable lectures, or left with a very much altered and fine-tuned sense of life and purpose. This year's 57th JASC was no different.

As the only American representative on the Japanese Executive Committee, I have found myself in countless number of instances where due to language barriers, cultural misunderstandings, or differences in philosophies, I held views and ideas directly conflicting with those of others. In the ways that I have come to work through these differences and learned as a result of them, it is my belief that similarly, all of the American delegates have learned from any arguments or disagreements they may have had with the Japadeles this summer. Essentially, JASC is not a happy free-floating world of quixotic concepts, but grounded in the practical yet actionable real world. It is for this reason that there have been conflicts this summer. But it is also for this reason that these conflicts have been some of the most important events to have taken

place this past summer.

There is an American saying that cautions, "You cannot begin to understand another person (and thus should not judge them) until you have walked a mile in their shoes." As someone who saw the entire planning and execution of an event where 80 American and Japanese students, as well as 9 Chinese students, traded shoes to traverse down what often became difficult and obstacle-ridden paths, I am most grateful for the energy, enthusiasm, and openness of each and every one of our participants. It is indeed heartening to see that as much time and effort the Executive Committee members have put into planning this event, the final and most important concluding steps were taken and can only be taken by the participants themselves. Thus, in each tear, each belt of laughter, each sparkling smile I saw rays of hope and promise for the future. Lectures, field-trips, and conferences remain only events unless its participants give them meaning. The eagerness with which JASCers processed the large flood of information given to them, and extracted from it jewels of knowledge and understanding, is what gives JASC its power. It is then the passing of this opportunity and the continuation of this energy from one JASC to another that gives this conference its unique life-force.

In conclusion, while I have certainly gained personal convictions and a renewed sense of purpose from this past summer's JASC, I am more grateful for the comprehensive impact this JASC has had on 80 other students this year and many more in the years to come. Thank you for a wonderfully successful JASC.

重原 由佳

今までの20年間は、流れに身をまかせていれば自然に素晴らしい人たちがいる場所に連れて行ってくれた気がする。田舎でなんとなく生きてきた私が、JASCに出会い、JASCを通して素晴らしい人たちと合うことができたのは、私の実力の結果ではなく、すごく運がよかったとしか言いようがない。

そういう意味において、JASCは、私の今までの20年間のクライマックスだったような気がする。JASCという歴史も知名度もある舞台で、

実力・知識・経験・・・何もない私は、ただ立ち尽くすのみで何もできなかった。自分の至らない点や足りない点が一斉に浮き彫りになって、それらを隠す術もなく過ぎていった1ヶ月だった。

だからこそ同時に、JASCは、私のこれからの20年間（もしかしたらそれ以上）の「布石」だと思う。JASCを通して、自分に何が足りないかが痛いほどはっきりわかったおかげで、今から何をしなければいけないのか、何を学ばなければいけないのかがわかった。もちろん私が今からすべきことというのは、達成するのも、達成したかどうかの判断基準を設けるのも容易ではない。けれど、今やるか、やらないか、やれるか、やれないかで、私の20年後は全く違ったものになると思う。

21歳で、JASCを通してこれに気づけた私は、やっぱりかなり運がいいかもしれない。20年後、40年後・・・「今の私があるのはJASCのおかげ」と胸をはっていえるように、努力しなければと思う。それが、JASC中足を引っ張り続けた私を見限らず助けてくれた人への最大の恩返しだと思う。

2005年8月、21歳の夏。

ここからが、私の人生の第二幕“POST JASC”です。

篠原 舞

今年の2月、手にした第57回日米学生会議のパンフレット上に大きく掲げられていた「共に創る明日～戦後60年を今日振り返る～」というテーマを見た瞬間、この会議に参加したいと強く感じたことを覚えている。私はその時高校3年生であり、4月から東京女子大学の社会学科への進学が決まっていた。書類（自己PRや参加希望理由等）を書き始める上でも、自分の今の位置や立場、そしてそこから自分には何ができるのか、何を得たいのかを考えた。未知の領域（大学生活や一人暮らし）に入る前の漠然とした不安感や、自分の立場（大学1年）に対しても心配が拭いきれなかった。結局のところ、不安や心配も現実のものとなり、問題に直面することになったが、この夏JASCに踏み込んで行って本当に良かったと思う。

私は第57回JASC参加者の一人になった後も、自分の役割は、何を求められて選ばれたの

か、などと春合宿から本会議中にかけてずっと模索していた。大学に入り、色々なものの考え方を学び始め、それにも納得し、そうしていくうちに何が正しくて何が間違っているのかが分からなくなっていた。感情で生きてきた私に、感情を殺した理論的な思考、発言が求められ、批判的な視点を持つことも教わった。そして、私もそれに応えようとしていたし、しなければだめなのだと思っていた。この JASC では、自分を力不足な、小さい者としか思えなかった。だから、私は学ぶ側に徹しよう、色んなものを吸収しようと考えた。私の JASC はそうやって終わっていくのかな、と思っていた。しかし、ある出来事がきっかけで自分の中の考えが大きく変わることになる。むしろ、今考えてみれば、自然体でいることが好きな私が、このまま JASC を終わっていたほうがおかしかったかも、と思う。きっかけは広島サイトでのこと。

広島は私の故郷で、広島で生まれ、広島で育ってきた。ボランティアで平和活動をしている父親のもとで育ち、学校では重要課程として平和教育を受けていて、私は「平和」についてさまざまな経験を通して、その都度深く考えてきた。それが大いに影響したのかもしれない。広島では、とにかく毎日がとてもいい気分で、蒸し暑かった。街は被爆 60 年に向けて日夜さまざまな場所で会合が開かれ、平和公園には多くの平和を祈りに来た人々が訪れていた。私はその時に異常なほど広島に帰ってきたことが嬉しくて、皆にたくさん広島の良い所を紹介したかった。「広島人」という意識が強く私の中に生まれていた。

変化が起こったのは、広島会議で「はだしのゲン」の作者である中沢啓二先生の話聞いた時。私はこの漫画を読まずに、若者がヒロシマを語ることは邪道だと思うくらい、自分自身この作品がとても好きで、作者に会うことをとても楽しみにしていた。「はだしのゲン」を小学生の頃から読んでいて、この激しくも悲しい、しかし希望を忘れない漫画を描いた作者は、漫画の中のゲンのように明るく元気で、強い姿勢で平和をアピールするようなアクティブな人かなと想像していた。ところが、私の目の前に現れた先生は、謙虚で、腰が低く、物静かな人だった。このような人が、あんなにも力強く激しい漫画を描くのか。先生の話、様子、質疑応答を通して、私は広島に住んでいた多くの人々の上に原子爆弾が落とされ、あのような感情をこの人に植え付けてしまった運命に、怒りにも

似た強い感情が湧き上がってきた。生き残った先生のその後の人生を思い、なんと悲しく、忘れられないつらい思いを抱え込ませているのか思うと胸が苦しくなった。感情を押さえ込む生活をしていたぶんの、反動が今返って来た、というように、激しい動悸を覚え、涙が出てくるのを必死にこらえていた。被爆体験者の方の辛い話を聞くのは初めてではなかったのに、どうしたのか、午前中、平和記念資料館を見学し、在日韓国人の李家想さんの熱く強い訴えも聞いたから、疲れているのかなと思っていた。

そうして出てきたこの感情は、広島サイトに続き、沖縄サイトでも大きく現れることになった。被爆者の人の話、被災者の人の話、聞くたびにその人の感情がストレートに自分の中に入ってきて、同調するかのようによく共鳴していた。その場面の想像がとてもはっきりとイメージされ、不思議な感覚だった。抑えることができず、痛いほどの思いが突き刺さってきた。戦場で亡くなった人ももちろんのことだが、そこから生き残った人々の苦悩も思い、その人たちが、今どんな思いで私たちの前に立ち、泣いているのか、何を乗り越え、まだ何を抱え込んでいるのか。それら全てを受け止めてあげたい、と思った。そうすると、もう JASC にいる現実すらきつくなり、辛くなった。JASC 参加者たちの多くが、広島や沖縄で学ぶことには真新しいことが多く、新鮮であったかもしれない。沖縄にも、私は 4 回訪れており、JASC を含め 3 回は平和学習で来ていた。彼らにとって原爆や沖縄の基地問題を消化し、次の段階に至るには時間が必要だと私は知っていたし、それを十何年間学んできた私とは意見も見方も違うと理解していた。私は受身の側の立場から物事を見てきて育ってきたからだ。彼らとは意見が違う、理想論は拒否される、それに憤りを感じるようになり、自分は子供だけなのか、と卑屈にもなっていた。なんでアメリカを憎まず、戦争を憎み、原爆を憎むのか。60 年前の熾烈な殺し合いをした国同士の若者たちが今、経った 60 年で、1 ヶ月共に旅行することを喜び、毎日をとて楽しそうに過ごし、互いに学び合い、討論している。JASC というその空間に違和感を覚え、どうして、アメリカにもっと敵意を感じても許されるのに、と思ったのだ。でも、それをヒロシマの人々、沖縄の人々は、望まない。許し受け入れている。国を憎み、その国民たちを恨んでいては何も解決しはしないと分かっているからなのだと思う。日本人であるという自覚と、自分という一

人の人間との葛藤だった。気づけば参加者たちと深い話をすることを避け、毎日の予定を黙々と過ごす日々を送っていた。今思えばとてももったいなかったと思う。どんなときでも、自分を否定しない仲間たちなのだと分かっていたら、夜更けまで色んな話をしていたかもしれないし、もう少し有意義な時間を送っていたと思う。自分の思いも理解してもらえたかもしれない。でも、一步外側から JASC を眺める位置に居ることが（ラッキーなことに私は記録係で常にビデオを撮っていたので、不自然ではなかった）、その時にできた自分の精一杯 JASC をうまく過ごす対処だったから。私の中でも、この感情に收拾がつかず、どう片付けていいか困っていた。皆としゃべって、感情的になるのも怖かったから。そして何より、人は右翼とか左翼とかで簡単に思想を区切ってしまうけれど、私には譲れない大事な平和に対する思いがあったからこそ、それを否定されたくなかったからだ。

しかし、こんな思いを救ってくれたのもまた JASC だった。沖縄サイトの日程も後半にさしかかったバスの中、私は二人の女の人に助けられた。ひとりとは一緒に涙を流し、それでいいんだよ、と言ってくれた。ひとは私の状況を見て、それから逃げちゃいけないよ、その先に探してたものがあるんだからね、と教えてくれた。自分の考えを曲げなくてもいい、そういう考えを持つ人は必要だと。嬉しかった。

これがきっかけで、私は自分の考えをきちんと出せるようになった。「安全保障と平和構築」の分科会でも、私は戦争を生き延びた人々の思いに耳を傾けてきたからこそ、その人たちを無視し感情を捨てることをしない。現実の状況も理解しているが、日本の戦争放棄条項はこのままずっと維持するべきだ、と言えた。皆の笑顔も素直に受け入れ、私も楽しめるようになった。

JASC では本当に色んなことがあったし、起こった。とっても楽しかったし、悲しかった。こんなに1ヶ月前の自分と変わったのかと思うと嬉しくなる。終わってみれば 80 人の仲間と出会い、著名人の人たちともお話をする機会を得て、自分の人生にまた重みがでたと感じる。1ヶ月で 100 人近くの人たちと出会えたこと、これが何よりも自分も大きくしてくれたと思う。JASC が終わってまだ 1 ヶ月、これから先 JASC に参加して良かったと思う事が増えていくと思うとわくわくする。思わぬ出会いもしていくはず。

第 57 回実行委員には全てにおいて感謝して

いる。また、日米学生会議を支えて下さっている多くの方々にもお礼を言いたい。

ありがとうございました。

島村 明子

この一ヶ月間は何だったのか？会議が終わった今、自問自答してみるけど一ヶ月前よりも答えられない質問が増えていることに気づく。

日本人とは？

私は「日本人」なのに日本を知らない。「帰国子女」だけれども、日本には「帰って」いない。8月15日も平和のイシに刻まれた名前の重さも知らない。なぜ私が戦後を見つめなければいけないのか。なぜ私は広島と沖縄と向き合わなければいけないのか。なぜ、なぜ、なぜ？私にはわからなかった。だから答えを欲して探した。ある意味答えを欲することを強制されたけれども私にはわからなかった。

答えなんてあるのか？

広島の小学校の、被爆の跡が残る木を見ながら、普天間の海を見ながら、答えを模索していた。

青空の下の原爆ドームを前にして、アメリカ人夫婦が “We American apologize” という布を掲げているのを見て安堵した。ワタシにはやっぱり日本へのナショナリスティックな感情が中で渦巻いていることを再認識して、何も言えなくなった。中国人学生と靖国に関して話してその印象は強まるばかり。けど私は帰国するまで 8 月 15 日や靖国や原爆の意味を知らなかったし、原爆が正当化できないものなのか、政治的には正当化されるものなのか？皆それぞれの意見を持っていて、自分の意見がわからなくなった。不安定で不確定な存在としての自分が浮かび上がった

平和記念資料館を回って、展示が目には焼きついた。広島会議で中沢啓治氏の話聞いて 結局。その「場」は中沢さんが自身の被爆体験を話すことで成立しているのだと気づいて 結局。

通訳を介してもその発話は
伝えきれないような気がした。

焼き爛れた皮膚に、噴出す赤
突き刺さる砕けたガラスに、

音にならない悲鳴

沖縄の壕で感じた暗闇に滴り落ちる水
湧き出す蛆に 理由もなく自分はぞっとした。

漢字で表象される「広島」を超えた「ヒロシマ」の意義を、垣間見た気がした。理論を越えた想いや意見というのに、少しだけ触れられた？

体験談を聞くことで 写真を見ることで 耳と目とキオクに焼き付くものがある。これが戦争を知るってことなのか。そもそも「知る」とはどういうことなのか。そもそも・・・過去を我々が認識することができるのか。私たちは、何をすべきで、何ができるのか。なぜ会議に参加するのか？北海道と米国と豪州で育った

私は、私は誰？

「明日」はどうやって

共に創っていくの？

たくさんの問かけの中で、今まで自分が持っていた社会通念や考えを、突き崩して、視野を広めることができた気がした一ヶ月だった。

杉田 道子

「本会議が終わったら、それまでの努力が実った達成感と満足感で、うれし泣きでもしちゃうんじゃないかしら。」こんな私のしたたかな期待を裏切り、会議後の私を襲ったのは虚無感と疲れ、そしてぼーっとしてしまうといった変な感覚であった。そして、会議後、一ヶ月経った今になってやっと、期待はずれのこの感覚こそが「燃え尽きた」証拠であったことを確信した。一年間わき目も振らずに全速力で走り抜けてきた日米学生会議の実行委員生活に、ようやく納得のいく終止符が打てそうである。

日米学生会議での体験はあまりにも衝撃的で、現段階で一般化して活字にすることに多少抵抗を感じる。ひとつひとつの出会いや仲間と共に乗り越えた経験は、今でも反芻するごとに新たな示唆を与えてくれるものである。特に実行委員としての一年間は、会議の企画や運営のために議論を重ね、今までで経験したことがないほど自分の人間性や価値観を仲間とむき出しにし合ったことが、私の中で強烈な経験の塊のように残っていて、これを解凍しながら学んでいく作業には、まだまだ時間をかけていきたいからである。

しかし、何よりも最大の収穫は、自らの弱さに直面し、それを必死で乗り越えるために行動したという達成感とそれからくる自信であろう。日米学生会議で嫌というほど痛感した mission の弱さ、学生の未熟さ、結果の見えにく

さ。この一年間、問題意識を次々と実行に移していかななくてはならないというプレッシャーのもとで、このように自身を知れば知るほど、行動することが怖くなるが多々あった。学生という立場は、何事にもある程度足を突っ込んでも逃げられるという特権がある上、学業では批判的な考察を求められるが、「ではそのために自分には何が出来るか」、というレベルまでは問われることは滅多に無い。しかし、日米学生会議に参加して、また運営する立場になって、それでは満足がいかなかった。そして、「被爆地ヒロシマのメッセージが世界に届かない」という問題に対して、「昔の話だ」と目をつぶったり、中国での反日デモをニュースで見て、「日中の溝はこういう理由で深まっている」ともっともらしい分析をするにとどまるのではなく、「では日米学生会議としてはどのように問題に取り組むか」というレベルまで考えたと暗中模索した。しかし、そのようなプレッシャーを受けていながらも、講演会の企画、財務・広報・選考の計画、本会議のアイディアは浮かんで消え、浮かんで消え、最終的なアイディアは優れたものばかりではなかった。だが、「こんなことしか出来ないのか」という失望感をどこかで抱えながらも、「何かやってやりたい、とにかくやってみなければ」という強い意志のもとで、とにかく前進することだけを考えた。

このような葛藤の結果、いくらか手ごたえを感じつつも、会議のすべてが成功であったとは言いがたい。それでも実行に移してよかったと感じたのは、作ったフレームの中で参加者が起こしてくれた想定外の化学反応が起こった瞬間と、参加者、そして実行委員の皮がたまねぎのように一皮も二皮も剥けていく過程を目の当たりにしたときだ。広島サイトで原爆と向き合っている米国側参加者との会話、自由討議において私が考えもつかなかった問題意識をシェアしてくれた参加者、はっとさせられるような人間性を持ちあわせた参加者達の活躍や思いやり、中国からの参加者がもたらしてくれた思わぬ発見など、ここには書ききれないほどの化学反応が起こった。そして、価値観をすり合わせる毎日を通じて、参加者の一人ひとりが相互理解、そして自己発見をしていく様子を見ることは、私にとって他の何事にもかえがたい報酬であった。そして期待通りにいかなかった企画の数々も、その種をもとに参加者の力で予定外の色の花が咲いたことによって、何ら

かの意味を持つものだったということを実感した。

これらの日米学生会議を通じて、感じたことは山ほどある。しかし中でも、今後一生の糧になっていくであろうという実感が一つある。それは、

“Light the candle before you complain the darkness”

という以前から好きだった言葉に集約される。文句を言うのは誰にでもできることであるし、批判をするのは簡単だ。実社会を見ても、どれほどこれが多いことだろうか。今後、灯したくても灯せない蠟燭はあるかもしれないが、灯そうとする努力が恐ろしいほど楽しいことであることを実感できた幸せを、必ずや忘れないでおきたい。

そして、最後になりましたが、このような行動することの幸福感を与えてくださいました IEC の皆様、後援団体/賛助団体の皆様、その他多くのご協力くださった方々、そして、一年間を共にした実行委員と、熱い熱い夏を創り上げた仲間である参加者に、心から感謝したいと思う。せっかくのご縁ですから…これからも共に明日を創り上げていくことが出来ますように。

張 文涵

私にとって J A S C は何なのか、J A S C にとって私は何なのか……。本会議期間中は、前者ではなく後者についていつも考えていました。自分は J A S C 参加者の中でどんな役割を果たし、どう貢献できるのか。考えるたびに自信がなくなっていきました。あまり貢献できていなかった自分を見て、他の人から過小評価されたくない焦り、逆に、今まで自分は自分を過大評価していたのかと悩む、ずっとその繰り返しだった気がします。まさしく、“自分を見失っていた” のでしょう。それとも、“自分を見失った” のに気付かされたというべきでしょうか。または、本腰を入れて探し始めたのかもしれません。いずれにしろ、J A S C は私の今までの大学生活を象徴するようなものであり、自分を見つめ直す絶好の機会でもあり、自分の今の状況を正確に示してくれました。この一ヶ月間で特に気付いたことをいくつか書きたいと思います。

まず誰もが最初に思い浮かべるであろう、厚

くて高い、英語という名の壁ですが、私の場合、それにより更に厚い殻が自分の心にできてしまったのが、最初の挫折と言えるのかもしれませんが。他の日本側参加者のように、初めから持てる力を総動員してぶつかっていけばよかったのですが、その正面衝突で砕けてしまうのが怖くて、迂回ばかりしていました。傷つかないように避けて通ることを覚えたほど器用に、そして大人になっているのが、今思えば少し寂しいです。自分ができることしかしらないなんて、いかにも「よくない大人像」のようで。しかし、この殻は、最後にはなんとかヒビが入ることとなりました。それはもちろん、みんなの友情のおかげですが、何より、「勇気」を思い出させてくれたことにあります。“勇気”がなければ、何もできない、友達さえも。「勇気」を出せば、たとえ失敗したとしても気持ちがいい。大切なのは自分が後悔しない・納得することなのです。あの時、勇気を出して本当によかった、と今でも思える場面がいくつかあります。

もう一つは、私が第 57 回 J A S C に是非とも参加したいと思った重要な要因の一つでもある、広島・沖縄サイトでの出来事です。連日、平和記念式典や原爆ドーム・ひめゆりの塔など、平和について企画に追われ、だんだんに自分の感情が鈍っていくのに気付いていました。確かに、戦争の悲惨さや平和を享受していることの有り難さは痛いほど伝わってきましたが、それだけで終わってしまうという、一種の物足りなさを感じました。私にとって、戦争は、過去であり遠い国のことであり、非現実または物語に過ぎないのです。しかし、多くのアメリカ側参加者は全く違っていました。原爆資料館でも原爆ドームでも沖縄の平和記念館でも、そしてそこに住む人々との何気ない接触にも、心からの涙を惜しみなく流していたのです。そして、何人かの日本側参加者も戦争への素直な感情や、それが風化している今の社会に対する憤りを、涙や議論という形で示していました。それなのに、自分はいっこうに強い印象・感情を持ってないでいる、なぜなのだろうという焦りを感じたこともありました。自分が当事者ではないから、つまり日本人でもアメリカ人でもないのに、沖縄や広島には直接的に感情移入できないでいたのかもしれませんが。更に言えば、自分は幼い頃からずっと「外国人」であるという重いものを背負ってきて、愛国心や国籍に対するアイデンティティが欠落し、戦争を主観的にとらえられ

津端 幸江

ないいでいるのでしょう。これが良いか悪いのかは定かではないし、判断する必要もあまりないのですが、ただ一つ言えるのは、私が無意識に強い欠乏感を持っているということです。しかし、JASC ではまた、こういう人にたくさん会うこともできました。アメリカ人とは言え、本当に民族や背景が様々だったり、自分と似た境遇の日本側参加者もいたり。そうした人々と話してみると、自分が、いかに「国籍」にこだわらないかと同時に、いかに「国籍」を強く意識しているかに気がつきました。多くの方はアイデンティティの一部を国籍に委ねていますが、私のような人は、このような大きな流れの中で、いかにして自分らしさを保てばいいのでしょうか—ある人のように母国の誇りを忘れないでいるか、他の人のように今住む国に完全に適応しようとするか、それとも国際人としてアウトサイダーに徹するか—いずれにしろ、この経験を通して感じたのは、自分はどこへ行っても自分は自分でありたいということです。誰のまねをするのでもなく、何かに流されるのでもなく。

このように、JASC での1ヶ月は、私の日本観・アメリカ観・世界観・人生観を変えつつも、根底にある自分の一貫した何かを見つけるヒントをくれたという、二つの相反する効果をもたらしました。しかし、こうした効果より何より、一番ためになりかつ嬉しかったのは、一度に80人もの大好きな友達ができただけです。本当に、彼らから受けた刺激は計り知れません。使い古された表現ですが、彼らがいたからこんなにも楽しめたのだと思います。効果や感情は一時のものかもしれませんが、この出会いは是非とも一生ものにしていきたいです。



4月のある日、下宿に一通の速達が舞い込んだ。「日米学生会議に合格しました」とあった。私はJASCの選抜試験にてっきり落ちたと思いついていました。なぜなら、英語のディスカッションもうまくできなかったし試験官に自分の考えをうまく言えませんでした。ただ、「とりあえず言いたいことは言えたとし、落ちたらしょうがないな〜」とっていました。

そもそも、私はJASC参加者には珍しく、アメリカがあまり好きではありませんでした。特に国際社会におけるアメリカの振る舞いに嫌悪感を持っていました。ただ、現実として日本はアメリカに頼っているので、ジレンマを感じていました。そんな中であるとき、ふと「アメリカって実際はどんな国なんやろ?」と思いました。私は、アメリカのことをTVや新聞で見聞きしただけで、偏見で語っていたのでした。私は、反省し、アメリカをもっと知りたいなと思い、アメリカ人と交流できる場をさがしていました。そしてJASCにたどり着きました。

JASCが始まってみると、私はなぜここにいるのだろうかと思ひました。皆のレベルが高く劣等感にさいなまれました。それは結構しんどかったのですが、ただ、それも始めのうちだけで、時間が経てくると、自分の役割もしっかり理解し、周りとの溶け込むことができました。そして、次第にアメリカに対して親近感を持つようになりました。

今回の1ヶ月で様々なことを学びましたが、特に印象深いのは、滋賀、広島、沖縄サイトにおいてでした。滋賀サイトでは、今まであまり考えることのなかった「環境」について深く考えることができ、非常に興味を持つようになりました。JASCが始まる前には、自分で考えるところのエコ生活をひそかに実践したりしました。例えば、ごみの分別から始まり、電気節電のための早寝早起き、原付を自転車に乗り換えてみたり・・・結構辛かったです。広島サイトでは、原爆を中心とした平和について学びました。実は去年の夏にも、個人的に、戦争を考えるために広島や長崎に行ったのですが、この時とはまた違った視点から戦争を考えることができました。例えば、日本は戦争の被害者であると同時に、加害者であることを強く感じま

した。沖縄サイトでは、米軍基地問題や未だに残る戦争の爪痕を実感しました。また、東京サイトでは中国の参加者と戦争のことなどについて話し合うことで、違いを認識し、今後我々が取るべき道を真剣に考えるようになりました。全体を通して戦争がメインテーマのようなどころがありました。それぞれのサイトで皆と、意見交換する友がいて、ありがたかったです。また、今回の会議でOB・OGとの強い結束とあたたかいまなざしに、感謝せずにはいられませんでした。

この会議はたくさんのお力添えをいただいたからこそできたのであって、我々学生だけで成し遂げたのではないと思います。このことを忘れないで、どうすれば、このJASCでの経験を役立てることができるのかをもう一度、考えて行きたいと思います。本当にありがとうございました。

出浦 寛子

7月27日、午後7時。大阪の伊丹空港の中の小さなレストランで、私はリンダと、グラタンを食べていた。あまり食欲がない。食事中、何度も到着ロビーに目をやる。もう二十分もすれば、大きなアメリカ人たちがこの小さな空港に到着するのだ。一体どんな人達なのだろう。皆バスにちゃんと乗れるだろうか。立命館大学に無事行けるだろうか。そして二十分後、その時が来た。巨大なスーツケースやリュックサックをひとり二、三個持ったアメリカ人40人近くが、ぞろぞろと到着ロビーに集まる。長いフライトのせい、皆疲れている。7人のアメリカ側実行委員達と一年ぶりのハグをするが、テンションは決して高くない。始まったのだ。疲れていようが何だろうが、第57回日米学生会議は遂に動き出したのだ...

第57回日米学生会議は、京都、広島、沖縄、東京の4サイトで行われた。実行委員は一年前から、会議自体の内容を練る以外に、広報活動、財務活動、予算作成、参加者選考なども行い、会議の企画・運営を全面的に行う。毎週のように四ツ谷の事務所でミーティングを行い、平日でも放課後に事務所に通って発送作業をしたり、過去の会議のリサーチなどをした。そしてそのルーティーンは本会議直前まで続いた。だから、第57回日米学生会議は、一ヶ月間の会議というよりは、実行委員としての一年間の活

動成果の集大成という意味合いの方が強かった。本会議中は、全てがスケジュール通りに進むか気にしながら、時には動揺したり、空回りして迷惑をかけたが、一年間を通して練ってきた実行委員のプランは着実に実行に移されていった。実行委員同士お互いを助け合い、参加者にも支えられ、なんとか会議は予定通り進んだ。

しかし、予定通り進んだ、とは何とも楽観的な表現だ。表面上はなんとかスケジュール通りに進行しても、心の中は常に複雑な思いでいっぱいだった。参加者が漏らす不満や要望に応えられないことに自分の無力さを感じたり、実行委員と参加者の関係がわからなくなって混乱した。アメリカ側実行委員とのコミュニケーションでも想像以上に苦戦し、サイトの詰めも露呈した。「一年間の活動成果の集大成」なんて格好良いことを言ったが、本当にそんなスゴイことを自分はやったのかが疑問に思えてきた。実行委員という肩書きに満足して怠っていた部分もあったし、他の実行委員やデリストアッフに甘えていたのも否めない。つまり、私はもっと頑張れた。しかし気付いたときにはもう遅かった。第57回日米学生会議は、まるで得体の知れないモンスターのよう、進み続けたのだ。大きな音を立てて、大勢の人を巻き込み、時には色を変え、時には暴走し、たまに狂い、泣き、笑い、そして爆発し、時には停止し、でも着実に変化しながら、dynamicに、staticに、unstoppableに、aliveに。

... 8月23日、正午。東京の国立青少年オリンピックセンターのバス駐車場には、80人近くのJASCerがいた。大きなスーツケースやリュックサックは一つ一つバスに積み込まれるが、アメリカ人はなかなかバスに乗ろうとしない。最後の写真を笑顔で一緒に撮ったり、強くハグし合ったり。別れるのが惜しくて、終わるのが切ない。涙も止まらない。悔し涙か、感動の涙か、はたまたただのもらい泣きか。多分、全部だし、もはやどうでもいい。私は第57回日米学生会議を通して、自分と真剣に向き合い、成長するチャンスを与えられた。それに気付けただけでも幸いなのである。

最後になったが、第57回日米学生会議にご支援、ご協力いただいた皆様に、心から感謝し、御礼申し上げたい。

中里 広明

いろいろあった。良いことも悪いことも。ただ、自分にとって大事なことは、この一ヶ月間で、ふとした瞬間に、ふらりと心が動いたことが何度もあったこと。それらをまとめて何か言おうとは思わないけれど、そのかわりにそうして心が動いた、印象に残っている場面をひとつだけ、書いておこう。

東京。午前中に中国からの参加者を加えてディスカッションをし、昼食をとっていたときのこと。アンナが座っていた斜め横に僕が座り、そのあとすぐにデレクが僕の向かい、アンナの隣に座った。すぐに、デレクは午前中のディスカッションの批判を始めた。デレクが言っていたのは、議題が大きすぎたこと、会話に脈絡が無く、建設的でなかったこと。ふむふむ、と同意しながら聞いていると、デレクは、そもそも学生のディスカッションには限界があるんじゃないの、というような話を始めた。それはちょっと、と何か言おうとしたら、それまで黙っていたアンナが、一言、Why are you here? と言って、またがつがつご飯を食べつづけた。この瞬間のアンナはすごくカッコ良かった。

中島 朋子

「トモコの将来が楽しみだ。」

これは日米学生会議が終わる最終日から今に至るまで参加者の多くの人から得た言葉だ。私の中で今までこれ以上の激励の言葉はないと思っている。

“I'll be looking forward to your future Tomoko!”

この言葉の中には私が日米学生会議と言う夢のような、けれど夢には決して出来ないほど手ごたえがあり、生涯にわたって忘れる事ができないであろう一ヶ月の体験が詰まっている。

JASC が始まった初日、私は他の参加者の前で自分の目標を述べた。

「私は全てを勝ち負けで判断してしまう傾向があるからこの一ヶ月は純粋に感じて純粋に感動したい。」この目標に挑戦するように、日米学生会議での日々は本当に充実感でいっぱいだった。様々なバックグラウンドを持ち、人間性の濃い、熱い人たちに会い、普通に暮らしていたのでは経験できないような場所を訪問する機会を多く得られた。それまで真剣に考え

る機会の無かった問題や日本とアメリカの文化的な違いについて夜遅くまで語り合ったり、独り言が英語になるほどに英語をしゃべる事が自然になったりと、本当にたくさんの経験を通して今までにない自分の視野を広げる事ができた。JASC 参加前の私は何か自分に無い優れた人たちに会ったりすると、「ああ、負けた！」とあってしまい、人から何かを学び取るという姿勢がうまく出来ないでいた。しかし JASC が終了するころには「この人たち、本当にすごい！！」と心のそこから他の参加者に対して思うことができるようになり、目標に近づく事ができるようになったのが私の中でのこの会議の大きな成果だ。

大学二年の夏にこの日米学生会議に参加した私は参加者の中でも年少のほうである。人生の経験も、もちろん学術的なバックグラウンドも他の多くの参加者に至らない私は「こんなにすごい日米学生会議に参加するのは少し早すぎたかな。」と会議が終盤になるにつれてその思いを強くしていった。年齢の差など決して関係ない JASC であるが、せっかくこんな経験をするのならばもっと知識や人生経験を少しでも多く積んでから参加したかったという思いもあった。しかし一ヶ月経った今、私は 10 代最後の夏をあの特別の空間で過ごすことができたことを心から幸福に思う。私には 19 歳の夏だったからこそ経験できた事、感じ取れた事がきっとあったはずなのであり、それを十分に感じる事ができたのだ。それは必ずしも楽しい事ばかりではなく、自分の人生観や価値観を大きく揺るがし、時には苦悩するものであったが、私の視野を大きく広げてくれた。本会議中にお会いした数多くの元 JASCer が「JASC のすごさは終わった後に気付くものだ。」とおっしゃっていたのだが、確かに JASC が終わってから今日に至るまで私の視野はまるで際限がないような広がりを見せ、大きく私を成長させていると感じている。それも以前には無い純粋な感動とともに。

一生手放したくない本当に素敵な仲間たちに出会えて、その人たちからもらった、

「トモコの将来が楽しみだ。」

と言う言葉を私はこの先もずっと心にとどめていき、そして自分を更に飛躍させるエールになるだろうと思っている。みんな！本当にありがとう！！最高の夏だったわ。

生板 沙織

眼を瞑って思い出すのは橋の上から見渡せる原爆ドーム。静寂な灯籠流しの風景。暑い街中の路面電車。TBSが放送した「涙そうそうプロジェクト」を見てからは、60年前の原爆投下までの一週間に被害にあった同じ場所で過ごしたことを初めて実感した。今こそ日本列島で戦争は無いが、テロや地震などいつ何が起こるか分からないこの危険な世の中は、60年前と何も変わっていないのかもしれない。父親の仕事で今まで何度も引越しを繰り返し、その都度大切な人々を残してきた私にとって、次に彼らに会う前に自分や彼らが死んでしまったらという恐怖が常にある。だから広島を思い出すと胸が詰まるのかもしれない。非常に自分勝手な理由で感情移入しているが、今の私にとってそれが精一杯である。本会議中、広島や沖縄の平和記念資料館を巡っているときは、素直に感情すら表現できなかった。原爆や戦争と向き合うのが怖かったのだろうか。平和記念資料館に入るや否や、悲しみをそそるような音楽や照明の効果にまぜうんざりし、展示物をあまりよく見ることも無く、外に出るほか無かった。しかし本会議が終わり、毎日のように原爆投下のことを考えるようになったが、ただただ心が痛む。高校を卒業してから帰国した私にとって、この会議の最大の目的は「日本を知る」ということだった。広島や沖縄を目の当たりにし、米国を嫌いになることも日本を好きになることもなかったが、今まで日本を全面的に否定していた私の何かが変わった。日本は自分の肌に合わないという気持ちに変わりはないが、「日本は悪い国だから」という気持ちから、「日本は良い国だろうけど、自分にはやはり合わない」という気持ちへと変わっていったのである。そしてこの旅を終え、初めて日本にも何か貢献しなければという気持ちが芽生えた。言葉では語りつくせないほどまでに滅ぼされたにも関わらず、前向きに米国と手を取り合う、尊敬する日本に。今回の米国側の実行委員長が中国新聞にインタビューを受けたときの言葉が印象深く心に残っている。これからどうやって平和に貢献したいかという質問に対し、彼女は「周りの家族や友人、恋人、知人にとにかく広島に行くように、原爆投下の理由を他の角度からも見てみるようにと彼らの背中を押す」と応えた。小さいアクションかもしれないが、私も是非それを実践していきたい。日米学生会議とは、今まで受

けてきた学校教育よりもインパクトの大きい人間教育を施す場所なのだろう。日本と米国の間でただ板ばさみされるのではなく、両方に身を投じようと自分に誓った夏であった。

錦 信吾

日米学生会議が終わって約半月・・・未だ、私はこの夏の経験を消化しきれないでいる。その理由の一つは、一度にあまりに多くの出来事が起こり、頭がパンクしてしまったためである。ただ実際のところ、会議中のディスカッションやフォーラムが英語だったので、純粋に内容が把握しきれないというのが現状であろう。

何はともあれ、日米学生会議が終了し、今はおもしろい友達に出会えて本当によかったと思っている。会議中の当面の目標であった『とにかく目立つこと』も達成できたのでよかった。広島・沖縄 site を通し、戦時中・戦後の日本に関し新たな発見、再認識ができた。最もよかったことは、アメリカ側参加者とのディスカッションや異分化交流の中で、価値観を共有できたことである。育ってきた文化的背景が違うため、当初は戸惑い緊張したが、時が経つにつれ気心が知れてくると、共に酒を酌み交わし、時には議論し、大いに盛り上がった。また、飲みすぎたアメリカ側参加者を介抱するという一幕もあった。『アメリカ人も日本人も通ずるところがあるのだ』と当たり前のことを、寝食をともにすることで身をもって実感できたことが、プチアメリカ・英語コンプレックスを抱えていた自分にとって、身近な一番の成果だったように思う。

と、ここまではよかった、よかった尽くしである。しかし、同時に私個人における問題も山積みであった。特に、専門性の違いによる知識の不足が大きな問題であった。私は医学を専攻しており、経済やグローバリゼーションに関しては疎い面がある。そのため、会議の内容が理解できない時が往々にしてあった。さらに日米学生会議のメインテーマの一つである、output を考えると更なる知識の充実が必要となってくる。やはり、今後海外での仕事を考えるにあたり、一つの専門性と幅広い知識が重要になってくることを痛感した。今回の自分のダメダメさの実感が、今後の将来に生かされることを願う。生かしていかないと、どうにもならないので、がんばりどころである。

これらのことを押し並べて考えてみても、会議への参加は大成功であった。反省点が多く見つかる会議であったからこそ、次につながる課題も見えてきた。今は、『日米学生会議で何を学びましたか?』という質問に対する回答を模索している段階である・・・最後になるが、日米学生会議実行委員・参加者・バックアップしていただいた皆様に感謝を述べたい。本当にありがとうございました。



沼田 雄二郎

日米学生会議に参加する以前に抱いていたイメージと参加後の感想、以上の2点について記したいと思う。

①参加前

当初、日米学生会議という単語から連想していたのは、まさにフルブライト奨学金制度であった。つまり、親米派の生産工場のようなものである。このフルブライト奨学金制度によって現在に至るまでに約 6000 人の優秀な人材が渡米し、現地の教育を受けてくるのであるが、その強力な人脈をアメリカが有利な外交の展開のために利用していることは言うまでもない。これは日本に対してのみおこなっているのではなく、アメリカは世界中から優秀な人材を集め、教育している。このようなソフトパワーと圧倒的なハードパワー（軍事力）を組み合わせ、覇権国家としての地位を揺るぎないものとしているのだ。

話を戻すが、初めはそのように考え、身構えていた部分があった。

②参加後

しかしながら、実際の学生会議の内容は予想に反したものであった。期間中に親米的な教育は無く、その代わりに、これでもかと思えるほど第二次大戦の悲惨さについてひたすら学ぶこととなった。この点については、今回が日本開催だったこと、及び戦後 60 周年記念だったことが少なからず影響していただろう。

このように内容的には想定外であり、予想以上に日本側のオリジナリティ溢れるものであったのだが、過去に焦点を当てすぎている点がやや気になった。過去を学ぶというのは、理想的な未来を築くためにするものであって、今後の展開に対して新たな答えを導き出さなくては意味が無い。だが、会議中にそれらが達成されたとは思えなかった。

冷戦の終結後、東側諸国の崩壊や BRICS の台頭などによって、日本の地位は著しく低下してしまった。半 chaos 状態の国際関係の中で、力なきものは何も変えられないことを歴史が教えてくれる。では日米関係を軸として、どうしたらこのような事態（日本の地位低下）を解決できるか、過去をもとにその手段・戦略を模索していくことが、我々若い学生には必要とされているし、テーマとしても説得力があるのではないか。また、もちろんこのことは学生会議と関係なく考えるべき事柄なのだが、次回の日米学生会議にも大きく反映されるよう努めたいと思う。

袴田 隆嗣

本感想文では私の第 57 回日米学生会議を通しての具体的な経験を素材に、本会議に参加することで得たものを記して全ての協力者の方々へ感謝を表したいと思います。なお、実行委員という特殊な立場で参加したため、実行委員活動を取りわけとりあげたいと思います。

私はつまらない人間です。何がつまらないかというと、常に当該行為の目的を個人レベルで設定し、目的合理的な行動をとるからです。これまで私は意識的にか無意識的にかを問わずそうしてきましたが、そうした態度を問題とは思わずに生きてきました。

私は財務及び沖縄サイトの企画及び運営に携わらせていただきました。実行委員活動のほ

とんどすべての意思決定において、私は上記の原則に従って行動していました。実行委員全体としてのコンセンサスが得るまで話し合うことのリターンが不明確なときは、組織としての目的でさえ話し合わないという提案をしてきたのです。

沖縄サイトのコーディネーターとして活動していたときのことで、ホームステイの実施を予定していたのですが思うように受け入れ先が見つかりませんでした。会議も始まり参加者全員が沖縄に到着しても状況は同じでした。ホームステイが実現しなかった場合の宿泊先も確保済みでしたしこれ以上ホスト探しにコストをかけることに意味があるのだろうかと思っていました。しかし、協力者の方々ともう一度なぜ沖縄にきたのかということ話し合い、ホームステイをすることの意味・目的を確認し、なお実現にむけて行動することを決めました。そのときの私を動かしていたのは単なる個人のコストとベネフィットの計算のようなものではなく、情熱とか使命とか客観的には説明できないものだったと思います。結局、多くの方々の労力を頂きながら前日によく想定した人数分の家庭を確保することができました。

会議を終えて、ホームステイ実施に関して誇りに思っている半面、会議全体を通して私は大きな空虚感を抱いています。何なのかよくわかりませんが、少なくとも個人でパフォーマンスをあげられることと、組織としてでなければできないこととの間には大きな溝があるのだということは確信しております。

日米学生会議は学生に失敗する機会を与える非常に貴重なシステムであると考えます。

私はこの経験から得られたアセットを今後の人生において最大限の努力とともに運用していきます。

波多野 綾子

広島。アメダリと一緒に、流れてゆく灯籠を見つめていた。ひとつの灯籠はやがて他の灯籠の列に誘われて合流し、その彩りは、まるで闇夜の万華鏡のように、色鮮やかにゆれて。飽き

もせず、私たちはじっと無言で川面を眺めていた。

もうそんな時間も、今思い出すとんだか現実ではないようで、でも確かに一ヶ月前、自分がそこにいたのだとおもうと、不思議な気持ちになる。

JASCとはなんだったか。それを通して何かを獲得したか、成し遂げたか、とあらためて聞かれても、うまく説明することができない。

一ヶ月で成長したとか、何かを成し遂げたというよりも、「何か」に触れて、感じた。そういう抽象的な言葉でしかいいあわせられないようなもの。しかしそれは確実に、今この瞬間にだけ得られる、とても大切なものであるように感じた。そう、今回訪れた、土地、人々、文化、歴史、そして JASCer たち。会議中のあらゆる風景、言葉、感情は自分の中に降り積もり、自分の一部となって残った。それは自分の貧困なボキャブラリで説明しようとしても、言葉と実感の乖離に無力感を感じるのみであるが、あえていえば。

それは、「今」を生きることだった。

一ヶ月間、肩書きも、成績も、利益も、過去も将来も関係なく、今ある「波多野綾子」という個人として、参加者全員に向きあい、そして「今」を楽しむこと。毎日、参加者一人ひとりの個性におどろかされ、素晴らしいメンバーに会えたのが嬉しいと同時に、自分の中の劣等感に苦しめられることもあった。そのたびに自分自身を振りかえり、再構築し。それは将来に向けての「価値」なんて陳腐な言葉では片付けられない、そのときの経験、感情そのものが宝物である。人生は結果だけでなく、過程なのであるから。

それは、きづなだった。

自分と日本とのきづな。そして自分と他者とのきづな。一ヶ月を過ぎて、ふっと偶然であって、素晴らしい笑顔で再会を喜んでくれた JASCer に、自分は心から感謝した。きっと1年たっても、10年立っても、変わらぬ笑顔で、語りあうことができるだろう。信頼できる仲間がいること、かえるべき場所があること。そんな思いが支えてくれるから、何か新しいことにチャレンジしたいという意欲と活力が沸いてくるんだろう。

そして今思い出すと、灯籠流して、「JASC」みたいだ。それぞれの祈りが、思いが、限られた時間をよりそって、より一層、光輝く。その後色とりどりの光たちは大洋に船出し、それぞれの道をまたいくのだろう。でもあの川を流れながら、共にすごした時間は、交わした思いは、きっといつまでも残る。

最後に、数々の試行錯誤をへて 57 回をつくり上げてくれた実行委員、個性とバイタリティあふれる参加者の皆、関係者の方々、親身になってアドバイスをくださったOB、OGのかたがた、会議を支え、共に創り上げてくださったすべての方に感謝を記したいと思います。また、この報告書を読むかもしれない、日米学生会議への参加を考えているの方々へ。感じるもの、得られるものは人それぞれ異なると思いますが、日米学生会議が自分について、他者について、世界について考えるすばらしい機会のひとつであることは確信をもっていえます。今しかできない「チャンス」をつかんでみてください。

樋口 宏

日米学生会議最終選考面接の時に私が発した一言。

「私はロウソクのような人です。」

この言葉は実行委員の間でかなり物議を醸したらしい。ちなみに、笑いをとったつもりはない。誰も褒めてくれなくても、ひたすらに身を磨り減らして周りを明るくしてくれるロウソクのような奉仕の精神、これは私が小学校から立教で学び、キリスト教に触れる中で培ってきたものであり、自分の宝物である。夏場は熱すぎて大量にロウが垂れることもあるが。本報告書では、ロウソクの話を中心に日米学生会議を振り返ってみたい。

2005年1月に大学の教授から広報のメールを頂き、学生生活最後の夏休みを世界で一番熱いものにするために日米学生会議に参加しようと思立った。自分の足りない何か、切磋琢磨できる環境が絶対そこにはあると確信した。選考試験はどんな企業への就職選考よりも緊張したし、合格通知を受け取った時は、恥ずか

しながらこみ上げる涙を抑えることができなかった。それほどまでに嬉しかった。立教大学から唯一の学生として、日本人として、国際人として、そして何よりもこの国際的な大舞台で自分の「生き様」がどれだけ通用するものなのか。さらに自分の専攻分野である地域主義の分科会で、いかに貢献・活躍できるのかは大きな挑戦であった。期待と不安の武者震いを隠せないまま、気合十分で事前準備・本会議に挑んだ。

本会議中はひたすらに体を張った。どんなときもパワフルに、周囲が少しでも元気付けられるように自分なりに常に愛を持って努力したつもりである。言葉が通じないときは全力で体を使ってコミュニケーションをとることに努めた。Skitでは相撲をとり、Talent Showでは空手の型を演武し、ピアノで自作曲を弾き語った。「ノコミュニケーション」の席では大声で駆け回り、カラオケや海などの遊びにも率先して関わっていった(無理やり笑いにこじつけてすべったことは数知れず・・・)。運営、誘導などの仕事にも積極的に関わっていった。分科会の議論では頻繁に”Clarify”マークを提示し、争点の明示・共有・展開に努めた。言語の違いを越えた人間のつながりを探しているようであった。そこで気付かされたのは、本質的には、どのようなバックグラウンドがあっても、国籍が異なってもひとりの大学生・人間であるということである。その中で「共有」できる何かを見つけ出し、ぶつかったり認め合ったりする中で友情を育むことの素晴らしさというものをこの会議を通じて感じ取った。そして、日本側参加者・アメリカ側参加者を問わず切磋琢磨する中で、自分自身を磨き、見つめなおし、一回り成長することができたことをいまひしひしと実感している。

私は本会議中に1回だけ、沖縄で涙を流した。緑色に輝く珊瑚礁・一面に広がるさとうきび畑などの雄大な自然、に感動しただけではない。重い口を開いてくださった語り部の戦争の体験談に思いを馳せただけでもない。実は、12年前に家族で来た沖縄の地に舞い戻ったことに涙を流したのだ。そのとき一緒だった母は、昨年1月に病気で亡くなった。1年以上の歳月が過ぎて私は大学4年生となり、ひとりで生きていくことを実感するようになってきていた。一方で、一人っ子である私に注がれた母の優しさを嫌がり、素直になれなかった自分への後悔が募っていた。しかしながら、本会議で訪れた

沖縄からの平和のメッセージ、命の大切さ（命どう宝）、そしてそれを幼少の自分に伝えようとしてくれていた親心というものを感じ取った。

「右も左もわからない幼い自分を、こんなに素晴らしい場所に連れてきてくれていたのか・・・」

自分の過去を静かな心で見つめ直すと共に、愛を沢山浴びて真っ直ぐに育った自分に気付かされた。12年間の歳月を経て、いまここで日米学生会議に参加し、成長した自分の姿を天国の母に届ける。平和の礎から沖縄の海風を浴び、流れ落ちる涙を止められなかった。私は自然と、

「今日まで生きていてよかった」

という感覚に陥った。日本中で活躍するピアニストだった母から受けた音楽の手ほどき、絶対に妥協しない精神、マッサージのツボ、人の痛みのわかる人間になること・・・本会議の中で輝きを保つことができたのは、元はといえば母のお陰である。自然と感謝の気持ちが湧き出で、自分に素直になれた瞬間だった。生きるエネルギーに満ち溢れる自分に気付いた。

ただ、今回の日米学生会議では、あまり前に出ず、裏方に回りながら周りの人を活かすということに努めた。その点、「完全燃焼したのか？」という発問に対しては快くイエスとはいえない。また会えると思って最後は号泣できなかったし、英語を使うことを躊躇してしまったことも何回もあった。まだまだ自分自身やれたのではないか、と思ってしまうのは確かである。ただ、自分の「ロウソク」としての生き様だけは貫けたような気がする。そして、日本側・アメリカ側参加者にそれが理解されたこと、ひとりの人間である「樋口 宏」として勝負ができたことは自分にとって大きな財産である。私の生き方に触れる中で他の人に僅かであろうとも何らかの影響を与えることができたのなら本望である。完全燃焼しきれなかった部分は、自分への新しい課題として、今後残された学生生活、そして人生の伸びしろと思って大切にしていきたいと思う。

ちなみに、この会議で一番嬉しかったのは、実行委員から、「ひぐポンを採用してよかった

わ！」と言われ、アメリカ側参加者に「来年もひぐポンと一緒に参加したいのに。」と言われたときである。自分の行動・生き方を通じて日米学生会議に少しでも貢献し、他の人に影響を与えることができた、という気がした。しかしながら私は、来年の実行委員を務めるために卒業と内定を辞退するという選択肢ではなく、社会人になるという決断をした。こう見えて気持ちはかなり揺れ動いたのだが、1年だけの参加であったからこそこのような価値のある思い出を作ることができたのだと思うと、来年以降ここで学んだ経験を活かして社会に向けてロウソクの光を灯していきたいと思いついた。これからは Alumni として活動を盛り上げて行きたいと思う。具体的な形はまだわからないが、外側から貢献できる何かがあると信じているからこそ。

“Do your best, and it must be first class!!”

（最善を尽くせ、しかも一流であれ）



福田 愛奈

「真剣に楽しむこと」「メリハリをつけること」 一会議を目前に心に決めた。

滋賀、バラバラの学生とゴタゴタの両国実行委員、順風満帆とは言えないスタート。実行委員の1年間の願いがねじれて具現化した焦燥感をよそに、次々と予期せぬ問題や收拾がつかないかと思われた衝突やすれ違いが生じた。しかし、準備活動中とは異なり、早く終わってほしいような、逃げ出したいような気持ちは不思議ともうなかった。ハプニングも含め1つ1つがついに実現した第57回日米学生会議そのものであ

り、同時にその1つ1つが生かし方次第で大きな成長する芽である。笑ってしまうほどギッシリ詰まった毎日の中で、力の入れ方と抜き方、日米で異なる意識や組織運営方法のギャップの埋め方、対集団と対個人、また実行委員でありながらも会議に参加する一員であること、こうした諸々の両立や調整の術が見え始めた頃から徐々に楽になった。1年間、1週間、前夜、と細かく練りつめた1日が昨日となり、過去となり、驚く速さで流れていった。気づけば、わたしが囲まれていたのは参加者の面々の何か吹っ切れた笑顔だった。

広島、建ち並ぶビルの中で小さく感じられた原爆ドーム。座り込みやビラ配りで平和を訴え続ける国籍を超えた人、圧倒され涙する人。人の声で賑わう真夏の昼、刈りそろえられた芝生に平和記念式典に向けて整然と並べられていく無数のイスを眺めながら60年間の意味を考えさせられた。

沖縄、完結していない悲劇の傷跡と復興の軌跡。大きな空には炎も国境も見えなかったが、米軍航空機の騒音が響いた。バスで隣になった米国側の友人は「話好きの祖父は沖縄戦の経験だけは語らない」とボソッと一言。空も海もあまりにきれいで、人はあまりにむごい。それでも周囲の澁澁とみなぎるエネルギーや静かな強さと深い優しさを目の当たりにし、言葉では何も語れない無力感を知った。

東京、会議の集大成としてのフォーラムを含む10日間におよぶ最終サイト。そのコーディネーターだったわたしは本会議が始まってからも抱えたおもりを日本のどこにも置いて来ることができず3週間近くひきずり回していたように思う。

「いっぱいいっぱいな時こそ平静に笑顔」――思えば会議中、何度も自分に言い聞かせていた。東京入りした瞬間からそびえる困難と仕事量の多さに辟易する隙もなく奔走し、まさしくいっぱいいっぱいになりそうだった。しかし、わたしはおそらくヘラヘラしていた。自分から安心の輪を広げようと思ひ、ここからは上がるしかないと思ひ直し、寝不足でオツムが弱体化していたからであり、いつからかプレッシャーも心地悪くはなくなっていた。またあらゆる難局を想定して1人で切り抜けられるものとは考えないようにし、謙虚さと柔軟性を忘れずに東京

サイトを満喫した。仲間と過ごす毎日という本番の積み重ねこそが最終サイトを作る。おもりの正体はエンジンだったのかもしれない。

フォーラムも無事盛況のうちに終わり、その翌日、希望者を募って富士山登山を敢行した。雲に向かって登っていくほど街の光は小さく、星は大きくなってゆき、大きい何かは遠ざかっていくような不思議な感覚に襲われた。天候に恵まれず頂上は断念せざるを得なかったものの、日の出にはつねる寒さと一緒に雲はさらわれていき、見事に晴れた。丸ごと飲み込まれそうだったあの朝の思いも光景も、表現するにはまたもや言葉は役に立たない。下山し、バスで戻り、急いで支度した。1時間後には閉会式が始まった。

「 」 一夏が終わった。

この1年間を消化するには1ヶ月は短すぎ、ましては紙に収めるのは無謀で乱暴ともいえる作業である。記憶を辿れば懐かしく苦い思いが複雑に絡み合い、燃え尽きたような虚無感に何度も筆が止まる。わたしが日米学生会議とその人々に出会い、衝撃を受けたのは2004年、19歳の夏。感謝の気持ちあふれるその夏の終わり、1人でも多くの人にこの機会を与えたいという真っ直ぐな思いと、つないでいく使命感を抱いた。背中を押してくれた友人もいた。わたしが実行委員になるには、これで十分だった。しかし、1年間を通して、自分の中では必ずしも情熱だけではなく、相対化と客観化を経て第57回日米学生会議は形になっていった。「国際交流」が何ら珍しくないグローバル化する地球で、良好といわれる日米関係のうちに育ったわたしたちが多くの方々に支援され、また大きな機会費用を払い、今集うことにはいかなる意味があるのか。この夏も参加者の数だけ異なる答えが生まれたことは言うまでもない。

思えば、息切れ寸前で駆け抜けた。2004年夏のスタートラインと2005年夏のゴールはわたしの足元にスタートラインをもう1本ひいてくれた。今日からの道の手がかりは、手元に残された今はまだ整理のつかない思いと紙の山。日米学生会議じゃなきやダメだった。

未熟なわたしは会議中のみならず、多くの方々にご迷惑をかけることもあったに違いない。日米学生会議の57回目の実現のために、辛抱強

くご指導下さった皆様、ご多忙の中ご協力下さった皆様、批判して下さいの皆様と応援して下さいの皆様に、改めて心から感謝を申し上げます。もちろん、集まってくれた主役のみんなにも。

藤原 智生

「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」この壮大な理念の下に開催される日米学生会議。

しかし、本会議中で感じたことは、その理念に対して自分の無力さであり、自分たちの無力さであった。

この一ヶ月のまとめであるフォーラムで自分たちの議論のアウトプットとして政策提言を行ったが、残念ながらそれが社会に対して影響力を持つとはいえなかった。

それならばこの一ヶ月間、日米学生会議の意義とは何であったのだろうか。

今の時点で私が言えることは、この会議を通して参加者同士がお互いに刺激しあうこと、他の参加者と自分の相対化による自己の再発見、そしてJAS Cerという絆を作るということである。

刺激と自己再発見。

私にとって、この一ヶ月間は毎日毎日が刺激と発見の連続だった。

英語が得意ではない私にとって、他の参加者の使う表現、意見の構成方法、スピーチ等を聞き、自分への劣等感にさいなまれながらも、「いい」と思ったことは次から自分でも使えるようにと、必死にメモを取った。

また、数あるイベントを作り上げていく中で、リーダーシップをとるのが得意な人、通訳に優れている人、周りを盛り上げるのが得意な人、人それぞれに輝くモノを持っていた。その中で自分はどの部分でこの会議に貢献できるのだろうと、自分の中の引き出しを引っ掻き回した。しかし、私は、結果的にはあまり会議の運営に対して貢献できたとは言えず、その悔しさはいまだに残っている。

JAS Cer という絆。

一ヶ月間、24時間、気がつけば誰かが隣にいる、そんな環境で一ヶ月を共有することで得られ

る不思議な感覚と絆。お互いの話し方や癖、しぐさ、好き嫌い。いい面も悪い面も見えてくる。時間を忘れて政治や、恋愛について語ったり、時にはくだらない遊びを試みたり、そんな非日常的な時間、空間を共有した感覚、そして絆は簡単には失われるものではない。

そして、未来への可能性。

「JAS Cは夏の一ヶ月間が終わってからが始まり。」

本会議中E CやALUMN Iの方から幾度となく聞いた言葉。私は、この言葉の意味がつかめなかった。

しかし、本会議が終わって3週間たった今、その言葉の意味が見えてきた。

本会議は終わってしまったが、未だにメーリングリストやチャットなどを使って参加者同士のコミュニケーションは続いている。そしてこれからも続いていくであろう。このように、この夏の一ヶ月間で築いた絆をもとに、参加者はこれからも本会議同様、お互いに刺激し合い、高めあう。

そして、それが結果として、この会議の理念にあるような、世界の平和の一翼を担う人材を作り上げるのではないか。

今の私には、これが日米学生会議の真の意義であるように思える。

夏の一ヶ月は終わったが、これからも私の、私たちの日米学生会議は続いていく。

そう確信している。

最後に、みんなありがとう。そして、これからもよろしく。

ダラ プスピアルディニ

今思えば一ヶ月間赤の他人 79人と合宿生活することは一生できるかどうかの体験だった。

JASCへの参加は、ただの夏休みの一部のつもりだった。でも、今JASCは今後の「私」という人物を形成していくのには欠かせない出来事かと思っている。

いったいのJASCは何だったのだろうか。去年の報告書を読んで、JASCが終わってこの疑問を投げかける参加者は多かった。同じ質問を自分に問いかけてみて、何を答えるかというよりもどう答えるのかが分からない。JASCでの一ヶ月

月間で、何も得られなかったわけではない。JASC で人と出会い、仲間がつくり、友情を築き、一緒に何かを作り上げ、仲間と語り明かした日々。それでもまだ消化できていない事柄が多すぎて、私は「モヤモヤ」する気持ちを抱えたまま九州に帰った。

JASC の始まりを思い返してみる。

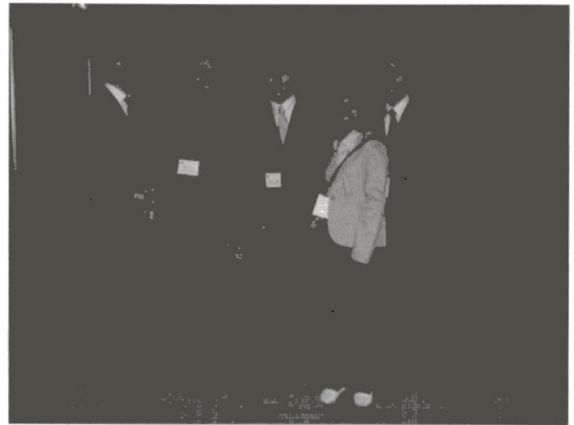
私は日本に7年間も住んでいるのだが、日本人の集団とは何年かけてもなかなか馴染めない。JASC の前に他の国際的な学生会議に参加したことがあるのだが、やっぱり周りの空気と自分の空気がマッチしないことが多かった。JASC に応募した際に、今までの経験からまた周りに馴染めない自分の姿を想像していた。でも、春合宿のときに初めて他のメンバーと顔を合わせ、何でもない話をした。気づかぬうちに私は自然に全体の一部になって私の一部が少しずつ全体に包み込まれていた。

本会議が始まったときは、正直に言うと焦りと情熱と興奮と期待が入れ混じっていた。自分の英語力でグローバル化や経済について語れる自信がないと気づいている割には本会議までに自分の足りないところを埋めようとする努力が足りなかった。その一方、自分と異なるバックグラウンドを持っている人たちとどんな話ができるのか、どんなものを得られるのかと胸に期待を膨らませていた。このように、すっきりしなくて「モヤモヤ」した気持ちで私の JASC は始まった。JASC ではアメリカ側と日本側の参加者と戦争、平和、教育、ジェンダー、仲間、恋愛などについて時には表面的に、時には深く語った。自分なりにみんな一人ひとりを見つめることができた。また、一ヶ月間家族から離れ、毎日みんなと接していくうちに自分がどんな人間のかを周りのみんなが私に気づかせてくれた。みんなに感謝の気持ちでいっぱい！！

私は他のメンバーから多くの刺激、勇気、感動をもらったが、自分にはそれを完全に消化できないことが多くて今の段階では自分の思いを言葉に紡ぐことは難しい。でも、一つだけ確かだと思えるほど強烈な思いが自分にある。JASC にみんなが一人ひとり関わっていく際に、また、自分も JASC をつくりあげるその一員になった際に、何かあるいは誰かに対する一人の思いが

見る見るうちに形になっていくことがとても素晴らしく思い、強い希望を感じていた。

JASC が終わって、JASC が始まった時と同じように「モヤモヤ」していた。それは、おそらく JASC 中でやり残したことが多かったからだ。でも、この「モヤモヤ」が逆にこれからの自分の原動力になると思う。



古川 啓之

60年前、日本と米国は壮絶な戦争を繰り返していた。唯一の地上戦が展開された沖縄では沢山の方が犠牲になった。広島と長崎には原爆が投下された。両者は敵対関係にあった。

60年後、日本と米国は、世界でも最も優良とも言える同盟関係にある。そして米国に対して好印象を持っている日本人が多いこともまた事実であろう。

あれだけ敵対し、沢山の犠牲を払った戦争をしたにもかかわらず、今日では世界一の仲良し。そんな状態にある両国の関係が、私にとっては不思議で仕方なかった。どうして今こんなにも両国は友好的なのだろうか。

ヒントを得ようと、同居している90歳の祖母に終戦の時のことを聞いてみたことがある。祖母はこう答えた。「終戦とその後の変化があまりにも劇的過ぎて、民主主義など新しい概念について不思議に感じる余裕すらなかった」と。

なるほど、たしかに終戦という出来事は、それまでの日本を根底から覆すものであった。劇的な変化に加え、その変化に対応した日本人特有の適応性と勤勉さもあいまって、日本は新しい体制へと変わって行ったのだろう。

今回、日米学生会議で、広島と沖縄を訪問した。被爆者の方、戦争体験者の方にお話を伺う貴重な体験を得た。つらく思い出したくもないであろう体験であるにもかかわらず、落ち着いて当時の様子を話してくださる姿に頭が上がらなかった。私は、お話を伺う度に、なぜそのようなつらい経験をお話くださるのか、質問した。返ってくる答えはいつも同じだった。「もう二度と自分が体験したような残酷なことが起こって欲しくないから。」

なぜこのような気持ちになるのだろうか。60年という月日がそれをもたらすのだろうか。それだけではないだろう。憎しみや時間というものを超えて、それらでは表せない、悲惨な経験を繰り返してはならない、という純粋な願いが込められているのだ。

沖縄では、北部の本部町にホームステイをする貴重な機会を得た。印象に残った単語がある。いちやりばちよーで。一度会ったら、家族になる、という意味である。「日本に軍隊はいらない。なぜなら、いちやりばちよーで、だから。」こう地元の方はおっしゃった。

私は、この言葉に、お話し下さった方々に共通する気持ちが凝縮されていると感じた。この言葉自体の意味は上述した通りであるが、その背景にある精神が共通しているのではないだろうか。

国籍や文化が違って、同じ人間として、互いを理解し、共に生きていく。そこに、対立は存在するかもしれないが、その対立は武力を持たずして解決可能である。そして、武力を用いた解決方法は必ずや多くの悲惨な結果をもたらす。だから、そのような解決方法をとってはいけない。

では、結局なぜ日米両国はこのように友好的なのだろうか。

もちろん冷戦という大きな国際政治の流れも要因の一つであろう。しかし、このようなマクロの要因だけではない。悲惨な経験を繰り返してはならないという思い、さらにはその思いを具現化する努力、これらのミクロの要因も少なからず影響しているのではないだろうか。一人一人の気持ちがこの友好関係を支えている、お会いした方々から私はそう感じた。

そして、私たちもまた、日米学生会議参加者として、これからの日米関係を担う「一人」と

なっていかなければならない。大げさかもしれない。しかし、一人一人の小さな気持ちと努力なしには、大きな果実は実らない。この会議は、まさにそのスタートなのだ。

いちやりばちよーで。この言葉に込められた魂を大切にしていきたい。

前田 薫

-JASCは私にとって大きな「スタート」である-

私は大学で ESS という英語のクラブに所属し、二年間ディスカッションやディベート活動を行ってきた。JASC に応募した理由は、二年間 ESS で鍛えた英語力を試したい、9月からの一年間の中国留学に向けて日本理解を深めたいという思いからだった。

しかし現実には甘くなかった。アメデリの英語は早すぎてよくわからず、海外留学経験者や帰国子女のジャパデリが、アメデリと楽しそうに話しているのがうらやましくてしょうがなかった。私は移動中のバスの中や見学中も常にアメデリと一緒にいて積極的に話し、英語がわからなくてもできるだけアメデリと一緒にいるようにした。そのおかげで徐々にアメデリの言うこともわかるようになり、会議の後半からは通訳に挑戦したり、RT でも積極的に発言したりできるようになった。

そして今、私は一年間国際政治を学ぶために中国の大学に留学に来ている。中国に来る二日前 JASC のメンバーがお別れ会を開いてくれた。その最中アメリカに戻るあるアメデリから電話がきた。「今成田空港にいるんだ。薫と出会えてよかった、ありがとう。」メッセージで「君の中国での経験の全てをぼくに教えて。僕のインドでの経験を全て教えるから。」と言ってくれるアメデリもいた。他にも多くのアメデリから議論ができて楽しかったという手紙をもらった。今でもたくさんのアメデリと、もちろんジャパデリとも連絡を取り合っている。

JASC で知り合った大切な仲間たち。とことん私の話につき合ってくれた仲間や夜遅くまで語り合った仲間。「彼らとずっと語りあいたい。JASC では伝え切れなかった私の思いを伝えたい、受け取れなかった彼らの思いを聞きたいから。」そのために中国でも英語の勉強を続け、留学経験を通して自分の考えをもっと成熟させたいと思う。

さらに私に課せられた役目。それはここ中国で、JASC で得た経験を中国の学生に還元すること。JASC のように、いやそれ以上に中国の学生と政治・経済問題、国際情勢について議論をしてそれを JASC の仲間や多くの人に伝えたいと思う。

-JASC は私にとって大きな「スタート」である-

三谷 佳孝

2004年の夏、プリンストン大学で第57回会議の実行委員に選出されてから一年が経ち、第57回会議もこの報告書の発行により無事に終了の運びとなった。この一年間に味わった喜怒哀楽の感情は、とても言葉では簡単に表現できるものではないが、第57回日米学生会議に関わってくださった方々に感謝の気持ちを表す為、また人生の中での21歳を振り返る将来の自分自身の為に、この文章を記したい。

実行委員の活動は今年の会議が終了した後の9月から本格的に始まったが、私が実行委員になってから常に意識してきた事がある。それは唯一の地方実行委員として、私にしかできない役割を果たす事であった。役割とは何か。1、地方（主に関西の活動）を取り仕切る。2、東京の実行委員に劣らない活動をする。3、地方参加者の立場から意見を出す。ことが挙げられる。私は、京都の大学に通いながらも東京の実行委員に劣らない活動をこなしてきた自負はあるつもりだ。しかし、距離に起因する疎外感や無力感を完全に克服する事は出来ず、活動中に被ったフラストレーションは計り知れない。情報の不足や、細かい決定に関われない事は仕方がなかったが、小さな不満が大量に溜まると苦痛を覚えた。しかし、比較的東京を訪れる機会を多く与えられたのは不幸中の幸いであった。

実行委員としては広報、選考、そして滋賀京都サイトコーディネーターの役職を任されていた。広報は同じく実行委員の荒島と二人で担当してきたが、今となっては様々な思い出が駆け巡る。私と荒島は性格的にはほぼ正反対であった。どちらかと言えば私は慎重で保守派。荒島は大胆で革新派であった。そして幸か不幸か我々は広報活動に対し強いこだわりを持っていたため、お互いの案を譲ることを余りせず、

衝突の連続であった。しかし、今となってはその衝突のお陰で、結果的には効果的な広報活動を行えたのではないかと思っている。出来上がった広報媒体や活動を見直しても、荒島の斬新的なアイデアと作戦は有効的であったのは間違いない。しかし、私が細かい配慮を忘れなかったことも大事であっただろう。東京滞在中に荒島家で夜が明けるまで二人で作業を続けたことも、今となっては良き思い出である。広報活動は実行委員一丸となり頑張った活動であると言えよう。私自身も毎日、リーフレットやポスターを持ち歩き、様々な大学を巡った思い出が忘れられない。365日間 JASC という文字を忘れた事は間違いなくない。

広報活動が一段落して間もなく、選考の準備が始まった。前年の反省より第57回の選考は形態を大幅に変更して行われる事になった。細かい事を伝えることはできないが、我々が採った方法は正解だっただろう。選考の準備はとにかく細かい事が多いため、面倒な作業が多かったが、同じく選考担当者だった出浦の要領の良さにも多いに助けられ、準備期間を乗り切る事が出来た。実際の選考は学生である実行委員にとって大きな挑戦であったが、この経験から多くの事を学ぶ事が出来た。また、この時期は私自身が就職活動をしていた時期でもあったが、面接を行う立場を経験し、その後の自分の就職活動に活かす事が出来たのは、私自身にとっても非常に有意義だった。選考後には一週間の選考合宿があり、実行委員だけの共同生活が行われた。選考という最大の目的はあったものの、実行委員同士の人間関係も深められた思い出深い一週間である。

ゴールデンウィークには参加者との初対面である春合宿が行われ、本年度の参加者が一同に会した。受験票の写真とにらめっこを続けた顔全てが、リアルに同じ空間に同居している現実を受け止めるまでに少し時間がかかったが、実行委員としてのこれまでの活動に間違いはなかったと確信し、本会議へのモチベーションは更に上昇していく一方で、迫り来る本会議の準備へのプレッシャーも重荷に感じてきた時期でもあった。

就職活動が最終的に終わった五月末から本会議開始までの私は全力をサイトの準備に注いだ。私が最終的に場所を設定した滋賀、京都

という場所で、更に自らの通う大学で日米八十名の学生を招き、会議を行うということは、学生の身分としては願ってもない機会であり、学生最後の大舞台としてこれ以上のものは無かった。滋賀、京都サイトでは、歴史と未来と言う二側面を持った本年度テーマの後に結びつき、更に地域性に関連した「環境」というテーマに設定し、シンポジウム型のプロジェクトを開催することが決定していた。このプロジェクトは構想だけが先行し、中身が定まらないまま春合宿に入ったが、ここで募った参加者のスタッフ、通称「デリスタ」の多大な貢献と協力により可能性を大きく膨らませていった。デリスタの面々はそれぞれの長所を最大限に活かし、プロジェクトの骨組みを組み立て、全体を補強していった。私は現場の監督になり、強固な信頼を持ちながら全体を見渡すことが出来た。そのお陰で、プロジェクトでは大学教授、企業、高校生を招き、日米両国の学生によるプレゼンテーションを行うボリュームのある企画となった。プロジェクトに関して詳しくは別項で見て頂きたい。米国学生のプレゼンテーションにあたり、アメリカ側実行委員の Lucky とプロジェクトの方向性を決め、何度も打ち合わせを行ったのもやりがいがあり、貴重な体験であった。私なりにこのプロジェクトの最も大きな意義は、日米両国の学生が会議前から周到に準備し 50% / 50% の関係で発表を行えたことにあると考える。日米学生会議という名前はあるものの、言語や準備の面から日米の学生が対等にまとまった意見を表明できる場合は、最後のフォーラム以外では難しいものである。特に、日本開催の会議では日本側実行委員の負担が過多なため、このような機会を行う事が難しい中で作り上げることができた事は、非常に有意義であったと感じている。プロジェクト本番では、デリスタ以外の多くの参加者も積極的にプロジェクトの成功に尽力してくれた。ただ、準備の面で至らないところがあり、スタッフの負担が多くなってしまった事を詫びたい。最初のサイトであり、会議に慣れないまま行ったプロジェクトであったが、無事に終了した今ではこの機会を可能にくださった全ての方々に感謝の念を述べたい。

サイトではその他にも、オープニングセレモニー、文化プロジェクト（京都国際学生映画祭の受賞作の上映、能の上演、体験）、京都での宿坊体験、散策を行い、最終日には阪神大震災

から十年を経た神戸を訪れ、地震大国日本の現状を学んだ。私は一週間の行程の中で私が生まれ育った、関西という地域の歴史、現在を最大限に表現しようとした。参加者に地域特性を強く印象付け、地域が抱える様々な問題を感じ取ってもらえたならば報われる。

その後会議は広島、沖縄、東京と続いたが、実行委員という立場、日本で開催されているという状況を差し引きしても、昨年参加した会議とは余りにも雰囲気の違いに戸惑い続けた。しかし、自分で日米学生会議のイメージは 56 回会議に強く影響されており、この会議に定まった形はないということ割り切れるようになってからは、今年の日米学生会議を徐々に受け入れられるようになっていったが、会議が終わりに近づくにつれ複雑な気持ちになり、苦しくなってしまった。最終日前日には体調を壊してしまった。そして最終日、米国側参加者との別れの際に、その気持ちが一気に膨張し破裂した。気がつけば泣き喚きながらバスを追っていた。行ってしまえば楽になった。この複雑な気持ちはここで表せるものではないし、表すべきものではないだろう。実際、今でも腑に落ちていないのである。ただ、私の中の葛藤の塊であるとだけ言っておこう。

こうして、実行委員としての第 57 回日米学生会議は終了した。会議の開催にあたって個人的に特にお世話になった立命館大学の浅野様、山本様をはじめご協力、ご指導くださった方々には本当に感謝してもしきれないくらいである。そして、一年間の活動を通じて切磋琢磨し合った同じ実行委員たちには本当に感謝しており、これからも刺激し合える良い関係を築いていきたい。参加者の皆とは、これから更に人間関係を深めていきたい。日米学生会議ではよく言われるが「会議の終わりが始まり」なのである。

第 57 回会議の終わりには、第 58 回の実行委員が選出されており次年度の開催が決まっている。近年、日米関係が非常に良好な中での日米学生会議の在り方、使命が問われている。今年の会議では中国企画を行い、日米間ではなく中国を加えた日米+1 の企画を開催し、その流れからか、次年度の会議もグローバルな世界の中での二国間の役割を見据えているようであり、これは非常に結構なことであると思う。し

かし、私が経験した二度の会議の中で、日米間での学生がそれぞれの国に関する議論を行い、十分に相互理解ができたかと思うと、そこには疑問を感じざるを得ない。つまり日米間でも十分と思わないのだ。参加者の語学力は問題ないと思う。今や日米の学生が話す機会がありふれており、会議の重要性は過去と比べるほどのものではないし、今年に限って言えば、参加者が日本という環境に甘えたようにも感じた。そのような中で会議を続ける意義はどこにあるのか。今まで以上の二国間の相互理解を目指し、文字通りの意味での「日米」学生会議を続けるのか、日米と第三者の関係を模索する会議となるのか、それとも創設当時のように革新的な「日米学生会議」になっていくのか。これからの時代と世代が答えを見つけるだろう。

森 賢子

JASC は夢のようにやって来て、そして過ぎ去っていった。

学生生活も残り一年、最後に学生でなければできない何かをやってみたいと思っていた私は、以前の参加者である友人から「日米学生会議」の存在を聞き応募はしたものの、まさか本当に自分が参加できるとは思っていなかった JASC。日本人であるにも関わらず、あまりにも日本やその歴史について無知な自分。JASC を通して、日本各地を巡り歴史を感じ、またそれをアメリカ人の仲間たちと共に経験することで、自分のバックグラウンドや日本人であるということを新しい視点から見つめなおすことができるのではないかと考えたのが JASC に参加した一番の理由だった。

春合宿で日本側の参加者と初めて出会い、皆の意識の高さに刺激され本会議に向けて準備を進めていく決意を固めたものの、就職活動などで事前勉強会には殆ど参加も出来ず本会議を向かえることになってしまい、出発の日には不安に押しつぶされそうな自分が居た。しかし、そんな不安も久しぶりに会った日本側参加者の笑顔、そしてなによりも分科会メンバーの温かさに励まされ、少しずつ和らいでいった。

JASC で過ごした一ヶ月を振り返ると、それは様々な形での異文化体験に溢れていた。アメ

リカと日本という枠には収まらない、戦争や平和といった世界観、そして参加者一人ひとりのもつ価値観や人生観等、私にとっての様々な異文化が私に語りかけてきたことは計り知れない。言葉でうまく表現することはできないが、この異文化体験により、物事に対して今までとは違った感じ方をするようになった。

学生最後の夏は JASC により、私にとってより特別な夏になった。英語にはさほど問題はないだろうと思っていたものの、通訳が全くできなかったことや、JASC に十分に貢献できなかったことなど、一ヶ月という限られた期間の中で消化しきれなかった部分も沢山残る。しかし、JASC is just the beginning. JASC での経験を大切に胸で暖めながら、今後 alumni として JASC を自分なりに支えていく道を探すことで自分の中で JASC での経験を完成させていきたいと思う。

最後に、奇跡的に一メンバーとして JASC に参加できたことを本当に嬉しく思うとともに、私にそのような機会を与えて下さった協力者の方々をはじめ、57回の EC のみんな、そしてメンバー一人ひとりに感謝の気持ちでいっぱいです。



山内 拓磨

JASC が終わった日、一人鈍行で京都に戻った。新幹線ではなく9時間もの時間をかけて自分の「居場所」に帰ったのは、なかなか自分自身の reflection time が取れなかった JASC 中に感じたことを、漠然でもいいから整理したかったからだ。JASC が終わって一ヶ月以上たち、こ

の感想の提出も大幅に遅れてしまっているが、車窓の外を見ながら率直な思いを走り書きしたキャンパスノートを久方ぶりに開きながら、私なりの会議への思いをまとめたいと思う。

大学生活を通して学生会議の運営に関わってきた私にとって、JASC は自分が責任を負っていた会議とは違うことができる、「新しい場所」だと期待していた。分かり合うという過程には時間が必要である。私が運営してきた会議はイラク、アフガン、イスラエル、パレスチナなど世界の紛争地から学生を招致し対話の空間を創っていたが、滞在日程は長くても1週間程。「対話」や「理解」という言葉は、より深い付き合いと時間をかけて、成熟させていくべき概念だと思い、JASC への参加を決めた。言ってしまうと上っ面の対話を越えたところに何があるのか、それを自分で確かめたかったのだ。

会議が終わって、その答えの一端を掴んだ気はした。それはぼんやりとしていて言葉にはまとめきれないのだけれど、まずそこに参加した意義があったように思う。アイデンティティとは他者がいることで成り立つ自己であるから、差異はあって当然である。その差異が国家や国籍、宗教や文化からもたらされるのではなく、それを超越したその一個人から認識した瞬間、世界は違って見える。もちろん国家や文化が一個人の人格に無意識に影響を与えているものだが、それすら偏見なしに受け入れることができた瞬間、小さくても強固な一つの輪を、国境を越えて作り出せたように感じた。JASC を通してその輪を増やすことができたのではないかと、それが一つの結論になるのかもしれない。ただしその感覚は決して私にとって新しいものではなかったようにも思う。

もしかしたら、「日本開催であること」が大きな意味を持ったかもしれない。アメリカ開催の方が参加希望者は多いという。外国に安く行けるのだからそれは当然なのだが、私にとっては自国での開催だったことで学べた点が多くあった。戦後 60 年目の今年、日米間を中心とした太平洋戦争の意味を改めて検討する必要性は、メディアなどから盛んに叫ばれていた。21 歳の私にとって、40 年前に終わった戦争を肌で感じる機会はない。ヨーロッパと違い冷戦構造から未だに完全に抜け出せていない東アジアでは、確かに半世紀以上前の戦争が禍根を残しているが、現在の国際社会が抱える問題と絡み合い、各国とも決して純粋に過去の戦争を

直視しているようには感じられなかった。そんな中で原爆の被爆者の方やひめゆり部隊の生き残りの方と会い、自分の想像の及ばない戦争の記憶というものに触れられたことは、大きな衝撃であった。同時に、「過去」としての戦争だけでなく、米軍基地や靖国神社など、戦後 60 年を経た「現在」も関連する問題が私達の頭を頑固にし未来への足取りを重くしているのであって、決して 21 歳の私が無関係ではないことを身を持って感じた。私の専攻である国際政治においては、物事の表面をさらうのではなく本質を見極める努力をすることや、多極的に現実的視点を持つことが求められる。JASC 中は、語り部達や辺野古で米軍基地移設に反対し座り込みを行う人々の率直な思いを前に、「現実的視点」を持つことに罪悪感と空虚感を感じた。当時の戦争の背景に自説を展開し、日本の安全保障の観点から基地移設の必要性を説くことは何の意味もないように思われた。そして私の故郷、山口県岩国市も厚木基地からの部隊移設受け入れに伴い、受験生の頃苦しめられた夜間発着訓練の数は増えることが確実だという。もちろん、基地移設に反対し座り込みを行い、核の恐ろしさを発信することだけが真実ではない。しかし私が安全保障を語り日本外交を語る際は、ひめゆりの方、被爆者の方、辺野古の方、そして故郷岩国で騒音に苦しむ人々のことを忘れてはいけないと強く思った。それがどんな意味を成すのかは分からないが、辺野古の活動家の方がおっしゃっていた言葉を忘れずにいたい。「国家あつての安全保障じゃない、国民の安全な生活あつての安全保障だ」。

米軍基地の話をする際、私達の目は沖縄に行きがちだ。しかしその問題を抱えるのは岩国市を含む他の地域でもある。同じことは戦争の被害者という文脈でも言うことができる。被害者はもちろん被爆者でありひめゆりであるが、日本が侵略したアジア各国の人々も同じように辛酸を舐めた。つまり戦争を語るとき、私達は狭い視野で被害者になりたがる。その経験の一つは尊重しながら、国際政治で求められる幅広い視野はここで必要になるはずだ。

帰国子女のジャパデリが多い中で、いい意味でも悪い意味でも私には日本という国しかない。それは偏狭な考えしか持たないという意味ではなく、日本という国に無限の関心を持ち、この国の行く末を主体的に考えるという意味であるに違いない。フォーラムでも述べたが、この目で見えてきた様々な問題に対し、「私に何

ができる」のか。思えば学生会議に関わり始めた大学1年の頃から、その答えを探し続けてきた。JASC もその答えを探してきた道の延長線上に存在したが、ただ存在しただけでなく確かな動機付けを私に与えてくれた。おそらく日本開催でなければそう強く感じることはなかったのではないか。もちろんアメリカ開催に参加していない私にはその答えは定かではないが、「国際」政治を専攻する中で自分の「足元」に対し注意を疎かにしていた私にとって、JASC が大きなきっかけとなったことは間違いのないことである。

学生にできることは何か。学生と社会人の過渡期にある一大学院生として、問い続けてきたこの質問から一歩進み、「何がしくて、何になっっていくのか」に探る答えを移して行きたいと思う。そのベースには JASC があり、日米関係があるのかもしれない。

新たな過程を歩き出すのに貴重な機会を下さった 57th の EC を含む JASCer のみんなに感謝したい。また飲もう、また語ろう、何十年経っても。

山田 裕一朗

2005年4月、一枚の送られてきた封筒、その中にある書類は自分が日米学生会議（＝JASC）に参加できない事実を伝えていた。「補欠合格」。

JASC に参加したいと思った理由は大きく 2 つある。

- (1) JASC という今まで自分が経験してないであろう空間で自分を成長させたいと思ったから。
- (2) アメリカ合衆国という国が嫌いであったから。

補欠合格であった理由は、いくつかあるのだろう。しかし、(1)のような思いを抱いていたが、JASC に対して貢献できることについて、明確な意見は持っていなかったのは事実だ。おそらくその点が欠けていた。

だから私は、運良く、JASC に参加できる事が決まった後、JASC に対して貢献できることは何かを考えた。そして、その時自分が抱いた

思いを、京都在住であったこともあり、実際に企画・運営に参加できた環境プロジェクト（本会議中7月30日滋賀にて開催）に詰めることにした。それは、環境という普段は学者や NGO、政府機関などによって語られることが多いトピックに、そういった学術的・政策的な視点だけでなく、実際に環境問題に深く関わっている企業の視点を取り入れることだった。結果的に、JASC に貢献できたのかは分からないが、しかし、70年以上続く JASC という存在に対して、自分の中で、新しい風を発することができたのではないかと思っている。

また、JASC に参加したい動機となった 2 つ目に上記(2)の理由がある。JASC に参加するまでの学生生活は、旅行がメインで 20 カ国程度、東南アジア・中東・ヨーロッパを中心に周ってきた。それらの経験を通してアメリカに対する世界の目の厳しさを実際に感じたこと、さらに政治的にもアメリカは好きではなかった。従って、かねてより同世代のアメリカ人と語ってみたいと思っていた。

今、JASC を振り返ってみても、まだ明確な感想を抱けない。自分が得られたもの、そして経験したこと、それらはとてつもなく大きなものであると同時に、それらが今後の自らの人生にどんな影響を及ぼすのか現時点では計り得ないものなのだろう。57th JASC が終わること、それは自らの人生の日記一冊分が終わり、また新品の日記を購入しなくてはならなくなった、そんな思いを抱かせるものであった。そして、これから 58th JASC のページを埋めていく日々を送ることになる。

最後に、滋賀で共にプロジェクトを企画・運営した仲間、京都で落ち込んでいる自分を励ましてくれた仲間、広島で共に戦争とは何か語りあった仲間、沖縄で降り注ぐ太陽と夏を共に感じた仲間、東京で1ヶ月の思いを共有し合い最後に別れを惜しんだ仲間、JASC を通して出会えた仲間、これからも大切な仲間だ。

第 6 章

第 58 回日米学生会議概要

事業内容

**Examining the Future of the Japan-America Relationship
Within the Global Framework**

二国間を超えた未来 ～伝統への回帰と私たちの挑戦～

1934年、満州事変以降失われつつあった日米相互の信頼回復が急務であるという認識を持った日本人学生たちにより、日米学生会議は創設された。この日本初の国際的學生交流団体は「世界平和は太平洋の平和に、太平洋の平和は日米の平和にある。その実現のために学生も一翼を担うべきである」という創立当時の信念に基づき、様々な試練を生き抜き現在まで継続されてきた。日米学生会議は創立以来、学生の相互理解と友情、信頼を醸成し続け、毎夏日米交互で行われる約一ヶ月間の会議は、すべて学生の手で企画・運営されている。

第58回日米学生会議は「二国間を超えた未来～伝統への回帰と私たちの挑戦～」“Examining the Future of the Japan-America Relationship Within the Global Framework”というテーマの下、イサカ、ニューヨーク、ワシントンDC、オクラホマ、サンフランシスコで開催される。

イサカでは、参加者の交流を図る。その上で会議の土台を形作り、ヴィジョンを共有し、一ヶ月の戦略を立てる。ニューヨークでは、グラウンドゼロや国連本部へのフィールドトリップや企業訪問を通し、グローバリゼーションの中心を体感する。アメリカ政治の中核であるワシントンDCでは、ネイティブアメリカンについて学びアメリカという国の起源に触れるなど、それぞれの分科会の方針に沿った資料館などを訪れる。そしてアフリカプロジェクトにより、アフリカにおける貧困から人権問題まで、いわばグローバリゼーションの周辺、あるいは外側に位置する人びとと話し合う。オクラホマでは、ブッシュ政権を支える人々と直に触れ合い、彼らの宗教観やライフスタイルを知ること、アメリカの根底にある価値観を体感する。また、アメリカでネイティブアメリカンが最も多く住む地域として知られるこの地で得るものは多いであろう。そして、最後に訪れるサンフランシスコでは、ビジネスの現場に飛び込み、その現状を把握する。この地は一ヶ月の成果を発信するフォーラムの開催地でもある。

日米間と太平洋の、そして世界の平和の実現のために、学生もその一翼を担わなくてはならない。創設当初からのこの理念を、参加者一人ひとりがそれぞれの価値観から再構築し、一ヶ月間のさまざまな活動を通し体感する。異なる価値観がぶつかり合い、互いの問題意識からの切り口で考え、それぞれの力がひとつの目的に向かってはじめて、それは実現する。

グローバルな枠組みからもう一度世界を捉え、その上で日米関係の未来を見つめなおす。日米関係を検証しなおし、未来へと目を向けるべき時が来たのだ。

そのためには、現地に生きる人びとの声や、普段は触れ合うことのない人びとの声に真摯に耳を傾けることが必要不可欠である。それらの経験から得たものについて、異なるバックグラウンドを持ち、多様な価値観を有する学生たちが活発に意見を交わし、ともにひとつの目標に向かってその能力を存分に発揮する。本会議中の分科会やフィールドトリップはもちろん、事前の勉強会やワークショップなど、多種多様なテーマと切り口を持ったプログラムはすべてが繋がりを持つ。そして参加者の一ヶ月間を通した有機的協働から生まれた成果を目に見える形式で社会に向け発信し、社会に影響を与えることを目的とする。

また、公式・非公式と場を問わず交わされる参加者同士の議論、相互理解による真の交流により、長期的視野に立った人材の育成と社会貢献を目指す。伝統をそれぞれの胸の内に継承し、かつ新たな挑戦を生むような、第58回日米学生会議を作り上げたい。2006年夏の経験を胸に、成長した参加者がそれぞれの方法で「未来」と飛び立っていただければ幸いである。

開催地および開催期間

開催期間

2006年7月27日 ～8月21日

ニューヨーク州 イサカ (コーネル大学)

(7月27日～7月31日)

「ニューヨーク」と聞くと、花やかで多忙なマンハッタンの風景を思い浮かべがちだが、北の方へ行くとがらりと景色が変わる。この古き良き町イサカは、決して大きくはないが全米でトップレベルを誇るホテル学科を持つコーネル大学やワイン醸造所で知られ、フィンガーレイクス付近の自然に恵まれた活気のある地域である。リベラルな思想を持つ人が多い中、ネオコンとして有名な世界銀行総裁ポール・ウォルフォウィッツ氏もこの町の出身であり、伝統的な保守も存在している。ここでは始めのサイトとして相応しい、チームワークを有するアスレチックを通し参加者同士の信頼関係を築き、コミュニティーサービスを通して米国郊外の人々の生活に触れるのを狙いとする。

ワシントン D.C.

(7月31日～8月9日)

ワシントン D.C.はホワイトハウス、連邦議会議事堂、連邦最高裁判所と三権の最高機関が集まるアメリカ合衆国の首都である。同時にアメリカ全体の歴史や文化に関連した多数の博物館もある等、政治的に中立である必要から北部と南部の間に作られたこの人工都市は見事にアメリカ全体を集約する場所であると言えよう。ワシントン D.C.サイトでは、アメリカ政府で責任ある立場におられる方からお話を聞くことで現代のアメリカの政治的な動向を知り、また世界各国から集まる外交に携わる方々やあるいはNGOの方々から多様な価値観の下で21世紀の世界観についてのお話を聞き、我々に出来る世界貢献を考える。

オクラホマ

(8月9日～8月14日)

オクラホマは、他の南部各州と同じく圧倒的なプロテスタントの影響の下、伝統的に保守的な地域であり、リベラルと保守の間を行きつ戻りつするアメリカ大統領選挙にも影響を与えてきた地域である。本サイトは、ホームステイ等の地元交流を通じて、ややもすれば批判を受けるアメリカ現政権を支える人々のお話を聞くことで伝統的なアメリカ保守系市民の世界観、政治観を理解することを目的とする。一方でオクラホマは、ネイティブアメリカンの多い地域でもあり、多人種の移民国家であるアメリカの中で伝統的にマイノリティであった先住民の価値観や政治観を、お話を聞くことを通して理解する。

サン・フランシスコ

(8月14日～8月21日)

サン・フランシスコは日系を含む様々な人たちが移住した場所であり、パークレーなどの学園都市で若者文化が栄えているところでもあり、第二次世界大戦の跡が残る町でもある。

同時に、ゴールデン・ゲート・ブリッジなど観光名所も多い。実際に日系

人として戦時中に収容された人の話を聞いたり、博物館に行ったりすることで日系アメリカ人、そしてアメリカにおける移民の位置づけに関して考えてみたい。同時に、サン・フランシスコには港町として様々なビジネスが盛んなので、そうしたビジネスを訪問し、日米社会に関して考察してみたい。ボランティアへの参加や、教会などの現地に住む人と交流できる機会を活用し、西海岸の人の考えとその多様性に触れたい。

会議の過程

第57回日米学生会議の参加者から選出された実行委員が、日本側は主催団体である財団法人国際教育振興会、米国側はJASC.Inc.の協力の下、本会議開催のための準備活動を行う。参加者が決定後、所属分科会のテーマに関するレポートを作成し、講演会や勉強会、合宿などを事前に行い、夏の本会議に望む。

本会議では、日米各36名、合計72名の学生が約1ヶ月にわたって共同生活を送る。本会議中の主な活動として、討論が中心となる分科会、各種のフィールドトリップ、そして様々な社会活動、終盤に開催されるフォーラムなどが挙げられる。参加者が7つの分科会に分かれ、第58回会議のテーマである「二国間を超えた未来 ～伝統への回帰と私たちの挑戦～」の下、ディスカッションを行う。また、フィールドトリップや社会活動では、各自の視野を広げ討論の充実化を図る。さらに、本会議では議論のみにとどまらず、ホームステイやフォーラムなど積極的に地域の方々との交流を図っていく。フォーラムでは、分科会での討論の結果など本会議の成果を社会へ向けて発信する。

本会議終了後には、参加者は会議の内容を報告書にまとめ、第58回日米学生会議の総括とする。各参加者は、本会議で得られた経験を胸に社会へと巣立っていく。

会議中のプログラム

分科会

分科会活動は、本会議中の議論やフィールドワークのみならず事前勉強会や議論を円滑に進めるための事前レポート作成が含まれ、まさに第58回日米学生会議の中核となる活動である。分科会を通して得た知識や経験を下に、学生としてできる社会貢献について模索し、本会議そして事後活動の中でそれらを実践していきたい。こうした問題意識の下、日米、そして世界の未来を担う私たちが今議論すべきことを考え、7つの分科会を立ち上げた。

- ・ 科学技術と社会
Science and Society: The implication of Innovation
- ・ 市民参加の発展と非国家主体
The Evolution of Civic Participation: Non-state Actors and Transnational Politics
- ・ 開発：貧困と発展
International Development: Poverty and Progress
- ・ 多文化主義とマイノリティー
Global Mobility: Multicultural Issues and Community Building
- ・ 外交と国家ブランディング
National Identity and International Perceptions

- ・文化とアイデンティティー

Global Subculture: Creation of "Reality" in Imagined Communities

- ・多国籍企業とビジネスモデル

Designing a Global Company: Responsibilities and Strategies

フィールドトリップ

分科会の議題や各開催値に関する理解を深めることを目的に、政府機関、国際機関、企業、大学、NGO および研究所などへ訪問研修を実施する。事前活動におけるものと同様に、社会と直接関わることのできる貴重な機会であり、現実に即した議論をするための基礎とする。

Special Topic(ST)

論題が既に固定された分科会とは異なり、参加者が個々の興味や時宜に沿った論題を自由に設定し、異なる視点からの議論を行う。参加者の主体的・自発的な参加により、問題発見・論題設定能力を養う。同時に、より広い参加者同士の交流を促し、新たな視点や発想の獲得により、会議をより充実させる。

昨年のトピック例) 人権、他民族社会、恋愛、NGOの紹介など

Conference Wide Discussion(CWD)

日米二国間の問題・アジアと日米の国際関係に関する、全体共通のトピックに関して議論する。世界へ向けた日米関係を構築するため、未来へ向けての提言を考える機会を提供する。

フォーラム

会議の最終開催地、サンフランシスコで行われる。本会議における分科会の議論の発表など、第58回日米学生会議の成果を提示する。現代社会が抱える問題を来場者と共有し、会議の成果を社会へ発信することを目標とする。そして、この会議が学生の自己満足で終わる事のないよう、各人が自ら積極的に社会に関わり、発信していき続ける事を再認識する場でもある。

Conference Wide Reflection(CWR)

参加者が一同に集い、会議中に感じた悩み、不安、感動、喜びなど、様々なことを自由に話し合う。自分の思いを全体に伝え、また他者の思いを共有することで、自己の振り返りを深め、他の参加者との相互理解を促進することを目的とする。

第7章

日米学生会議に

ご協力いただいた方々

第57回日米学生会議 協力者

第57回日米学生会議主催・後援

主催：

財団法人国際教育振興会

後援：

外務省

文部科学省

米国大使館

日米文化センター

財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

会議全般

財団法人国際教育振興会

理事長

大井孝

総務広報部 広報担当部長

稲田脩

総務広報部 主任

水野詠子

国際教育振興会賛助会

事務局長

伊部正信

事務局

佐々木文

The Japan-America Student Conference, Inc.

理事長

Robin L. White

専務理事

Regina McGarvey

外務省

広報文化交流部 部長

近藤誠一

広報文化交流部 人物交流室長

山元毅

広報文化交流部 人物交流室

小山久子

文部科学省

大臣官房国際課 課長

川原田信市

米国大使館

広報・文化交流部 教育・人物交流室

松元美紀子

財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

理事長

森重利直

専務理事

吉澤誠司

日米文化センター 日本代表

伊部正信

財団法人 世界平和研究所

理事長

大河原良雄

社団法人 日米協会

副会長

緒方四十郎

三菱商事株式会社

取締役会長

榎原稔

国際通貨研究所

理事長

行天豊雄

朝日新聞社編集局

特別編集委員

船橋洋一

JASC Japan (旧 OB 会)

会長

山室勇臣

幹事長

中瀬正一

京王観光株式会社

東京中央支店 セールスリーダー 小川富良

ブルーバンブー株式会社

制作室プロデューサー

石川周平

吉田祐介

株式会社 実業広報社

常務取締役

古屋繁

株式会社 千修

加藤圭一郎

事前活動

横浜山手中華学校

潘民生

井上敏之

原孝事務所代表

原孝

防衛大学校

大野和基

本会議活動

滋賀・京都サイト

立命館大学		三洋電機株式会社イノベーショングループ、	
総長	長田豊臣	コーポレート統括ユニット環境推進センター	
教学部長	佐藤満	所長	堀井浩司
BKC 教学部長	松野周治		鷺見晋吾
国際関係学部教授	清本修身		藤田周子
大学教育開発・支援センター	浅野昭人	京都新聞社 記者	葦原 裕
BKC 教学推進課課長	山本修司	みんなの滋賀新聞 記者	久谷靖哉
国際関係学部事務局長	川口潔	大阪市議員	福島真治
国際関係学部事務室	桜井稔也	神戸日米協会会長	キラン・S・セティ
総合情報センター	原尚司	社団法人神戸青年会議所	
日米協会副会長	緒方四十郎	常任理事	井上淳也
京都外国語大学教授	大石秀夫	理事	大橋功
米国総領事館 領事	張錫平	国際交流委員会	三井貞子
駐大阪神戸米国総領事館、		京都国際学生映画祭実行委員	徳田智奈美
関西アメリカンセンター	中西えり	第 54、55 回日米学生会議参加者	堀抜功二
滋賀県		第 54、55 回日米学生会議参加者	江川響子
政策調整部企画調整課	中島実	第 56 回日米学生会議参加者	海野慧
企画調整部政策調整課参事	木村太治		
京都市総務極国際化推進室	永原卓郎	京都学生能楽連盟	
京都大学地球環境学堂教授	植田和弘	エポック立命 21	
関西電力株式会社社環境室		衣笠セミナーハウス	
地球環境グループマネージャー	砥山浩司	株式会社クレオテック	
地球環境グループマネージャー	横川晋太郎	宿坊悲田院	
堀川高校			
教頭	川浪重治		後援
教員	飯澤様	滋賀県	
紫野高校 教員	森本様	草津市	
有限会社スマイレ写真館	大岩信頼	京都市	

広島サイト

広島市市民局国際平和推進部		長崎国際大学教授	中根允文
	佐々木敦子	ネバーアゲインキャンペーン前大使	
広島観光コンベンションビューロー	下岡憲子		野上由美子
広島駅弁当	眞崎洋一	広島市立幟町中学校	
在日韓国朝鮮人被爆者	李実根	校長	光原達夫
広島女学院大学教授	篠原収	教諭	宮奥和司
広島女学院高等学校		学生ガイドボランティアの方々	
校長	勝部禎文	セジュールフジタ	
教頭	森隆	中区民文化センター・アステールプラザ	
漫画家・被爆者	中沢啓治		

沖縄サイト

後援 沖縄県、糸満市

沖縄県		財団法人 沖縄観光コンベンションビューロー	
知事	稲嶺惠一	イベント推進チーム 調査役	儀武利治
副知事	牧野浩隆	コンベンション振興部	照屋美奈子
観光商工部交流推進課 主幹	國吉薫	沖縄フィルムオフィス	瀬川辰彦
観光商工部交流推進課 主査	仲村裕子	沖縄国際大学法学部 教授	佐藤学
基地対策課	桃宇常雄	琉球新報社 記者	屋良朝博
糸満市役所		沖縄タイムス社 編集局社会部記者	玉寄興也
市長	西平賀雄	沖縄県浦添市役所 企画部情報政策課	
教育長	大城勇	主事	平良誠
市議会議長	大城正行	結 株式会社	島袋由乃
秘書広報・男女参画課長	宮城正一	沖縄平和ネットワーク	
秘書広報・男女参画課 主幹兼係長	玉城真宏	ホームステイでお世話になった方々	
秘書広報・男女参画課	大山市子		安里千恵子
観光農園推進室 副参事	玉城雅夫		伊保妙子
糸満市教育委員	大城静江		宇地原克信
在沖米国総領事館			金城敏
総領事	トーマス・ライク		喜入久子
広報・文化担当補佐官	高安藤		九反田浩人
経済商務担当補佐官	林明德		護得久宣子
嘉手納基地 渉外官	崎浜秀昭		志良堂博一
オリオンビール株式会社 総務部総務課			端慶山絹子
	志良堂学		高嶺紀子
琉球新報社 編集局南部報道局	安里周悟		当山初枝
ホテル スポーツロッジ糸満			徳村初枝
支配人	藤田学		長嶺輝也
	佐久川貢		濱村チェミ
財団法人 沖縄県国際交流・人材育成財団			村山盛敏
国際交流課 課長	西原健		山城健
国際交流課 交流係	平田直樹		NBCサムシングフォー西崎

東京サイト

エアバス・ジャパン株式会社		青山学院大学国際政治経済学学部	
代表取締役社長、		助教授	武田興欣
在日米国商工会議所元会頭		慶應義塾大学法学部	
	グレン・S・フクシマ	教授	国分良成
YKK株式会社		米国大使館	
ファスニング事業本部ファスニング事業部長		東京アメリカンセンター	
	猿丸雅之	副館長	ギレス・ジョアン
経営企画室 総務・広報グループ長	渡邊英一	東京アメリカンセンター	
日本国際問題研究所		広報文化交流部	島山陽子
主任研究員	中山俊宏	独立行政法人 国立オリンピック記念少年総合センター	
原田武夫国際戦略情報研究所			
代表	原田武夫		

その他全般

立教大学
法学部長

吉岡知哉
山本東生
中山智夫
玉城美穂子

第56回日米学生会議実行委員会

久保田豊乃
飯田智紀
佐藤智紀
坂口紋野

(敬称略・順不同)

第57回日米学生会議 賛助者・団体・企業

独立行政法人 国際交流基金日米センター
 財団法人 石橋財団
 財団法人 沖縄観光コンベンションビューロー
 財団法人 国際教育財団
 財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

社団法人 東京倶楽部
 社団法人 日米協会

エアバス・ジャパン株式会社
 株式会社 イトーヨーカ堂
 株式会社 オリエンタルランド
 キッコーマン 株式会社
 新日本製鐵 株式会社
 住友不動産 株式会社
 セコム 株式会社
 大成建設 株式会社
 株式会社 竹中工務店
 株式会社 電通
 東京海上火災保険 株式会社
 株式会社 東京三菱銀行
 東京電力 株式会社
 トヨタ自動車 株式会社
 中辻産業株式会社

伊藤忠商事株式会社
 エクソンモービル 有限会社
 大阪日米協会
 オタフクソース株式会社
 オリオンビール 株式会社
 関西電力株式会社
 協和発酵工業株式会社

秋間修
 浅沼澄
 池園悦太郎
 石樽 和夫
 市川比呂也
 犬丸昭
 上原香織
 海老原満
 金子幸子
 加茂康郎
 川田ひろ
 木越純
 小林悦子

財団法人 日商岩井国際交流財団
 財団法人 三菱銀行国際財団
 財団法人 平和中島財団
 財団法人 鹿島平和研究所
 金刀比羅宮

社団法人 日本歯科医師会
 社団法人 日本自動車工業会

日本アイ・ビー・エム 株式会社
 野村ホールディングス株式会社
 株式会社 日立製作所
 富士ゼロックス 株式会社
 富士通 株式会社
 本田技研工業 株式会社
 松下電器産業 株式会社
 三井物産 株式会社
 三井不動産 株式会社
 三菱地所 株式会社
 三菱重工 株式会社
 三菱商事株式会社
 明治安田生命相互保険会社
 メルシャン 株式会社
 橘・フクシマ・咲江

株式会社 公文教育研究会
 神戸日米協会
 住友商事株式会社
 住友スリーエム 株式会社
 日本電気株式会社
 WIP ジャパン 株式会社
 YKK 株式会社

小林規威
 金野洋
 後藤優美
 塩崎哲也
 嶋沢重夫
 鈴木協一
 苫米地俊博
 友未優子
 中瀬正一
 中村信之
 西田尚弘
 古澤昭子
 降旗健人

堀内宗忠
松本安代
宮澤喜一
村上裕子
吉原健吾

和田昭穂
吉原健吾
和田昭穂
松本安代
村上裕子

(敬称略・順不同)

第 57 回日米学生会議日本側報告書

2005 年 11 月 25 日発行

編集

第 57 回日米学生会議日本側実行委員会

荒島由也・出浦寛子・ザンリンダ・杉田道子・袴田隆嗣・福田愛奈・三谷佳孝
参加者報告書編集委員

伊藤朋子・伊藤雅俊・佐藤広大・中里広明・中島朋子・樋口宏

編集責任者

荒島由也 中里広明

発行

(財) 国際教育振興会内 日米学生会議事務局

〒160-0004 東京都新宿区四谷 1-21 Tel/Fax 03-3359-0563

<http://www.jasc-japan.com>

印刷

株式会社 千修




第 57 回日米学生会議実行委員



2005年7月28日 立命館大学びわこ・くさつキャンパス、滋賀

The 57th Japan-America Student Conference
Since 1934

主 催  財団法人 国際教育振興会

企画・運営 第57回日米学生会議実行委員会